陸前高田市文化財調査報告　第33集

雲南・獺沢貝塚・神崎・三日市Ⅱ遺跡発掘調査報告書

平成25年度東日本大震災復興交付金埋蔵文化財発掘調査事業に伴う個人住宅関連遺跡発掘調査

2018年

岩手県陸前高田市教育委員会

雲南・獺沢貝塚・神崎・三日市Ⅱ遺跡発掘調査報告書

平成 25 年度東日本大震災復興交付金埋蔵文化財発掘調査事業に伴う個人住宅関連遺跡発掘調査

2018 年

雲南遺跡出土縄文土器

（1）雲南遺跡出土石核・石鏃・石槍

（2）雲南遺跡出土石匙・楔形石器・箆状石器・スクレイパー

序

陸前高田市は、岩手県南部に位置し、県内では温暖な気候の地域にあり、山、川そして三陸の海がもたらす豊かな自然の恩恵を享受し、縄文時代から現在にいたるまで発展してまいりました。白砂青松で知られる名勝高田松原、国指定史跡の中沢浜貝塚などの歴史文化遺産が数多存在しております。「周知の埋蔵文化財包蔵地」としましては、縄文時代の貝塚跡、墨書土器・刻書土器を出土する古代遺跡、そして中世に築城された城館跡などが市内に約２７０か所存在しており、長い歴史の営みを現在に伝えております。

このような自然や歴史文化遺産を保存し後世に伝え活用していくことは、現在を生きる私たちの責務です。

一方、市勢発展や地域活性化に伴う各種開発等により消滅していく遺跡があることも事実です。このような各種開発等により壊された遺跡を元に戻すことはできず、この遺跡が持つ我々の先人が生きた証は永久に失われてしまいます。

陸前高田市教育委員会では、開発事業や東日本大震災後の様々な復興事業と貴重な遺跡の保護を両立するため、関係機関と事前の協議・調整を行いながら、やむを得ず消滅する遺跡については発掘調査を実施してまいりました。

本書は平成25年度に東日本大震災による復興に係る個人住宅再建に伴い実施した雲南遺跡、獺沢貝塚、神崎遺跡、三日市Ⅱ遺跡における発掘調査結果を収録したものです。

本書が、地域の方々をはじめとした学術研究、教育活動に広く活用され、ひいては文化財保護思想の普及啓蒙に役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたり、ご指導、ご協力をいただきました関係各位に深く御礼申し上げます。

平成30年9月

陸前高田市教育委員会

教育長　金　　賢　治

例　　言

1　本報告書は、平成 25 年度に実施した雲南遺跡、獺沢貝塚、神崎遺跡、三日市Ⅱ遺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2　各遺跡の発掘調査は、個人住宅建築に伴う事前の発掘調査である。調査は岩手県教育委員会の指導を受け、陸前高田市教育委員会が実施した。

3　各遺跡の調査時の遺跡略号は以下の通りである。

雲南遺跡 UN13・獺沢貝塚 UZ13・　神崎遺跡 KZ13・三日市Ⅱ遺跡 MKI13

4　調査期間・調査面積・調査担当者は各章の調査要項に明記した。

5　室内整理期間と整理作業者は以下の通りである。

室内整理期間　平成 29 年 6 月 1 日～12 月 28 日　平成 30 年 1 月 4 日～3 月 31 日

整 理 担 当　佐藤 典邦（陸前高田市教育委員会生涯学習課学芸員）

整 理 作 業　河合 済一（市任期付臨時職員）

菅野 光広（市任期付臨時職員）

志田 優美（市任期付臨時職員）

6　本報告書の遺構写真は各調査担当者が、遺物写真は佐藤が撮影した。出土遺物の水洗・注記作業は一部を除いて終了していた。分類・接合から始まる一連の作業は上記 4 名が行った。

7　本書の執筆分担は以下の通りである。編集は IllustratorCs6 PhotoshopCs6 を使用して佐藤が行った。

Ⅰ　～　Ⅷ（Ⅳ－5 を除く）佐藤　典邦

Ⅳ　－　5　動物遺存体　松崎　哲也（奈良文化財研究所）

附　編　　株式会社古環境研究所

8　分析鑑定及び委託業務は次の方々依頼した（敬称略）。

石質鑑定　白土　豊（大船渡市立博物館）

基準点・水準測量…（有）さくら設計・（株）共立設計

石器・石製品・縄文土器の図化…（株）ラング　（ただし、石核・礫器の一部・軽石製品・土製品は臨時職員作成の原図を佐藤が修正・トレースした）

9　現地調査にあたり、次の機関と方々から指導助言・協力をいただいた。

岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課　大船渡市立博物館　熊谷常正（陸前高田市文化財調査委員）

八木光則（陸前高田市文化財調査委員）

10　各遺跡の発掘調査記録及び出土遺物は陸前高田市教育委員会において保管している。

凡　　例

1　挿図に使用した方位北は座標北を基準としている。

2　遺構断面図のレベルは海抜標高を示す。

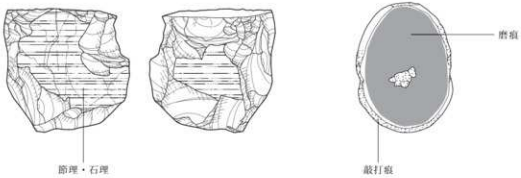
3　検出遺構の表示については次の略号を使用し、種別ごとに番号を付した。

SI：竪穴住居跡　SK：土　坑

4　土色については「新版標準土色帖」（小山・竹原 1997）を使用した。

5　縄文土器のうち、繊維混入と表・裏面に施文のある個体は下図のように表示している。

6　石器のうち、磨痕・敲打痕・節理あるいは石理のある部分は下図のように表示している。その他の調整・使用痕については本文中において説明している。



7　遺構・遺物計測値は特別に記述のない限り、現存値を表記している。単位は表中に示した。

雲南・獺沢貝塚・神崎・三日市Ⅱ遺跡発掘調査報告書

序
例言
凡例

本 文 目 次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

1　調 査 の 経 緯 …… 1
2　調　査　体　制 …… 4

Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 5

1　遺跡の位置と地理的環境 …… 5
2　歴 史 的 環 境 …… 5

Ⅲ　調査と整理の方法 …… 9

1　調　査　方　法 …… 9
2　資　料　整　理 …… 9

Ⅳ　雲　南　遺　跡 …… 10

1　調　査　要　項 …… 10
2　調査区の位置と周辺の遺跡 …… 10
3　基　本　層　序 …… 13
4　調 査 の 成 果 …… 13
5　雲南遺跡から出土した動物遺存体 …… 86

Ⅴ　獺　沢　貝　塚 …… 90

1　調　査　要　項 …… 90
2　調査区の位置と周辺の遺跡 …… 90
3　基　本　層　序 …… 93
4　調 査 の 成 果 …… 93

Ⅵ 神 崎 遺 跡 …… 97

1 調 査 要 項 …… 97
2 調査区の位置と周辺の遺跡 …… 97
3 基 本 層 序 …… 101
4 調 査 の 成 果 …… 101

Ⅶ 三日市Ⅱ遺跡 …… 112

1 調 査 要 項 …… 112
2 調査区の位置と周辺の遺跡 …… 112
3 基 本 層 序 …… 115
4 調 査 の 成 果 …… 115

Ⅷ 総 括 …… 123

1 雲 南 遺 跡 …… 123
2 獺沢貝塚・神崎・三日市Ⅱ遺跡 …… 125

附編 雲南遺跡における自然科学分析 …… 128
附表 …… 131
報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 図 調査遺跡の位置 …… 2
第 2 図 調査遺跡の位置と周辺の貝塚（陸地測量部大正 5 年発行、5 万分の 1 地形図）…… 3
第 3 図 地形分類図 1 …… 6
第 4 図 地形分類図 2 …… 7
第 5 図 雲南遺跡調査区域 …… 11
第 6 図 雲南遺跡と周辺の遺跡 …… 12
第 7 図 雲南遺跡調査区全体図 …… 14
第 8 図 雲南遺跡土層断面図 …… 15
第 9 図 第 1 群（1）第 2 群（2～5）第 3 群（6～23）土器 …… 20
第 10 図 第 3 群土器 …… 21
第 11 図 第 4 群土器 …… 22
第 12 図 第 5 群土器 …… 23

第13図　第5群土器 …… 24
第14図　第6群土器 …… 25
第15図　第6群土器 …… 26
第16図　第6群（1・4・5）第7群（6～9）第8群（2・3） …… 27
第17図　第3群（1）第5群（2）第6群（3～5）土器 …… 28
第18図　第5群土器 …… 29
第19図　第9群土器 …… 30
第20図　第9群土器 …… 31
第21図　第6群（2）第10群（1）土器 …… 32
第22図　第10群土器 …… 33
第23図　第9群土器 …… 34
第24図　第9群土器 …… 35
第25図　第9群土器 …… 36
第26図　第9群土器 …… 37
第27図　第9群土器 …… 38
第28図　第9群土器 …… 39
第29図　第9群土器 …… 40
第30図　第10群土器 …… 41
第31図　第10群土器 …… 42
第32図　第10群土器 …… 43
第33図　第10群土器 …… 44
第34図　第11群（1）第12群（2・3）第13群（4）第14群（5）第15群（6～9） …… 45
第35図　第15群土器 …… 46
第36図　第15群土器 …… 47
第37図　第16群土器 …… 48
第38図　第16群土器 …… 49
第39図　石鏃 …… 51
第40図　石鏃 …… 52
第41図　石鏃（1～12）石槍（13・14） …… 53
第42図　石槍 …… 54
第43図　石槍 …… 55
第44図　石錐（1～11）楔形石器（12）箆状石器（13・14） …… 56
第45図　石匙 …… 57
第46図　スクレイパー …… 58

第 47 図　スクレイパー …… 59
第 48 図　打製石斧（1）磨製石斧（2～6） …… 60
第 49 図　礫器 …… 61
第 50 図　礫器 …… 62
第 51 図　礫器 …… 63
第 52 図　礫器 …… 64
第 53 図　磨石 …… 65
第 54 図　磨石 …… 66
第 55 図　磨石 …… 67
第 56 図　磨石（1～4）敲石（5・6） …… 68
第 57 図　石核 …… 69
第 58 図　石核 …… 70
第 59 図　石核 …… 71
第 60 図　石核 …… 72
第 61 図　石核 …… 73
第 62 図　石核 …… 74
第 63 図　石核 …… 75
第 64 図　石核 …… 76
第 65 図　石核 …… 77
第 66 図　石核 …… 78
第 67 図　石核 …… 79
第 68 図　石核 …… 80
第 69 図　異形石器（1）軽石製品（2～5） …… 81
第 70 図　石剣（1～7）石棒（8） …… 82
第 71 図　石製品（1～3）ミニチュア土器（4・5）土偶（6・7） …… 83
第 72 図　円盤状土製品 …… 85
第 73 図　動物遺存体の組成 …… 86
第 74 図　獺沢貝塚調査在域 …… 91
第 75 図　獺沢貝塚と周辺の遺跡 …… 92
第 76 図　獺沢貝塚調査区全体図・土層断面図 …… 94
第 77 図　縄文土器　石棒　磨製石斧 …… 95
第 78 図　礫器　磨石　凹石　土偶 …… 96
第 79 図　神崎遺跡調査区域 …… 98
第 80 図　神崎遺跡と周辺の遺跡 …… 99

第 81 図　神崎遺跡調査区全体図・土層断面図 …… 100
第 82 図　SI 1・SK 1 平面図・土層断面図 …… 103
第 83 図　SI 1 出土縄文土器（1～3）石鏃（4・5）石錐（6）スクレイパー（7） …… 104
第 84 図　SI 1 出土礫器（1）磨石（敲石兼用 2）・SK 1 出土縄文土器 …… 105
第 85 図　第 1 群土器（1・2）第 2 群土器（3～5） …… 106
第 86 図　第 2 群（1～4）第 3 群（5・6）第 4 群（7～9）第 5 群（10）第 6 群（11）第 7 群（12・13）土器 …… 107
第 87 図　第 7 群（1～3）第 8 群（4～9）第 9 群（11～15）土器 …… 108
第 88 図　第 9 群土器 …… 109
第 89 図　石鏃（1～3）石匙（4）スクレイパー（5）磨製石斧（6）礫器（7） …… 110
第 90 図　磨石（1・2）敲石（3）凹石（4） …… 111
第 91 図　三日市Ⅱ遺跡調査区域 …… 113
第 92 図　三日市Ⅱ遺跡と周辺の遺跡 …… 114
第 93 図　三日市Ⅱ遺跡調査区全体図 …… 115
第 94 図　SI 1 平面図・土層断面図 …… 116
第 95 図　SI 1 出土土師器（1～8）土製紡錘車（9） …… 117
第 96 図　縄文土器（1～7）石鏃（8～23） …… 118
第 97 図　石鏃（1～3）尖頭器（4・5）石槍（6～9） …… 119
第 98 図　石錐（1～7）石匙（8～12） …… 120
第 99 図　石匙（1～6）スクレイパー（7） …… 121
第 100 図　小形打製石斧 …… 122
第 101 図　石核・石槍・石鏃・石匙のプロフィール …… 124

表　目　次

第 1 表　雲南遺跡出土動物遺存体種名表 …… 86
第 2 表　雲南遺跡出土動物遺存体一覧表 …… 88

図　版　目　次

原色図版 1　雲南遺跡出土縄文土器
原色図版 2（1）雲南遺跡出土石核・石鏃・石槍
（2）雲南遺跡出土石匙・楔形石器・箆状石器・スクレイパー
図版 1　（1）調査区遠景（北より）
（2）調査区全景（南より）
図版 2　（1）谷部の状況（東より）

（2）西壁土層
図版 3 （1）南壁土層
（2）調査状況
図版 4 第3群土器
図版 5 （1）口縁細部
（2）第5群土器
図版 6 （1）口縁細部
（2）第5群土器
図版 7 第6群土器
図版 8 第9群土器
図版 9 （1）口縁細部
（2）第9群土器
図版 10 （1）第9群土器
（2）第10群土器
図版 11 （1）口縁細部
(2)第１０群土器
図版 12 第1群 第2群 第3群土器
図版 13 第3群 第4群土器
図版 14 第4群 第5群土器
図版 15 第5群 第6群土器
図版 16 第6群土器
図版 17 第6群 第7群 第8群土器
図版 18 第9群土器
図版 19 第9群土器
図版 20 第9群土器
図版 21 第9群土器
図版 22 第9群 第10群土器
図版 23 第10群土器
図版 24 第10群土器
図版 25 第11群 第12群 第13群 第14群 第15群土器
図版 26 第15群 第16群土器
図版 27 石鏃 石槍
図版 28 石槍
図版 29 石錐 楔形石器 箆状石器 石匙

図版 30　石匙　スクレイパー
図版 31　スクレイパー　打製石斧　磨製石斧
図版 32　礫器　粘板岩片
図版 33　磨石
図版 34　磨石　敲石
図版 35　石核
図版 36　石核
図版 37　異形石器　軽石製品
図版 38　石剣　石棒
図版 39　石製品　ミニチュア土器　土偶　円盤状土製品
図版 40　（1）2区表土除去
　　（2）1区全景（北より）
図版 41　（1）2区西半部全景
　　（2）調査区北壁西半部
図版 42　（1）調査区北壁東半部
　　（2）作業状況
図版 43　縄文土器　土偶　磨製石斧　石棒　礫器　磨石　凹石
図版 44　（1）調査前状況
　　（2）調査区全景（北より）
図版 45　（1）SI 1 全景（北西より）
　　（2）SI 1 炉（西より）
図版 46　（1）SI 1 炉検出状況（西より）
　　（2）SI 1 炉検出状況（東より）
図版 47　（1）SI 1 炉断面（西より）
　　（2）沢（自然流路）土層断面
図版 48　（1）SK 1 全景
　　（2）SK 1 遺物出土状況
図版 49　（1）作業状況
　　（2）作業状況
図版 50　SI 1 出土縄文土器　石鏃　石錐　スクレイパー　礫器　磨石（敲石兼用）
図版 51　SK1 出土縄文土器
図版 52　第1群　第2群　第3群　第4群　第5群土器
図版 53　第6群　第7群　第8群　第9群土器
図版 54　第9群土器

図版 55　石鏃　石匙　スクレイパー　磨製石斧　礫器　磨石　敲石　凹石
図版 56　（1）調査区近景
　　（2）SI 1 全景（南より）
図版 57　（1）遺物出土状況
　　（2）遺物出土状況
図版 58　SI 1 出土土師器　土製紡錘車
図版 59　縄文土器　石鏃　尖頭器　石槍
図版 60　石錐　石匙　スクレイパー　小形打製石斧

Ⅰ　調査に至る経過

1　調 査 の 経 緯

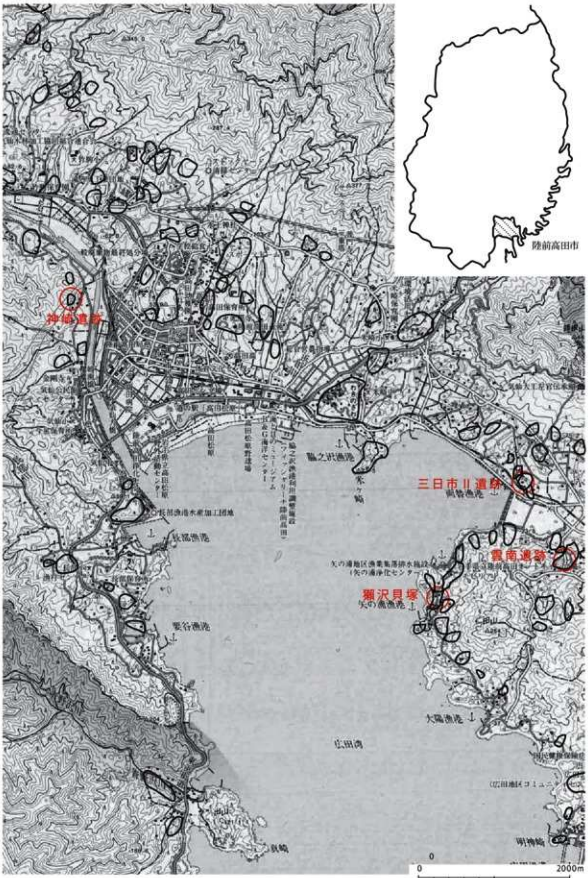
本書は、平成 25 年度に実施した雲南遺跡・獺沢貝塚・神崎遺跡・三日市Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。調査原因はいずれも個人の宅地造成および住宅建築であった。

雲南遺跡は、平成 24 年 6 月 5 日付、陸前高田市横田町字久連坪 17－1 在住の阿部弘一氏から陸前高田市小友町字雲南 20－1 の地所につき宅地造成の届出があった。陸前高田市教育委員会では「事前の発掘調査が必要と思われる」との所見を記した現地調査書を添付して、平成 24 年 6 月 8 日付、陸高教生第 30 号にて県教育委員会あて進達した。これに対し、同年 6 月 12 日付、教生第 3－95 号通知には「工事着手前に発掘調査を実施」との指示がなされた。陸前高田市教育委員会は平成 24 年 8 月 10 日に試掘調査を行い、「沢に堆積した土層が深く、遺物が出土する」ため本調査の実施を決定し、翌平成 25 年 5 月 22 日から 7 月 9 日までの期間、調査を行った。

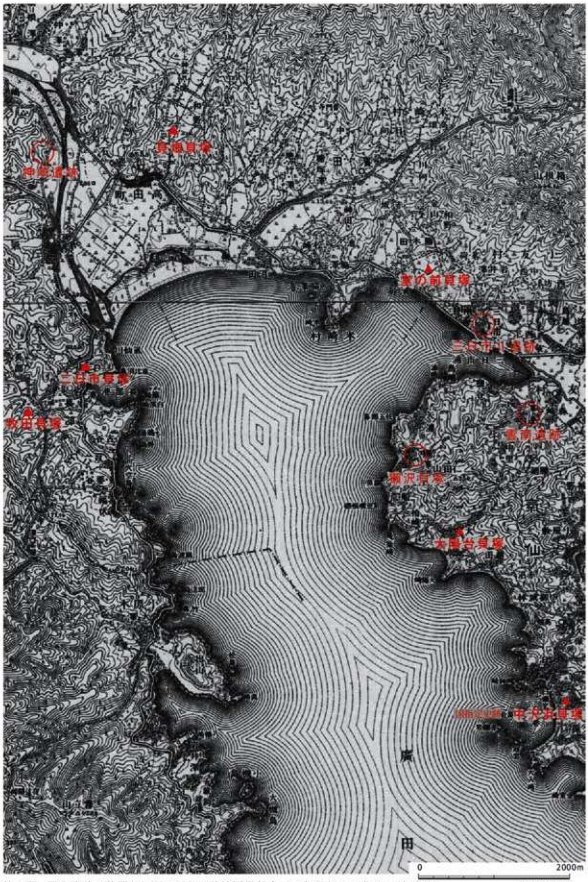
獺沢貝塚は、平成 24 年 2 月 10 日付、陸前高田市小友町字獺沢 66 在住の佐藤孝夫氏から陸前高田市小友町字獺沢 64－1 の地所につき宅地造成の届出があった。陸前高田市教育委員会は「事前の発掘調査が必要と考えられる」との所見を記した現地調査書を添付して、平成 24 年 2 月 14 日付、陸高教生第 166 号にて県教育委員会あて進達した。同年 2 月 16 日付、教生第 3－294 号の通知には「工事着手前に発掘調査を実施」との指示があった。陸前高田市教育委員会は平成 24 年 8 月 9 日に試掘調査を行い、「調査区南端部に遺物包含層が部分的に残存する」との結果を得た。本調査は翌平成 25 年 8 月 29 日から 9 月 13 日までの期間、実施した。

神崎遺跡については、平成 25 年 3 月 28 日付、陸前高田市気仙町字中井 24 在住の村上恒男氏から陸前高田市気仙町字神崎 98－1 の地所につき宅地造成の届出があった。陸前高田市教育委員会は「試掘調査の対応」が必要との所見を記して、同年 3 月 29 日付、陸高教生第 515 号にて県教育委員会あて進達した。同年同月日付、教生第 3－444 号の通知には「工事着手前の試掘調査」の指示があり、陸前高田市教育委員会は平成 25 年 8 月 19 日と 22 日に試掘調査を行った。調査の結果、焼土と縄文土器片の出土があったため、平成 25 年 10 月 3 日から 11 月 22 日までの期間、本調査を実施した。

三日市Ⅱ遺跡は、平成 25 年 11 月 29 日付、陸前高田市小友町字三日市 14 在住の鈴木信男氏から陸前高田市小友町字三日市 21－10、21－12、22－2・3 の地所につき個人住宅建築の届出があった。陸前高田市教育委員会は「試掘調査の対応」が必要との所見を記して、同年同月日付、陸高



第１図　調査遺跡の位置　(1/50000)



第２図　調査遺跡の位置と周辺の貝塚（陸地測量部大正５年発行５万分の１地形図）　(1/50000)

教生第 594 号にて県教育委員会あて進達した。平成 25 年 12 月 3 日付、教生第３－446 号の通知には「工事着手前の試掘調査」の指示があり、陸前高田市教育委員会は同年 12 月 13 日に試掘調査を実施した。調査の結果、竪穴住居跡と考えられる遺構が確認された。本調査は平成 25 年 12 月 17 日から平成 26 年 1 月 15 日までの期間、実施した。

2 調 査 体 制

調査主体	陸前高田市教育委員会	
教育長	山田市雄	
総括	大久保裕明	（教育次長兼生涯学習課長）
事務局	伊藤真基	（同課生涯学習課長補佐）
	吉田幸喜	（同課生涯学習係長）
	桐木　亮	（同課主任主事・京都市教育委員会より派遣）
	曳地隆元	（同課学芸員）
調査員	葛西智義	（同課主査・深川市教育委員会より派遣）
	安井宣也	（同課主任・奈良市教育委員会より派遣）
	阿部泰之	（同課主任主事・福岡市より派遣　平成 25 年 4 月～平成 25 年 9 月）
	今井隆博	（同課主事・福岡市より派遣　平成 25 年 10 月～平成 26 年 3 月）
	遠藤勝博	（同課発掘調査員）
	後藤　円	（同課発掘調査員）
作業員	荒木コギク、荒木美智代、梅木良子、及川亜紗美、及川恵美子、大和田武喜、菅野貴恵、菅野トシエ、菅野弘利、菅野由美子、熊谷望、後藤美知香、金野由紀夫、佐々木栄子、佐々木聡、佐々木のり子、佐々木美佳、佐々木道子、佐藤キヨ子、佐藤美代子、菅原とみ子、鈴木貞子、高橋景奈、高橋由美、戸羽さおり、戸羽由美、三嶋登喜子、村上菜穂子、村上紀子、村上由美子、山谷富助、横澤桐子、渡部アヤ子	

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と地理的環境

岩手県陸前高田市は市域の中央部を北から南に向かって流れる気仙川によって、東西にほぼ二分されている。この気仙川は、広田半島と唐桑半島に囲まれた広田湾に注いでいる。海岸線は典型的リアス式海岸であって景観は複雑かつ多様である。

気仙川左岸は、氷上花崗岩で有名な標高 874.7m の氷上山と白亜紀花崗岩が分布する広田半島が景観を形成している。一方、気仙川右岸は古生層の石灰岩・粘板岩・砂岩・頁岩が多く分布し、矢作町の仙婆巌は黒灰色石灰岩の奇勝である。

市域の地形区分は、気仙川流域の気仙川低地を中心として、東側に陸前高田丘陵が南北方向に延び、さらに、その東に氷上山山地が接している。陸前高田丘陵の南東には箱根山山地が分布し、この山地の南側は狭隘な小友低地である。この低地は広田半島との境界に位置している。縄文時代貝塚の多くが分布する広田半島は、西側の仁田山山地と東側の末崎丘陵に区分される。末崎丘陵側には谷底平野・三角州が分布し、広田低地と呼ばれている。

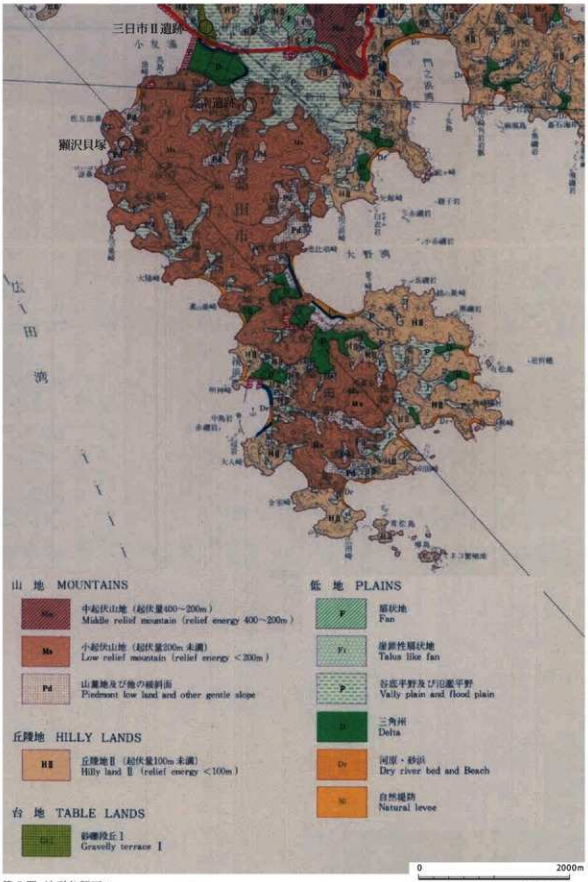
気仙川低地の西側は気仙川に注ぐ矢作川を境界に、北側の叶倉山山地と南側の笹長根山山地に区分される。気仙川・矢作川の流域は谷底平野が分布している。気仙川低地東側の山地と谷底平野の境界には、山麓・丘陵地・段丘が比較的広範囲に拡がっているのに対し、叶倉山・笹長根山山地と谷底平野の境界にこれら地形の分布は少ない。

第３図と第４図には本報告書の４遺跡の位置を地形分類図に示した。雲南遺跡は仁田山山地と小友低地の境界付近に、獺沢貝塚は海岸線へと続く山麓地・斜面地に、三日市Ⅱ遺跡は小友低地に接する砂礫段丘上に、神崎遺跡は気仙川右岸には稀な広い丘陵地に位置している。

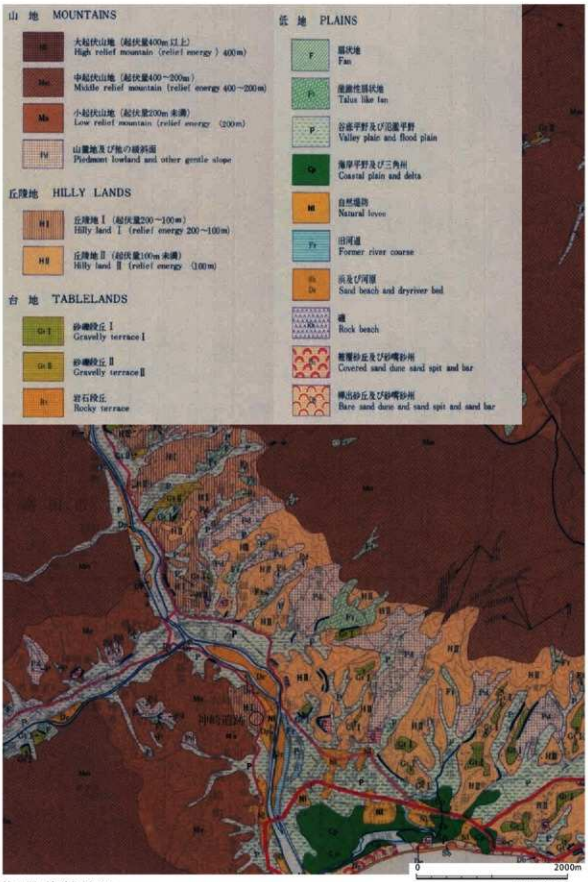
2　歴史的環境

市内に数多く分布する縄文時代の遺跡は、山麓地・丘陵地および砂礫段丘上に分布している。弥生・古墳・奈良・平安時代の遺跡は少ないが、狭隘な三角州や谷底平野に隣接する丘陵地・砂礫段丘上に立地している。

本報告書の獺沢貝塚をはじめとして、陸前高田市内には国指定史跡中沢浜貝塚・門前貝塚・大陽



第３図 地形分類図Ⅰ (1/50000)



第４図　地形分類図２　(1/50000)

台貝塚 ・牧田貝塚 等、考古学史あるいは縄文時代の土器型式・骨角製漁具の研究史上、著名な貝塚が多く存在している。1998 年に刊行された「岩手の貝塚」(岩手県教育委員会　1998) には、貝塚として 23 遺跡が報告されている。この内、5遺跡については消滅の記載があるので、現状では市内に存在する貝塚は 18 ヵ所と考えられる。

弥生時代の資料は主に土器である。中沢浜貝塚では、弥生時代前期・中期の良好な土器が出土している。広田半島北東部の長洞遺跡では、石切場出土と言われている中期の壷形土器が知られている。また、矢作町山崎遺跡から弥生時代中期の土器が、米崎町川内遺跡では弥生時代前期・中期の土器が多数出土した(佐藤正彦他　2003)。後期では気仙町愛宕下Ⅱ遺跡の土器資料があり、続縄文土器の破片が出土している。

古墳時代の資料は非常に少なく、高田町在住の個人蔵の古墳時代前期と思われる土器が知られているが、残念ながら出土地は不明である。他に第一中学校校庭出土の栗囲式片口壷がある。

奈良時代では、竹駒町相川Ⅰ遺跡・小友町松山前遺跡・高田町貝畑貝塚から竪穴住居跡が発見されている。本報告書の三日市Ⅱ遺跡でも 8 世紀後半の竪穴住居跡を 1 棟検出した。

平安時代の竪穴住居跡は、横田町友沼Ⅲ遺跡・高田町貝畑貝塚・気仙町愛宕下Ⅱ遺跡から検出されている。また、高田町西和野Ⅰ遺跡では方形周溝 1 基が発見されている。

奈良・平安時代の文字資料では高田町小泉遺跡の墨書土器、気仙町愛宕下Ⅱ遺跡の刻書土器が古代気仙郡との関連で近年注目されている。土器以外では小友町岩井沢・気仙町三本松・矢作町愛宕下から蕨手刀が出土している。

古代末期から中世は、金山関係の遺跡や多数の城館跡が市内各所に存在している。以上のように陸前高田市内に残る縄文時代から中世の埋蔵文化財は多種・多様である。

Ⅲ　調査と整理の方法

1　調　査　方　法

試掘調査において遺構検出面までの深さと層序は確認できていたので、表土は重機を使用して掘削した。検出した遺構は２分法・４分法を原則として掘り下げ・精査を行ったが、ピットについては埋土の色調などの特徴を分類注記して完掘したものがある。

遺構は SI・SK といった記号で表記し、出土遺物は層別に取り上げをおこなっている。平面図は簡易的な遣り方測量、セクション図は絶対標高を基準とし、1/20 縮尺で作成している。遺物出土状況図の作成は行っていないが、出土状況写真をもってこれに代えている。

写真撮影は 35mm デジタル一眼レフカメラと 35mm フィルム一眼レフカメラ（モノクロ・カラーリバーサル）、コンパクトデジタルカメラによる撮影を行った。

2　資　料　整　理

野外調査で作成した遺構図の修正作業を行い、トレース及び版組は Illustrator CS6 を使用した。調査時撮影写真は Photoshop CS6 を使用して版組作成を行った。土層注記は調査時の記載を一部変更した部分がある。

出土遺物の水洗・注記・遺物台帳登録は野外調査と並行して実施している。石器分類の誤りは整理作業中に訂正したものがある。

報告書掲載遺物の選択後、土器接合・復元・拓本・実測を行い、トレースは Illustrator CS6 を使用した。石核以外の石器・石製品・縄文土器の実測・トレースは株式会社ラングに委託した。版組は Illustrator CS6 を使用している。各遺物の縮尺はスケールに表記した。

遺物写真は 35mm デジタル一眼レフカメラを使用した。版組は Photoshop CS6 と Illustrator CS6 を併用している。

本文・遺構遺物観察表の作成後、報告書全体の編集作業は上記した各ソフトで行い、印刷所へ全てデジタルデーターで入稿した。

Ⅳ 雲 南 遺 跡

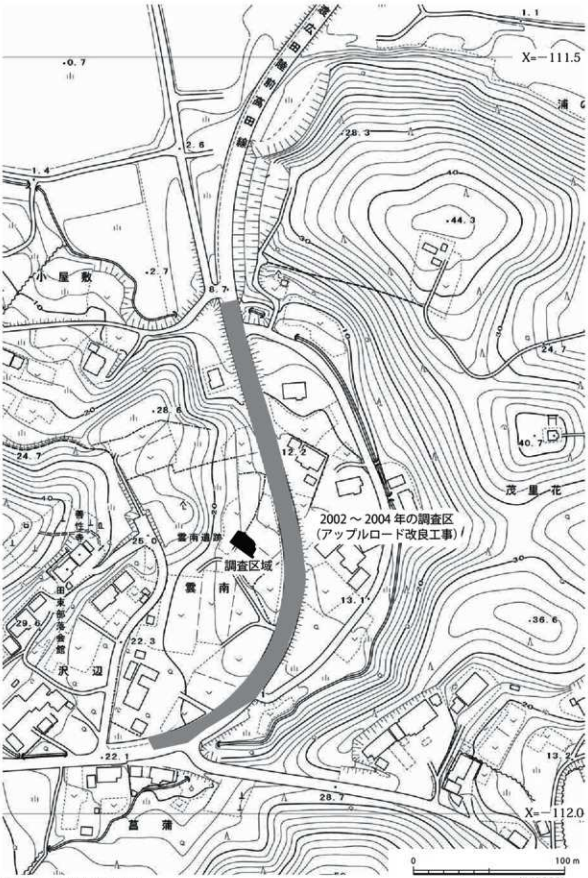
1 調 査 要 項

遺 跡 名 称　雲南遺跡
遺 跡 略 号　UN13（岩手県遺跡登録台帳番号 NF78－1214）
所　在　地　陸前高田市小友町字雲南 20
遺 跡 現 況　畑地
遺 跡 性 格　集落跡
遺 跡 時 期　縄文時代
調 査 原 因　個人宅地造成
調 査 期 間　平成 25 年 5 月 22 日～平成 25 年 7 月 9 日
調 査 面 積　113.6 ㎡
調 査 主 体 者　陸前高田市教育委員会
調 査 担 当 者　陸前高田市教育委員会生涯学習課
調査担当職員　阿部泰之（同課主任主事・福岡市より派遣）
　　後藤　円（同課発掘調査員）

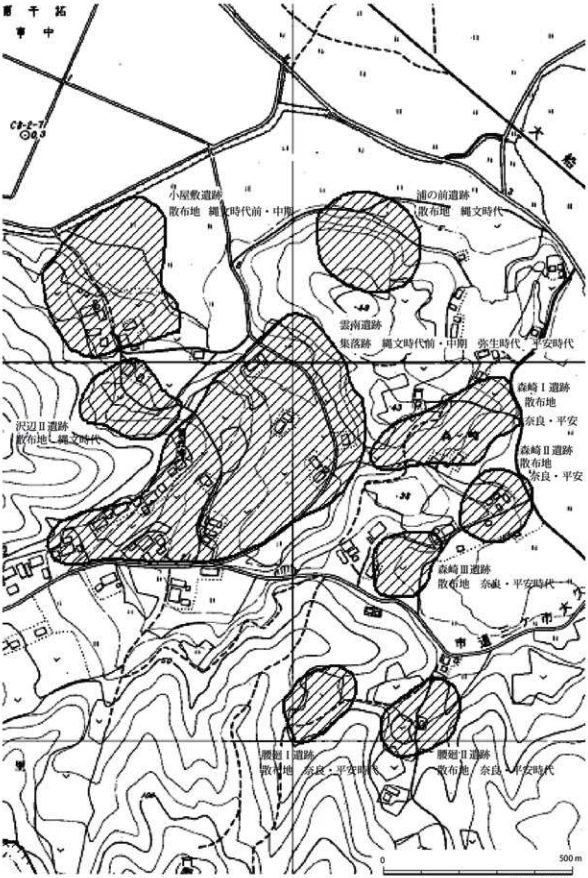
2　調査区の位置と周辺の遺跡

雲南遺跡は小友低地の南側に位置する遺跡面積 71000 ㎡の大規模な縄文時代集落跡である（第 6 図）。調査区域は遺跡範囲のほぼ中央に位置している（第 5 図）。東側は 2002 年度から 2004 年度にかけて主要地方道大船渡広田陸前高田線（アップルロード）改良工事を原因とする発掘調査が行われた区域である（陸前高田市文化財調査報告書第 26 集　2006 年）。調査面積は 5420.33 ㎡であった。縄文時代前期から中期の遺構・遺物が多数発見されているが、特に前期の遺物包含層出土遺物やマグロ魚骨層が注目された調査であった。

本遺跡の北側には、東から浦の前・小屋敷・沢辺Ⅱの縄文時代遺跡が隣接している。一方、南東側には、奈良・平安時代の森崎Ⅰ・森崎Ⅱ・森崎Ⅲ・腰廻Ⅰ・腰廻Ⅱ遺跡が集中的に分布する。縄文時代と奈良・平安時代の遺跡は明確に分布域が異なっている（第 6 図）。



第５図　雲南遺跡調査区域



第6図 雲南遺跡と周辺の遺跡 (1/10000)

3　基　本　層　序

平成 24 年に実施した試掘調査の所見は以下の通りである。

第 1 層　褐色土層　層厚 10cm、表土、草木根を含む。

第 2 層　褐色シルト質土層　層厚 20～60cm、耕作土、遺物を含む。

第 3 層　暗褐色粘土質土層　層厚 10～30cm、大形礫と遺物を含む。

第 4 層　暗褐色土層　層厚 10cm、地山との漸移層、黄褐色粘土質土が混じる。

第 5 層　黄褐色粘土質土層　地山、10～60cm 大の礫を含む。

4　調　査　の　成　果

1　遺物包含層

調査区は標高 14m～16mの小起状山地斜面に位置している（第 7 図）。東側は 2002 年～2004 年に調査された谷底平野である。斜面に堆積した遺物が出土する土層は、自然堆積層であった（第 8 図）。調査区西壁の観察によると 1 層から 6 層は畑地造成時の盛土、以下 7 層から 18 層までが地山の黄褐色粘土質土層上に堆積したことになる。7 層から 13 層まで水成堆積層であるとの観察記録があり、調査区の斜面に廃棄されたか、さらに上方から流れ込んだかのいずれか確証はないが、各種遺物はかなり移動していると考えられる。

14 層はマグロ魚骨を包含する層であるが、時期の特定に関する記載はない。ただ、14 層から 18 層まで水成堆積層であるとの所見はないので、斜面上方から次第に崩落した土砂が堆積した土層と思われる。また、16 層は火山灰ブロックを含んでいるので、堆積の進行は比較的緩やかであったと考えられる。

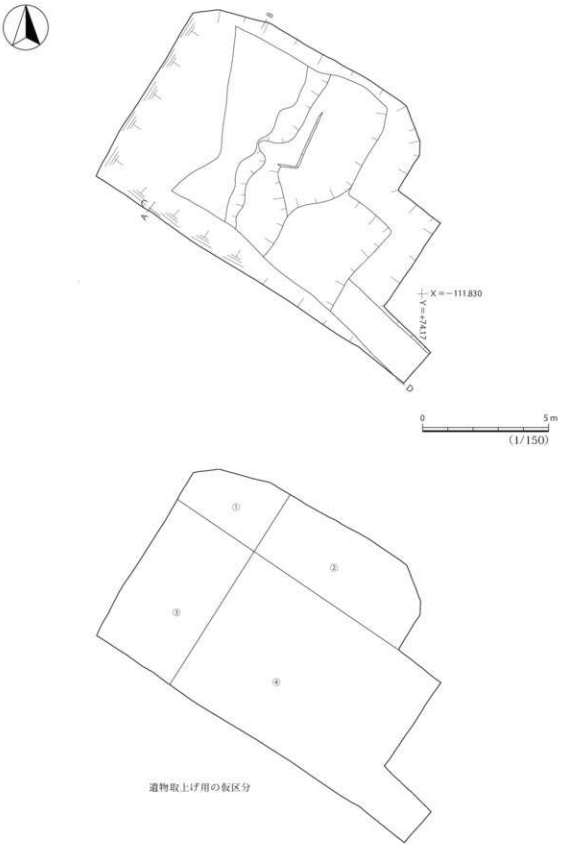
下層の 17・18 層と地山面には花崗岩の巨礫が多く、斜面上方からの転石である。出土遺物の取上げ記録に最下層出土とあった縄文土器片は、繊維を混入する数点の小破片であった。遺物が少ないとの 17 層土層注記と 18 層に遺物出土の記載がないので、17 層は遺物が出土する最下層と考えられる。

2　遺物包含層出土の縄文土器・弥生土器

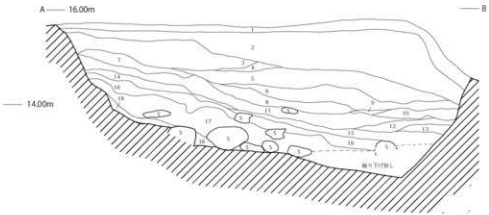
第 1 群土器（第 9 図 1）早期の沈線文土器片が 1 点出土した。

第 2 群土器（第 9 図 2 ～ 5）前期大木 2 a 式土器。爪形文・沈線文が施文されている。

第 3 群土器（第 9 図 6 ～23　第 10 図　第 17 図 1）前期大木 2 b 式土器。

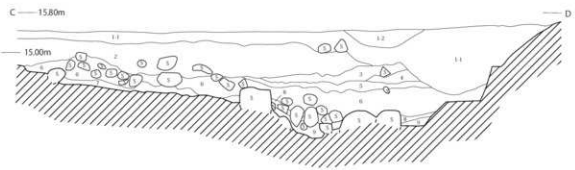


第７図　雲南遺跡調査区全体図



調査区南壁土層断面　A－B

1　表土　　褐灰粘砂　中粘砂　炭化物粒含む　撹乱痕明の盛り土　しまり強
2　2.5YR2　暗赤褐色土　褐灰粘砂　中粘砂　炭化物粒含む　撹乱痕明の盛り土　しまり強
3　2.5YR1　黒灰色土　褐灰粘砂　中粘砂　炭化物粒含む　撹乱痕明の盛り土　しまり強
4　10YR4/1　褐灰色土　褐灰粘砂　中粘砂　炭化物粒含む　撹乱痕明の盛り土　しまり強
5　5Y4/1　灰色土　褐灰粘砂　中粘砂　炭化物粒含む　撹乱痕明の盛り土　しまり強
6　2.5YR1　黒灰色土　褐灰粘砂　中粘砂　炭化物粒含む　撹乱痕明の盛り土　しまり強
7　10YR3/3　暗褐色土　褐灰粘砂　中粘砂－褐粘砂　赤成層細粒　強い焼けがあったものと見られる　細かい炭化物粒含む　花コウ岩レキ含む　細粒砂－中粘砂　しまりやや強
8　10YR4/1　褐灰色土　褐灰粘砂　中粘砂－褐粘砂　赤成層細粒　強い焼けがあったものと見られる　細かい炭化物粒含む　花コウ岩レキ含む　細粒砂－中粘砂　しまりやや強
9　2.5YR1　黒灰色土　φ1cm程の炭化物粒含む　シルト　赤成層細粒　しまりやや強
10　2.5YR2/2　暗灰黒色土　φ1cm程の炭化物粒含む　シルト　赤成層細粒　しまりやや強
11　10YR4/1　褐灰色土　φ1cm程の炭化物粒含む　シルト　赤成層細粒　しまりやや強
12　2.5YR3/1　黒灰色土　細かい炭化物粒含む　シルト　細粒砂－中粘砂　赤成層細粒　しまりやや強
13　2.5YR2/2　暗灰黒色土　細かい炭化物粒含む　シルト　細粒砂－中粘砂　赤成層細粒　しまりやや強
14　10YR4/2　灰黒褐色土　φ2.5ミリ程の砂粒含む　炭色含む　褐粘砂－シルト　しまりやや強
15　10YR4/1　褐灰色土　φ2.5ミリ程の砂粒少量含む　炭化物粒含む
16　7.5YR3/1　黒色土　砂粒はごくごく少ない　φ2～5cm程の丸石混ブロック（5.0YR3/4　にぶい赤）含む　しまりやや強
17　10YR3/1　黒色土　φ2～5.5ミリ程の砂粒多く含む　内部の褐細粒　撹乱少ない　花コウ岩はレキ多い　しまり非常に強い
18　10YR3/3　暗褐色土　φ2.5ミリ程の砂粒少量含む



調査区南壁土層断面　C－D

1-1　10YR3/3　暗褐色土　しまりやや弱
1-2　10YR3/3　暗褐色土　しまりやや弱
2　10YR3/3　黒褐色土　砂粒1～2%　炭化物1%　土器4片2%　しまりやや強
3　10YR4/1　褐灰色土　砂粒1～2%　しまりやや強
4　10YR3/4　にぶい黒褐色土　しまりやや強
5　10YR3/2　黒褐色土　砂粒2%　丸石混ブロック多り　しまりやや強
6　10YR2/1　黒色土　砂粒3%　しまりやや強
7　10YR4/4　褐色土　しまりやや強
8　7.5YR3/3　暗褐色土　しまりやや強
9　10YR3/6　黒褐色粘土－砂質粘土　しまりや

0　2m
(1/80)

第８図　雲南遺跡土層断面図

1類（第9図6・7・9～14）口縁部に刻目のある横位の隆帯が付いている。流体の幅は狭い。

2類（第9図22）口縁部横位の隆帯上に縦の刻目がある。また、剥離している部分が多いが縦に2本、刻目の付いた隆帯がある。

3類（第9図8　第10図1・3）口縁部から縦位に刻目あるいは押圧のある隆帯が貼付される。

4類（第10図5・7）胴部に刻目のある楕円形の隆帯が貼付される。

5類（第9図15～21・23　第10図2・4・6　第17図1）円形竹管・多截竹管の連続刺突が施文される。口縁が肥厚し、有段の個体がある。第17図1は円孔のある4個の山形突起が並んでいる。4個で一組1単位であって、この個体の場合では2単位の山形突起が配置されている。円孔の周囲と口唇部には円形竹管の刺突があり、突起頂部には刻目がある。

6類（第10図8～19）胴部破片を一括。単軸絡条体第3類が多いが、他に単軸絡条体第5類・付加条2種がある。

第4群土器（第11図）前期大木3式土器。

1類（第11図1）波状の隆帯が口縁部に貼付される。

2類（第11図2～8）口辺・頸部に横位の刻目隆帯が貼付されている。横位隆帯下方に鋸歯状沈線あるいは刻目のある円形隆帯貼付の個体がある。口縁部が大きく外反する。

3類（第11図9・11～15）円形竹管の刺突文が特徴的である。縦に並べて施文されるものや弧状・鋸歯状の沈線と組み合う例がある。13は矩形の沈線と多截竹管の刺突文が施文されている。

4類（第11図10）矩形の沈線文が施文されている。口縁部が大きく外反する。

第5群土器（第12図　第13図　第17図2　第18図）前期大木4式土器。

1類（第12図　第13図7～10・12　第17図2　第18図）口縁部外傾する深鉢と大きく外反する深鉢の2形態がある。口縁部から胴部上半部に梯子状・X字状・半円形・弧状・ハート形・波状・斜行・横走の貼付文がある。口縁部外傾する深鉢の口唇部にはS字状装飾体が、大きく外反する深鉢には口唇部に波状文と口縁部裏面に渦文が貼付されている。

2類（第13図1～6）口縁部外傾する深鉢に幅の広い貼付文がある。曲線的あるいは樹枝状の文様が特徴的である。

3類（第13図11）沈線による波状文が頸部に施文される。口縁部は外反する。

第6群土器（第14図　第15図　第16図1・4・5　第17図3～5　第21図2）前期大木5a式土器。

1類（第14図1～10　第17図3・4）口縁部外傾する深鉢形土器。口縁部に鋸歯状装飾体を持ち、口縁から胴部上半に梯子状・鋸歯状・小波状の貼付文がある。

2類（第14図11～14　第15図1～6）口縁部外傾する深鉢形土器の口縁部に鋸歯状装飾体・円環状突起があり、口縁部から胴部上半に沈線による鋸歯状・小波状・渦状・円形の文様が施文されている。

3類（第15図7・8　第16図1　第17図5　第21図2）口縁部外傾する長胴形の深鉢形土器。口縁部に刺突のある横位の隆帯が貼付されている。

４類（第16図４・５）口縁部外傾する深鉢形土器。単軸絡条体第１類のみ施文されている。

５類（第15図９～12）口縁部外傾または外反する。口縁部から胴部に沈線による斜格子文がある。

第７群土器（第16図６～９）前期大木５ｂ式土器。

１類（第16図６～８）口縁部外傾する。細隆線に刻目があり、鋸歯状・斜格子・弧状の細隆線が貼付されている。

２類（第16図９）口縁部外反する。細隆線に刺突があり、頸部に鋸歯状・横位の細隆線が貼付されている。

第８群土器（第16図２・３）諸磯ａ・ｂ式に類似の個体。２は諸磯ａ式肋骨文の模倣，３は諸磯ｂ式の爪形文と考えられる。

第９群土器（第19図　第20図　第23図～第29図）大木６式土器。

１類（第23図１・２）肥厚した口縁の上下端部に刻目が施される。５ｂ式鋸歯状装飾体に系統が辿れる個体である。おそらく球胴形の器形になると考えられる。

２類（第19図１・２　第23図３～10　第24図）長胴形の口縁部である。口縁部が肥厚し文様帯の幅が狭い個体を一括した。平縁・波状縁が多いが、第24図１は双頭波状口縁である。第23図８は波頂部にイノシシの獣面装飾が表現されている。文様は、半球形・縦位・山形の貼付文あるいは沈線による山形・弧状・小波状・綾杉文が施文され多様である。頸部文様帯に連続刺突を施す個体がみられるが、口縁部の平行沈線の間にも施文されている。

３類（第25図１～８）口縁部は肥厚せず外傾する長胴形。ただし、口縁裏面が突出する個体がみられる。縦位の比較的細い隆帯と弧状・同心円状の隆帯が貼付されているが、後者には隆帯上に細かな刻目が施される。連続刺突と波状・斜格子の沈線が施文されている。

４類（第25図９～14）長胴形の頸部。横位の区画線・山形・波状の沈線文が多い。隆帯には横位とボタン状があり、細かい刻目が施された個体もある。

５類（第26図１・２）長胴形の胴部。Ｘ字状の沈線文が施文されている。

６類（第25図15・16　第26図３）長胴形の胴部。縦・横の区画線の間に斜線が施文される。

７類（第26図４～６）長胴形の胴部。縦方向の鋸歯状・波状沈線が施文される。

８類（第19図４）長胴形の胴部。縦方向区画線の始点と中位に太い弧状沈線が施文される。

９類（第26図７～９）球胴形の口縁部。口縁部肥厚して有段である。刻目・弧状・円形刺突が施文される。

10類（第27図１～９　第19図３）球胴形の口縁部。口縁部肥厚して、文様帯幅が狭い。弧状・山形・縦位の隆帯貼付、弧状・山形・渦状の沈線文、弧状・山形・円形・平行沈線間の連続刺突文が施文されている。

11類（第20図１　第27図10～15　第28図１・２）球胴形の口縁部。口縁部肥厚せず外傾する個体が多く、文様帯幅は広い。ただし口縁裏面は肥厚して突出する。平行沈線間を弧状・縦位の沈線により充填する。第28図１は双頭波状口縁とＵ字形の貼付文がある。第20図１は口縁裏面

肥厚突出し、台状部の長い器形である。平縁に山形突起が付き、口縁部には小突起の貼付と縦位・横位の連続刺突が施文されている。

12類（第 28 図３～８）球胴形の胴部。弧状・波状・山形・鋸歯状の沈線文と竹管連続刺突・ボタン状貼付文・押引き文の施された渦状の貼付文があり、文様は多様である。

13類（第 28 図９～12）球胴形の胴部。沈線による入組み渦状文が単位文様である。平行沈線間を弧状・縦位の沈線により充填する。

14類（第 29 図６～８・13）浮線文系球胴形のうち口縁部が肥厚する個体。弧状・波状・縦位の浮線文とボタン状貼付文がある。

15類（第 29 図９～12）浮線文系球胴形のうち口縁部裏面が肥厚突出する個体。細沈線の充填施文と三角形刺突が特徴的である。ただし、10 は三角形の陰刻である。渦状文が単位文様である。

16類（第２９図４・５）口縁外傾する器形。横位と渦状の浮線文が施文されている。４には横位と縦位に波状沈線が施文されている。

17類（第 29 図３）口縁外傾し肥厚する。下端は三角形の連続刺突のため鋸歯状を呈する。以下、縦の細線が充填施文されている。

18類（第 29 図１・２）口縁やや内弯して外傾する。口縁部は刺突のある隆帯と山形の沈線文、胴部との境界には擬縄紐隆帯が貼付されている。

19類（第 29 図 14）口縁やや内弯して外傾する。口縁部上端に横位の連続刺突がある。

20類（第 29 図 15）口縁部に向かってやや外傾し、波状文が施文される。胴部は内弯する。

21類（第 20 図２）口縁部肥厚して垂直に立ち上がる。頸部から内弯し、胴部は球胴形である。横走と波状の沈線が口縁部から胴部上半に施文されている。

22類（第 71 図４・５）ミニチュア土器が２点出土した。

第 10 群土器（第 21 図１　第 22 図　第 30 図～第 33 図）大木７ａ式土器。

１類（第 30 図）大木６式長胴形系統の深鉢形土器。口縁部文様帯の拡大が認められる。幅広い隆帯や２段原体の側面圧痕・結節回転がある。３には口縁に縦の橋状把手と双頭波状の名残りと考えられるＶ字形の切り込みがある。

２類（第 31 図１・２・４・９・10）大木６式球胴形系統の土器。刻目のある弧状の隆帯と細沈線の充填が特徴的である。

３類（第 31 図７）口縁部内弯する深鉢形土器。短い沈線状の刺突が充填施文される。

４類（第 31 図５・６・８）口縁部外傾する深鉢形土器。細沈線の充填施文がある。

５類（第 31 図 11～13）口縁部短く、外傾する。胴部に弧状の沈線文を施文する。

６類（第 32 図１・２）口縁部外反する。１には隆帯上の刻目と鋸歯状沈線、２には２段原体の側面圧痕と双頭波状の痕跡がある。

７類（第 32 図３～５　第 33 図３・４）口縁部外傾する深鉢形土器。口縁裏面が肥厚して有段になる。弧状・波状・鋸歯状の沈線が施文されている。

８類（第32図６・10　第33図５）口縁部外傾する深鉢形土器。渦状・弧状・波状の貼付文が施文される。

９類（第32図７～９　第33図１・２）口縁部外傾する深鉢形土器。口縁裏面が肥厚して有段になる。幅広の隆帯が口縁部文様帯を区画する。１は弧状区画文の個体である。

10類（第22図）口縁部やや内弯して外傾する。口縁裏面は肥厚して有段である。剥落した部分が多いが口縁上端に波状文の貼付がある。また、押引き沈線で矩形に区画された中にＹ字と渦文の貼付があり、下方に延びる小波状の貼付文と両側にＪ字状の沈線文が付加されている。この単位文は８単位と考えられる。頸部は、横位に連結した弧状の区画文が展開し、内部は縦の押引き文と横の沈線文が施文されている。頸部と胴部の境界には、横走する押引き文と沈線文が施文されている。胴部上半は弧状の沈線をほぼ等間隔に施文して、楕円形の区画文となる。区画の内部と境界部に縦の押引き文が配置される部分もある。この大形の深鉢は胎土が良質かつ緻密であって、しかも被熱の痕跡がない。

11類（第21図１）口縁部外傾する大形の深鉢形土器。口縁部は無文である。口縁裏面は肥厚して有段、また胴部との境界も有段である。

12類（第33図６）口縁部外傾する大形の深鉢形土器。口縁部に縦の沈線が施文される。胴部との境界は有段である。

13類（第33図７・８）口縁部肥厚して外傾し、口縁裏面に沈線状の段がある。２段原体の側面圧痕が２条、施文されている。

第11群土器（第34図１）大木８ａ式土器。口唇部にＳ字状隆帯が貼付される。

第12群土器（第34図２・３）大木８ｂ式土器。肥厚した口唇部に横位の渦巻文が施文されている。

第13群土器（第34図４）大洞Ｃ２式土器。鉢形か浅鉢形土器の口縁部。２個一対の瘤状突起がある。

第14群土器（第34図５）弥生土器。甕形土器の胴部と考えられる。小田野論文のⅣ期（小田野哲憲　1987）である。

第15群土器（第34図６～９　第35図　第36図）口縁から胴部の大形破片。

１類（第34図６～９）口縁部大きく外反する。口縁の外反が著しいので大木３・４式と考えられる。６・８は大木３式、７・９は口唇の刻目と口縁の結節回転から大木４式である。

２類（第35図１）口縁部肥厚して外傾する。大木６式と考えられる。

３類（第35図２～４）結束第１種施文の胴部。４は繊維混入しているので大木２ａ式と思われる。

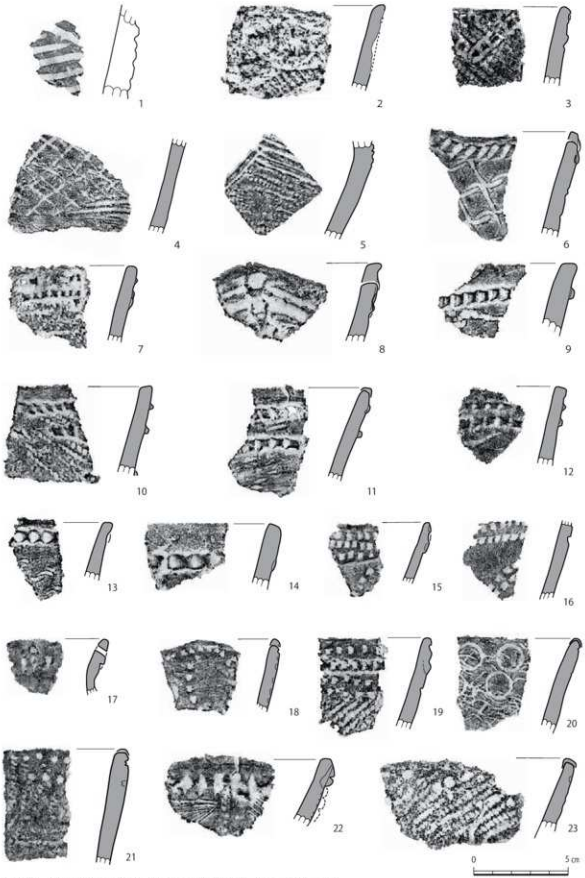
４類（第35図５・６）単軸絡条体第1A類施文の胴部。５は第1A類５の円筒下層ｄ式、６は第1A類３の円筒下層ｃ式と考えられる（山内清男　1979）。

５類（第36図）胴部下半の破片。型式の特定が困難。

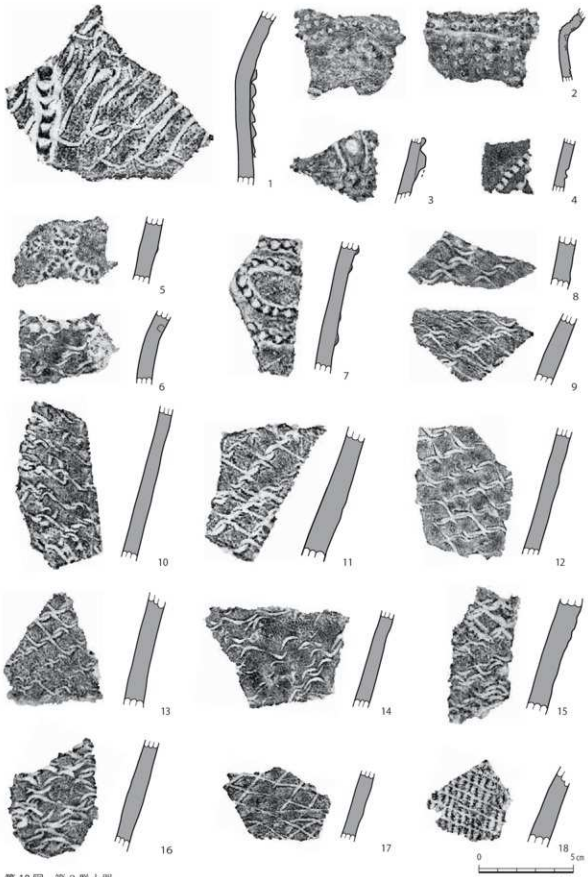
第16群土器（第37図　第38図）底部を一括。

１類（第37図１・２　第38図１・２・６・９）胴部に向かって外傾する。

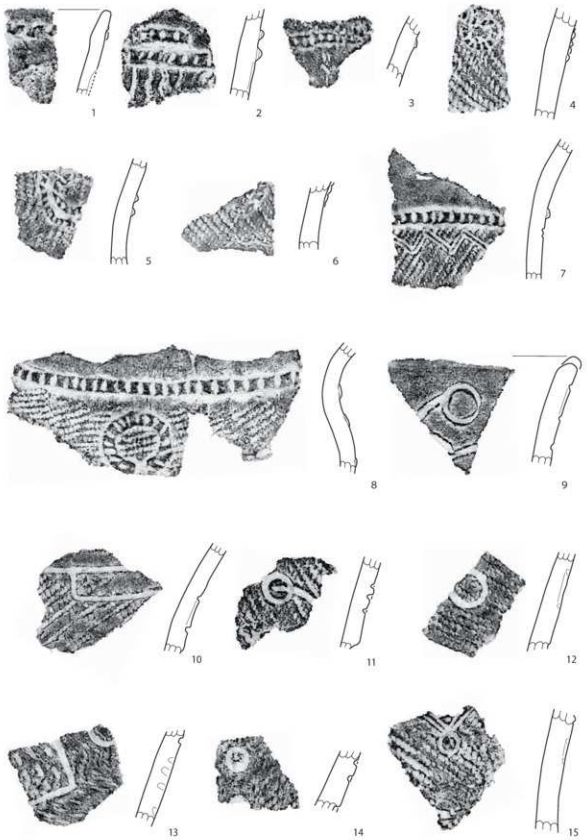
２類（第37図３～５　第38図３・５・８・10・11）胴部に向かって外反する。



第９図　第１群（１）第２群（２～５）第３群（６～23）土器　(1/2)

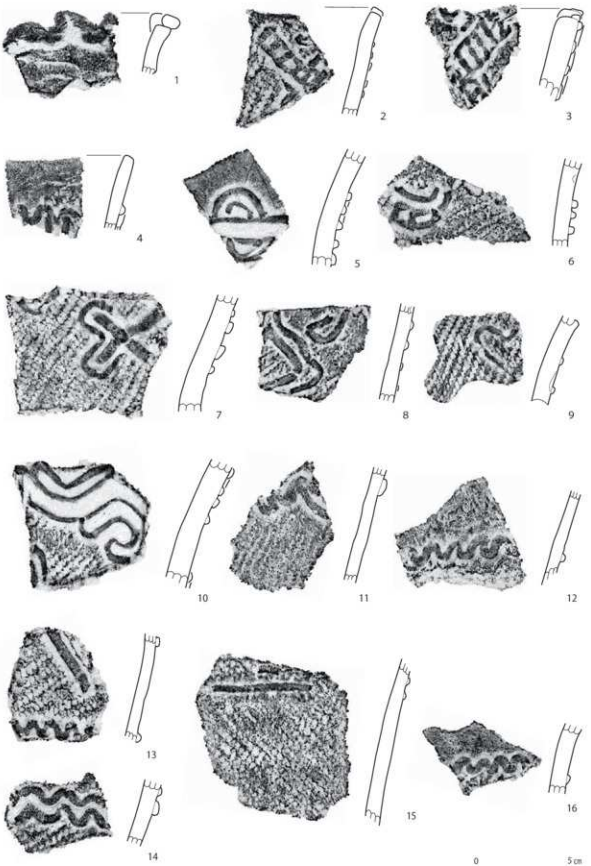


第10図　第3群土器

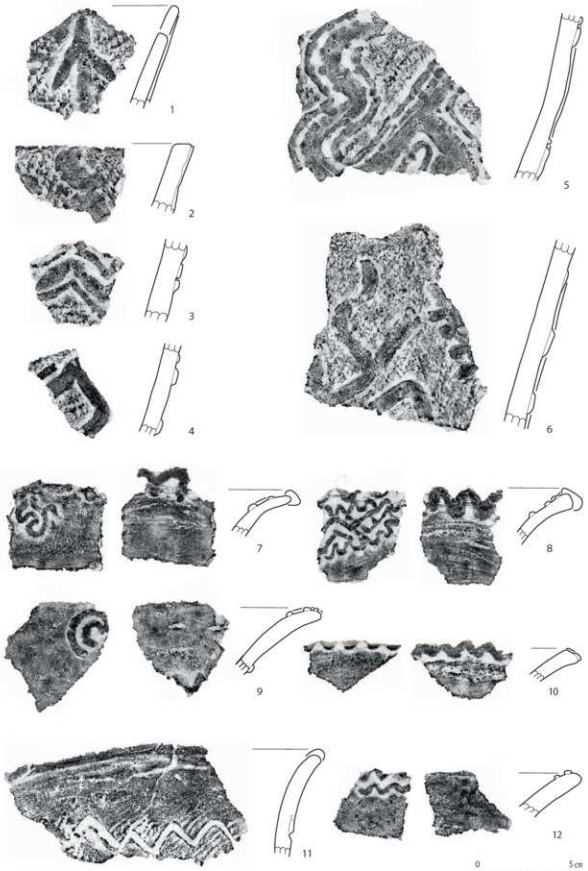


第11図　第4群土器

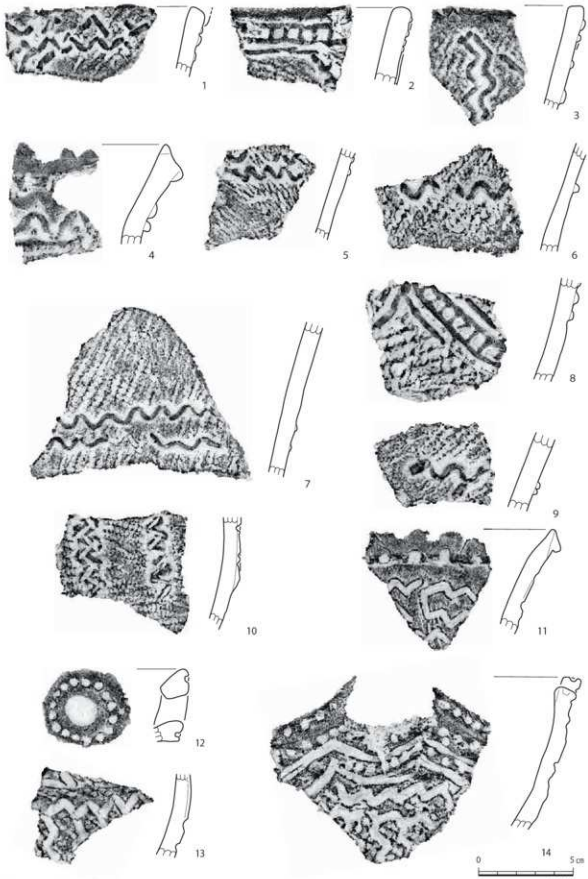
(1/2)



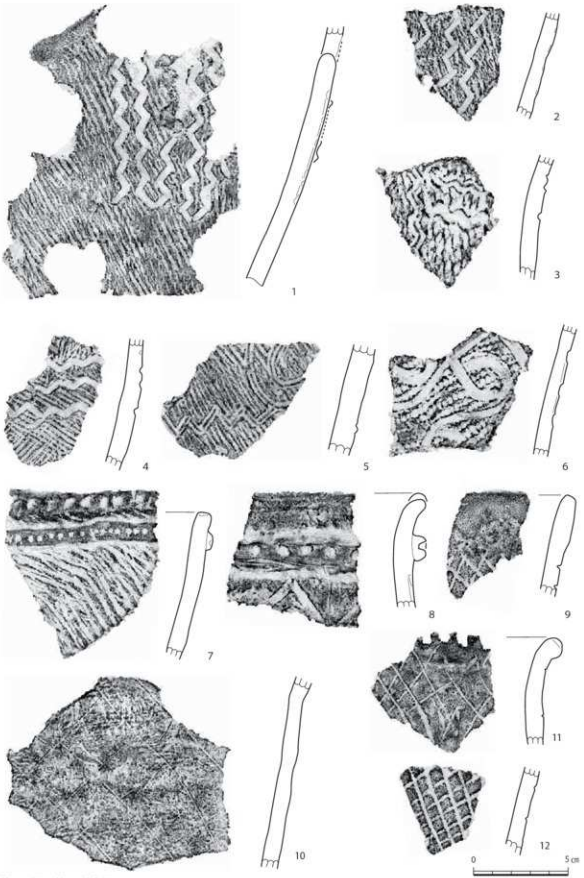
第 12 図　第 5 群土器



第13図　第5群土器

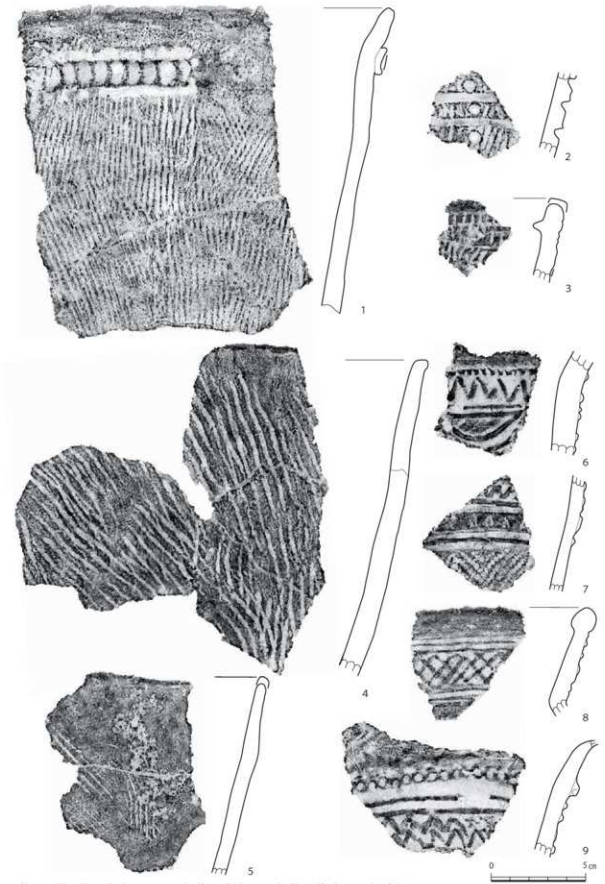


第 14 図　第 6 群土器

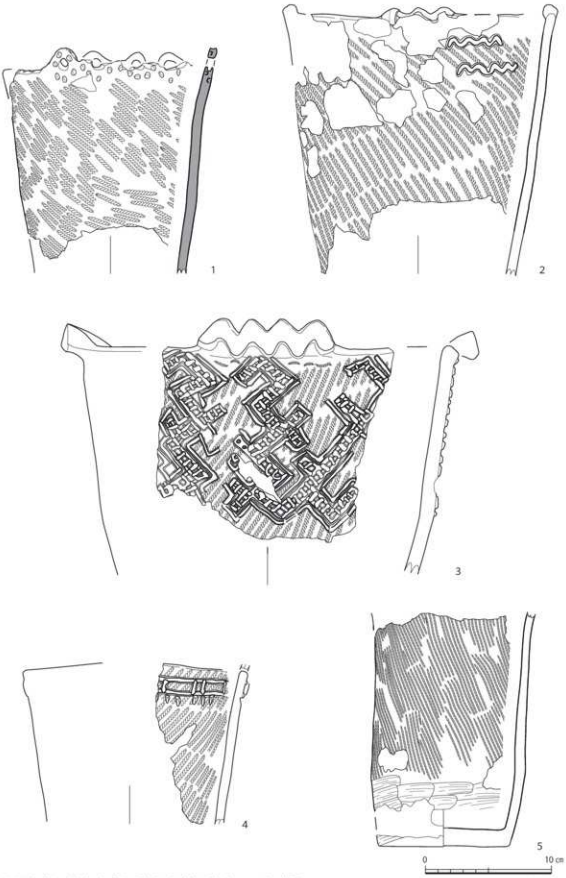


第 15 図　第 6 群土器

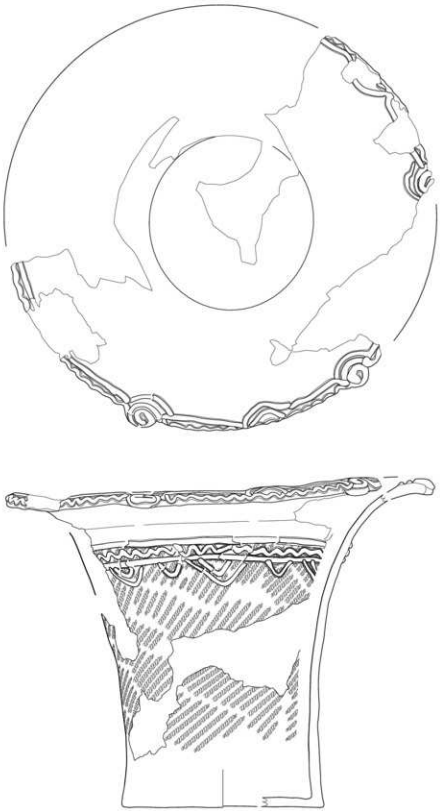
(1/2)



第１６図　第６群（１・４・５）第７群（６～９）第８群（２・３）土器　(1/2)

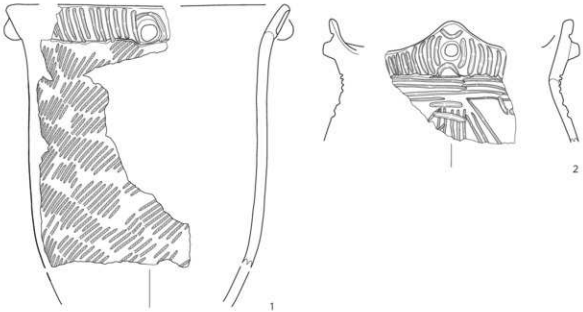


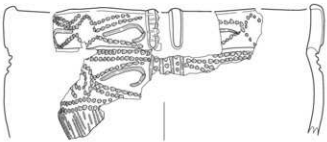
第17図　第3群（1）第5群（2）第6群（3～5）土器　(1/3)

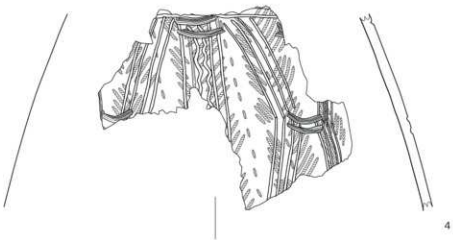


第 18 図　第 5 群土器

(1/3)

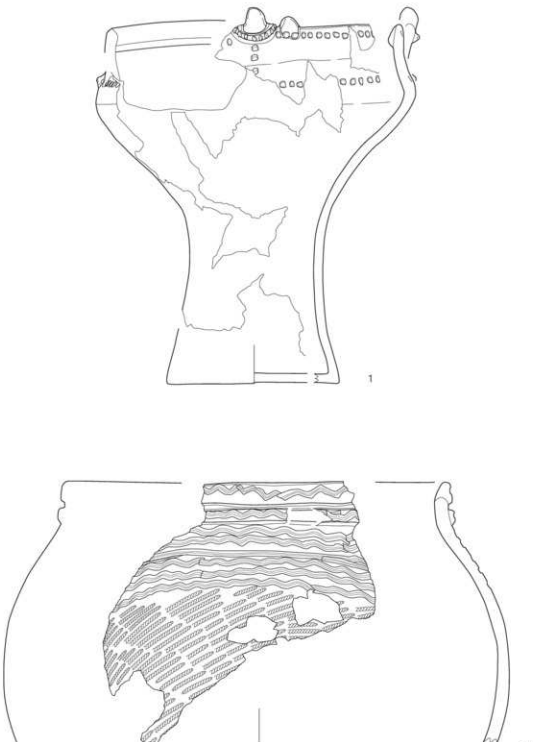






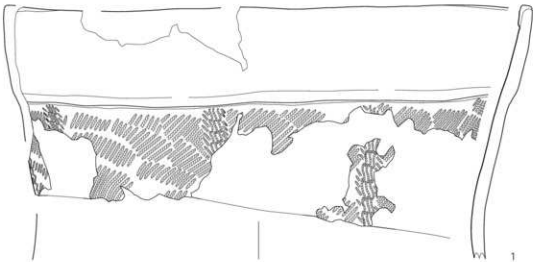
0 10cm
(1/3)

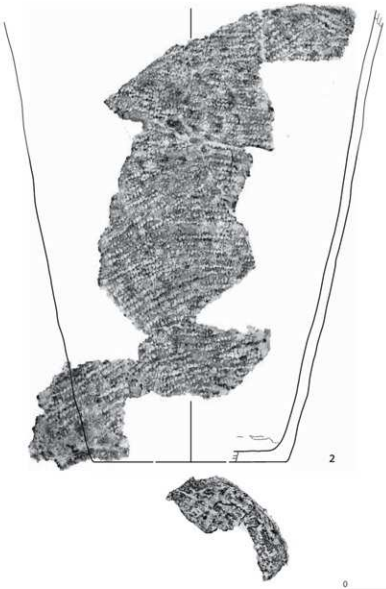
第19図　第9群土器



第20図　第9群土器

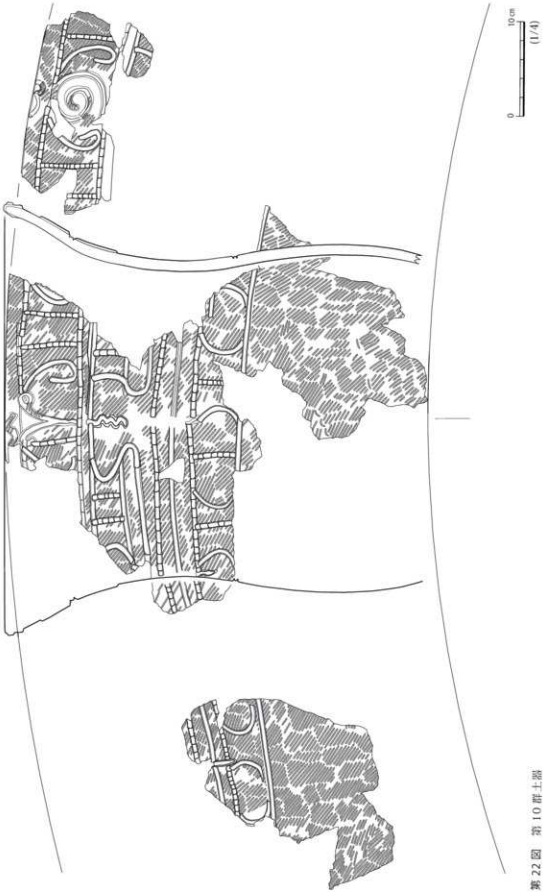
(1/3)



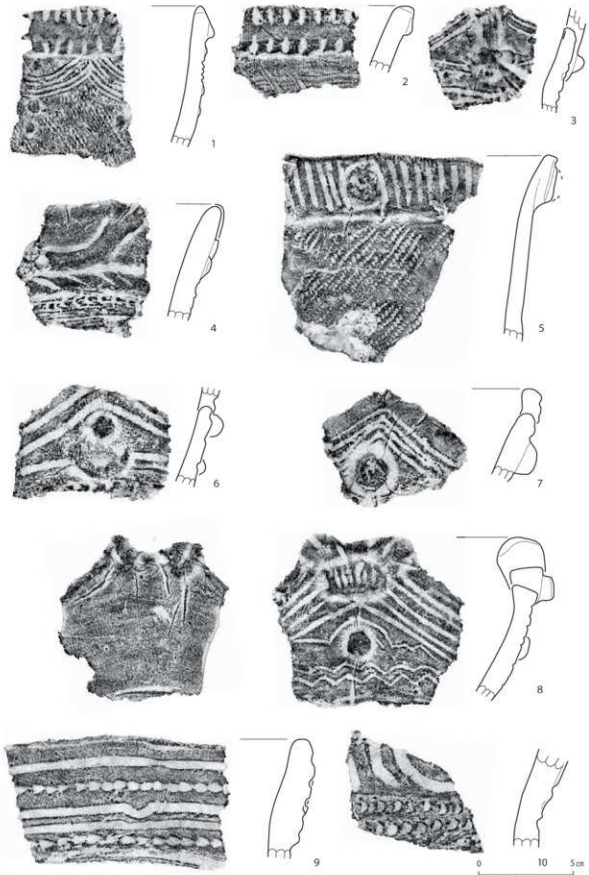


(1/3)

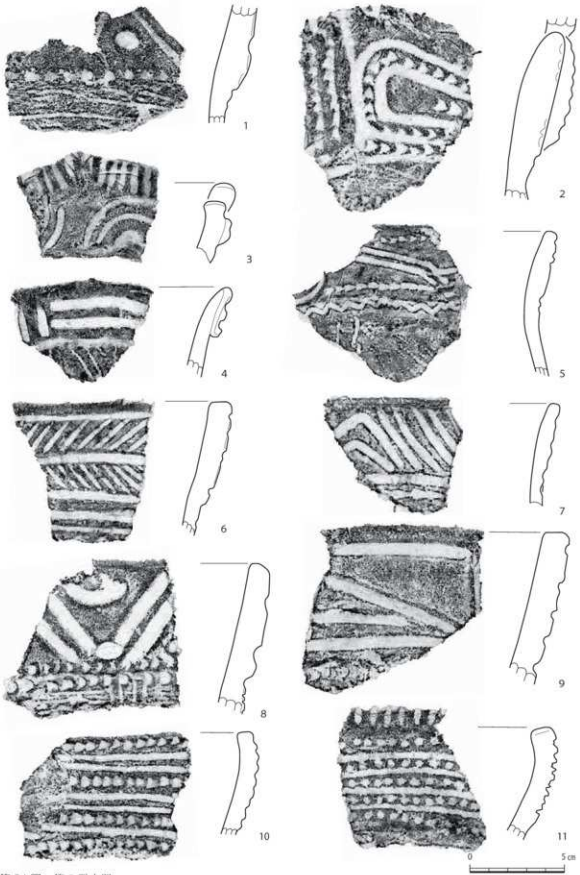
第２１図　第６群（２）第１０群（１）土器



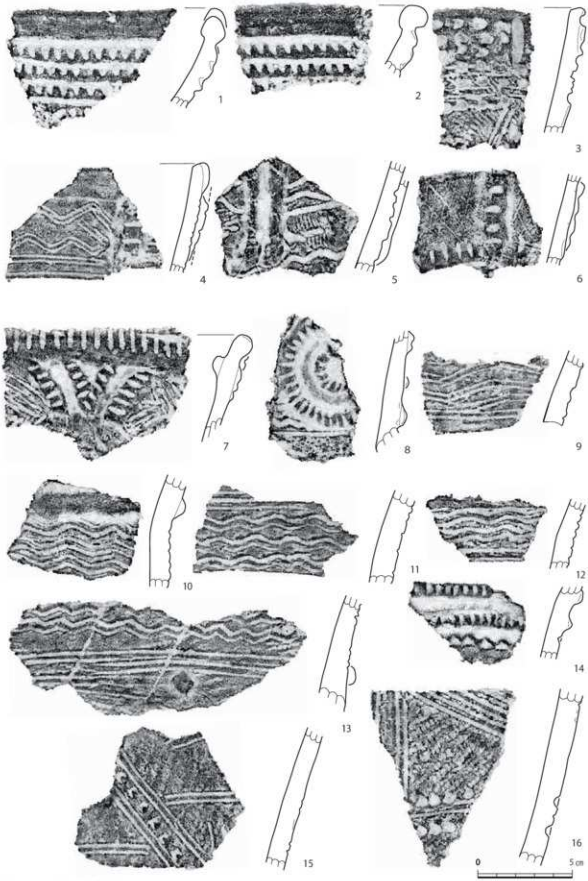
第22図　第10群土器



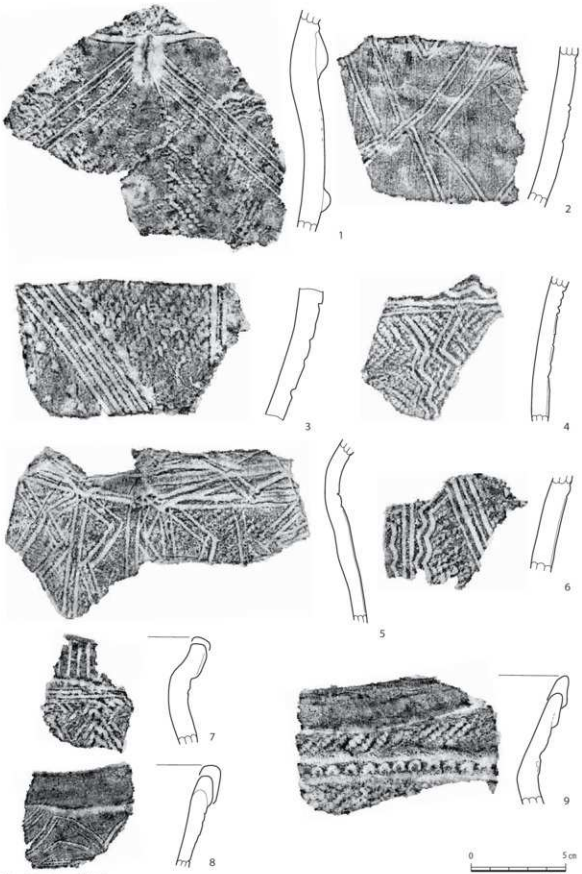
第 23 図　第 9 群土器



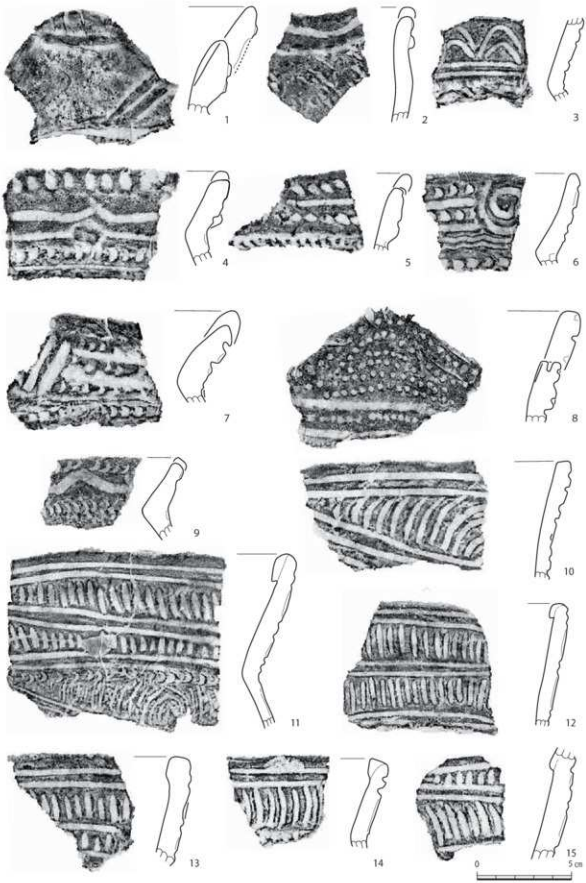
第 24 図　第 9 群土器　(1/2)



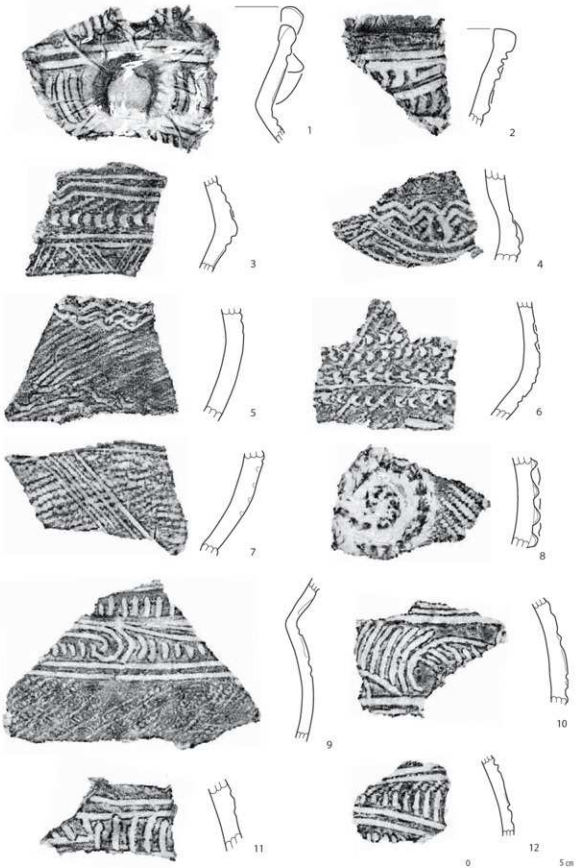
第 25 図　第 9 群土器　(1/2)



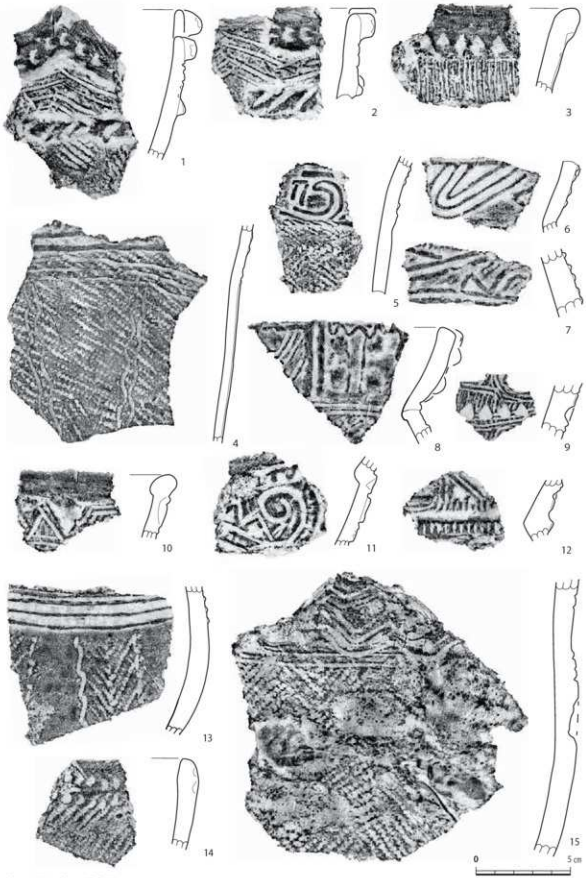
第 26 図　第 9 群土器



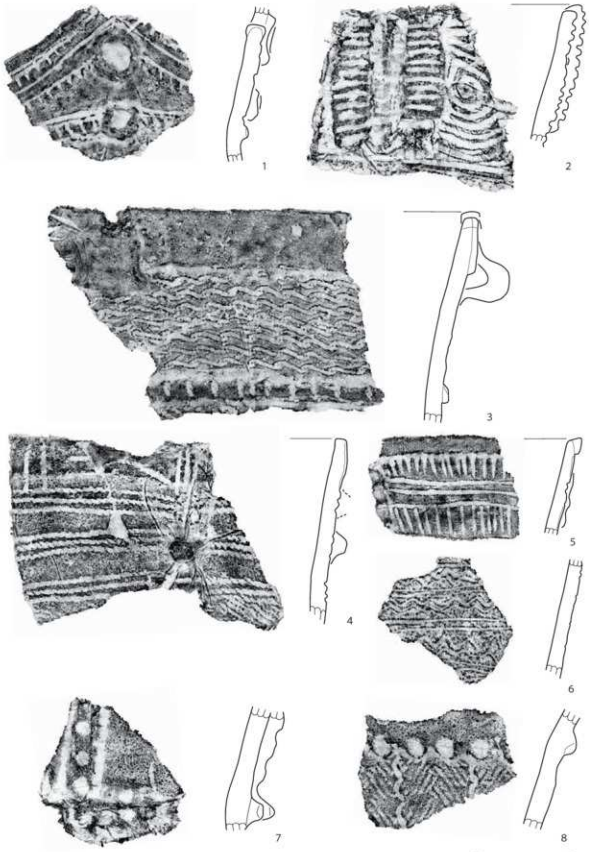
第 27 図　第 9 群土器　(1/2)



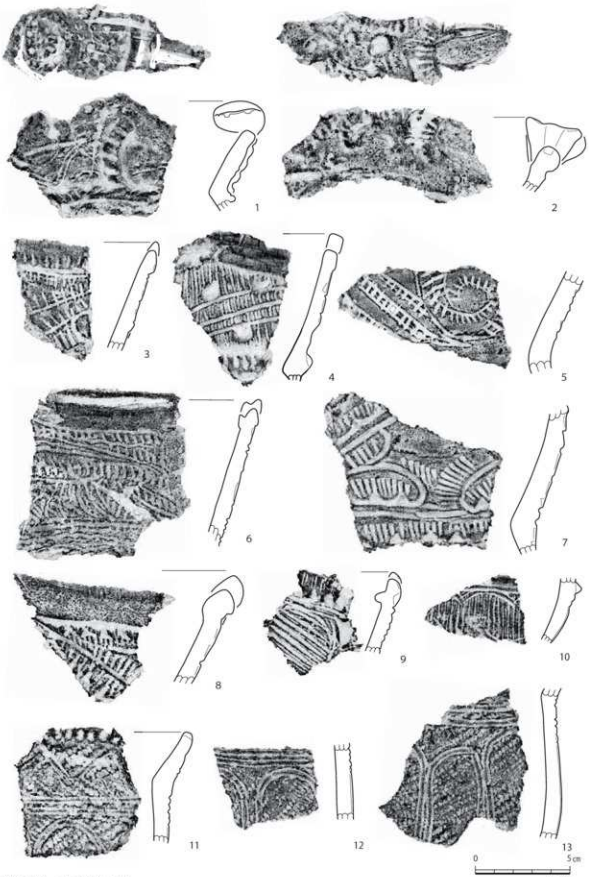
第 28 図　第 9 群土器



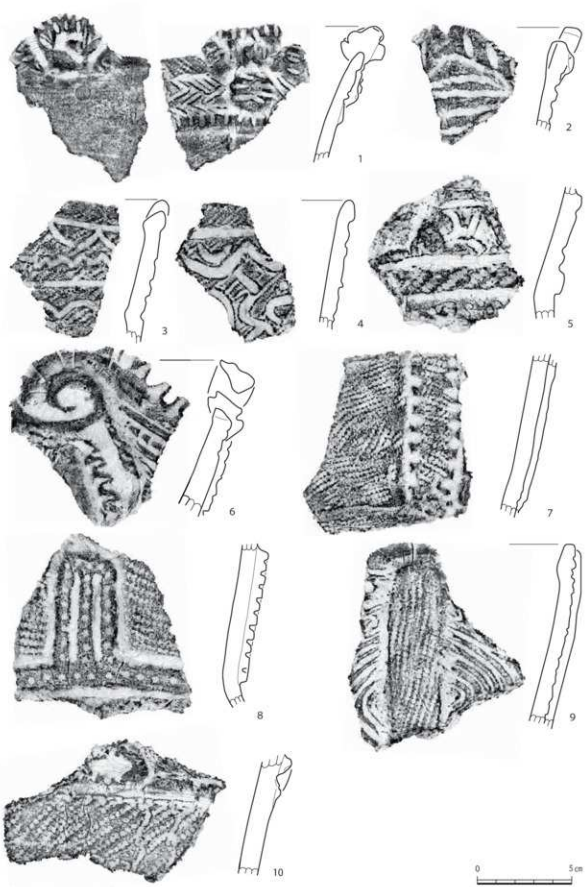
第29図　第9群土器　(1/2)



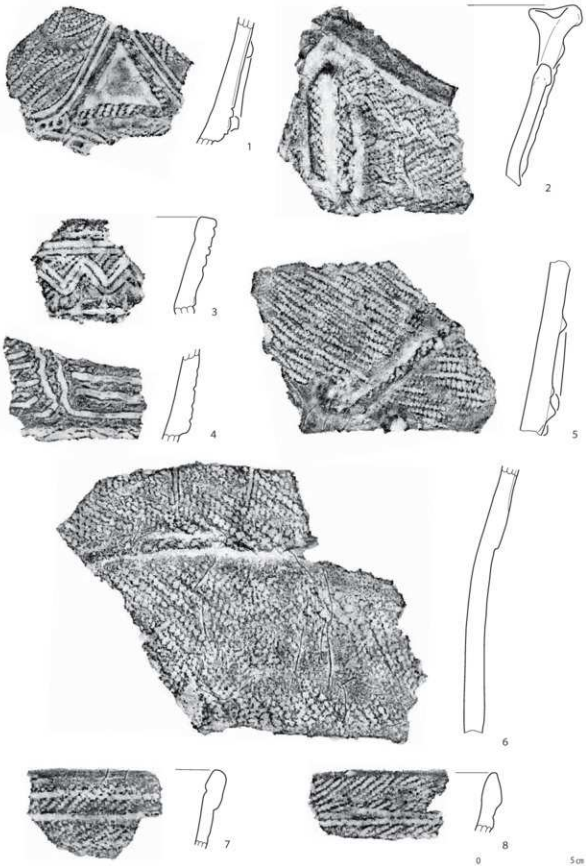
第30図　第10群土器　(1/2)



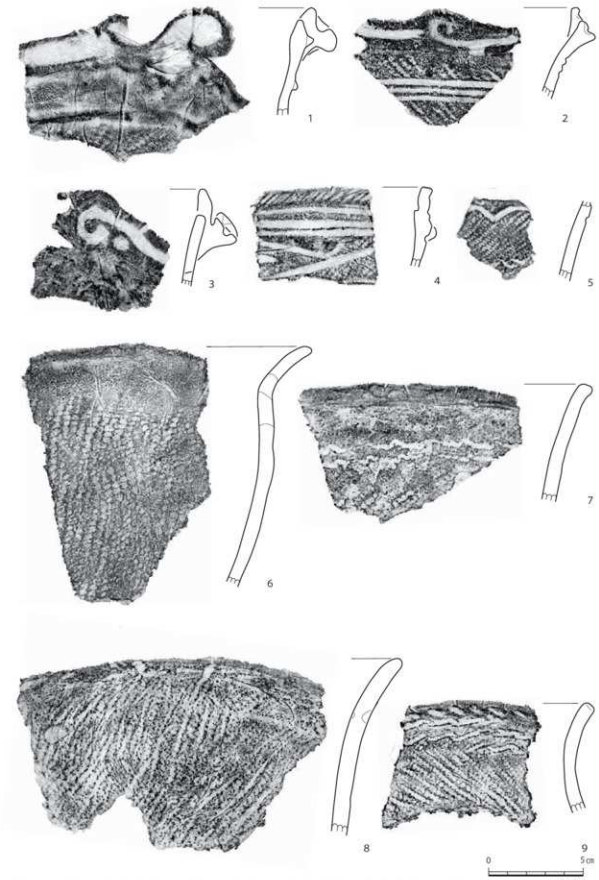
第31図　第10群土器



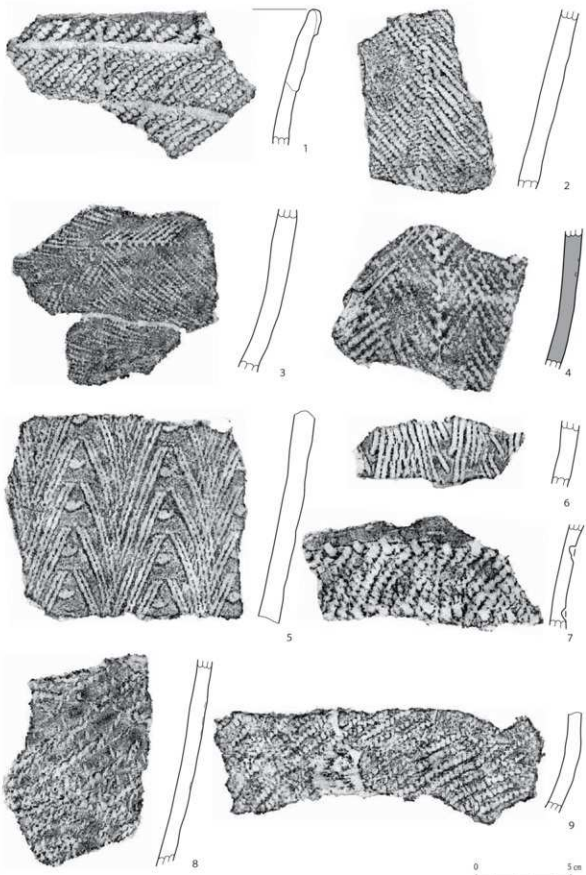
第32図　第10群土器



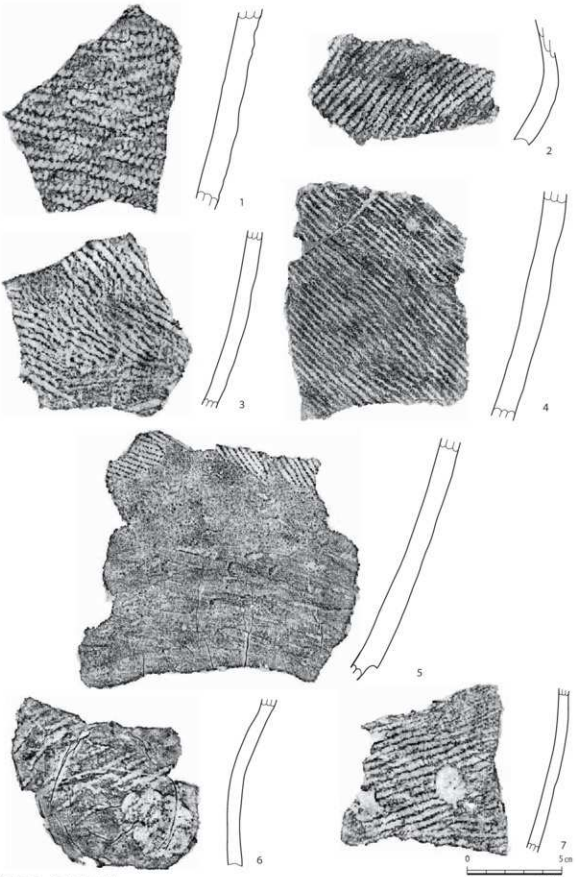
第33図　第10群土器



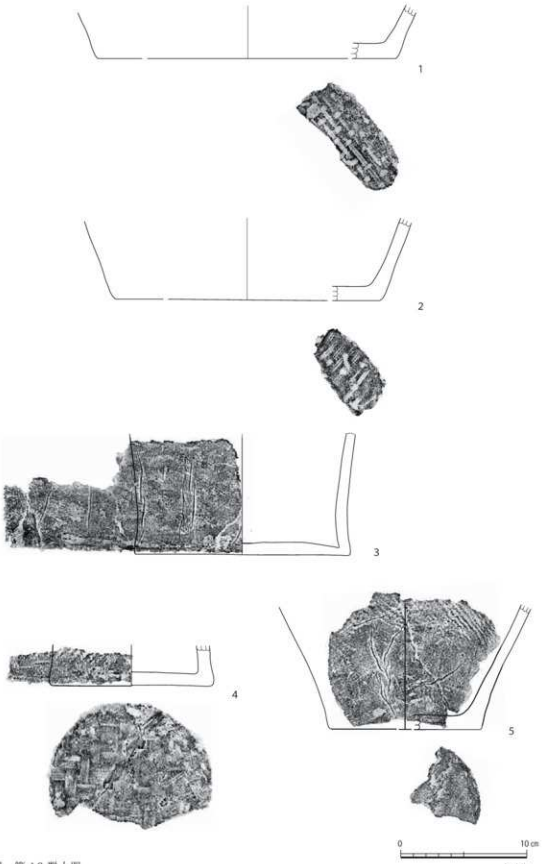
第34図　第11群（1）第12群（2・3）第13群（4）第14群（5）第15群（6～9）



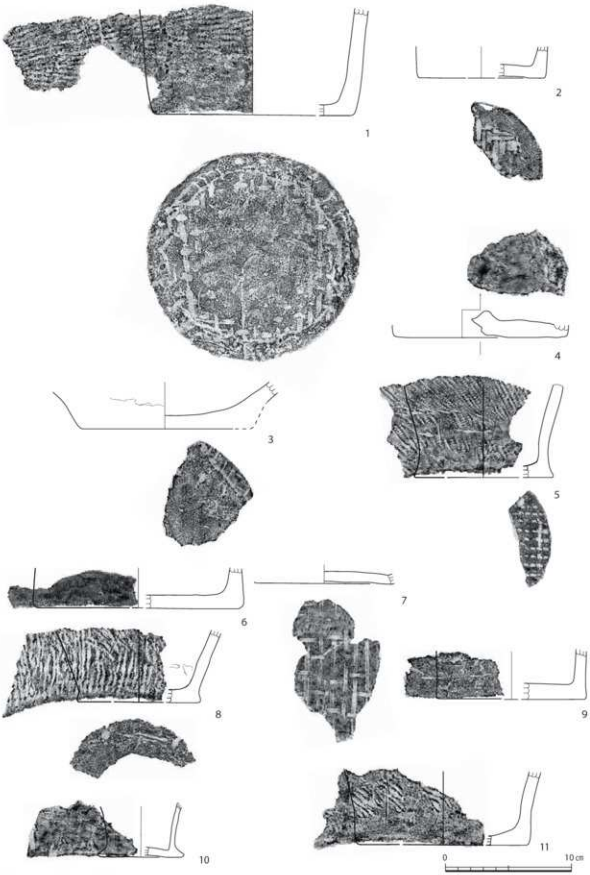
第35図　第15群土器



第36図　第15群土器　(1/2)



第 37 図　第 16 群土器



第 38 図　第 16 群土器　(1/3)

３類（第38図４・７）胴部への立ち上がり不明。ただし、４は内面中央に瘤状の突起が付いている。頂部の丸い円錐形である。

３　遺物包含層出土の石器

石　　鏃（第39図～第41図12）

１類（第39図１～11　第40図）凹基無茎の石鏃。抉入部が深い。

２類（第39図12～18　第41図１～７・９・10）凹基無茎の石鏃。抉入部が浅い。

３類（第41図８・11）凹基無茎の石鏃。脚部の幅が広い。

４類（第41図12）有茎の石鏃。

石　　槍（第41図13・14　第42図　第43図）

１類（第41図13・14　第42図１・２）全長５cm台の柳葉形の製品。

２類（第42図２・３　第43図）全長10cm台の大形の製品。基部の形態は幅が広く、浅い抉入部が側縁にある。第42図３は有肩部を持つが、製作当初から意図された形態ではない。先端部から基部への主軸は直線で偏りはない。側縁上半部が破損し、再生した石槍と考えられる。先端部から側縁上半部が左右対称になるように破損部に調整剥離を加えている。破損しなかった下半部は製作当初の幅を保持している。

石　　錐（第44図１～11）

１類（第44図１～６）錐部とつまみ状の頭部の境界が明瞭ではなく、三角形状に広がるもの。

２類（第44図７・８）錐部とつまみ状の頭部の境界が明瞭。頭部は台形状。

３類（第44図９）錐部とつまみ状の頭部の境界が明瞭。頭部は５角形状。

４類（第44図10）錐部とつまみ状の頭部の境界が明瞭。頭部は長方形。

５類（第44図11）錐部のみの破損品。

楔形石器（第44図12）剥離面の湾曲が小さく、ほぼ直線状である。

箆状石器（第44図13・14）刃部の縦断面形は弧状である。

石　　匙（第45図）

１類（第45図１～３）縦形。側縁部左右非対称形。３は折れ面に調整剥離を加えてスクレイパーに再利用したもの。

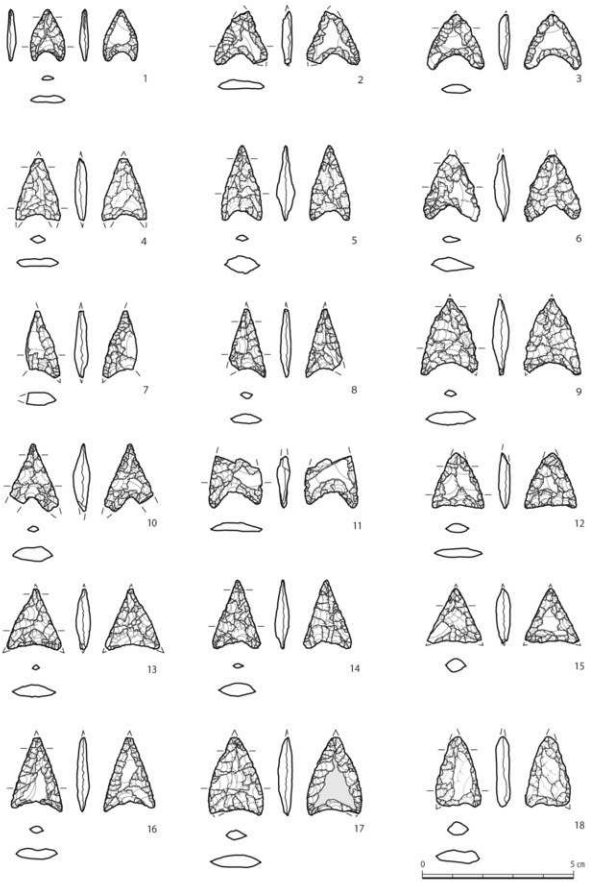
２類（第45図４～６）縦形。側縁部左右対称形。素材剥片は１類に比較して厚い。

３類（第45図７・８）横形。２例とも破損が著しい。

スクレイパー（第46図　第47図）

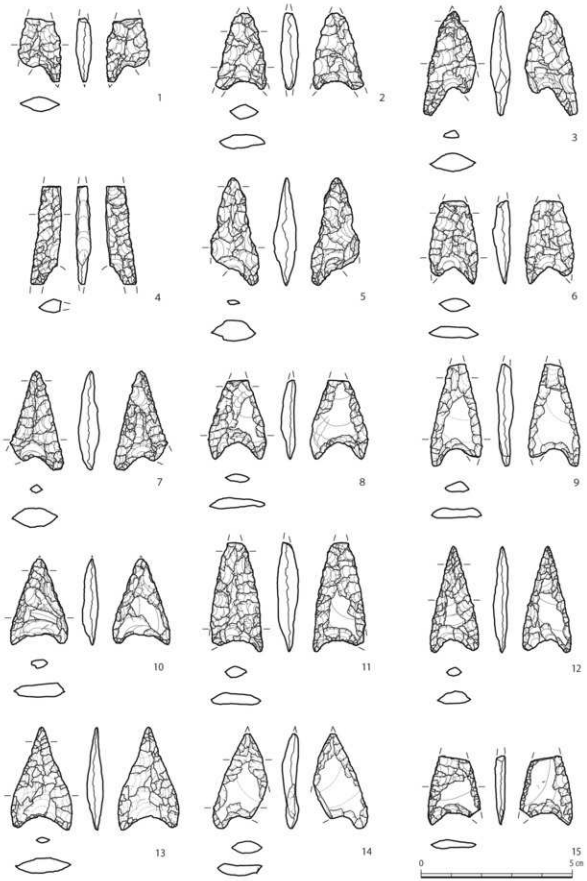
１類（第46図１～４　第47図６・７）刃部厚く弧状。掻器としての用途・機能を持つ石器。４には摩耗痕と刃こぼれが認められる。

２類（第46図５～12　第47図１～５・８）刃部鋭角を呈して、削器としての用途・機能を持つ石器。第46図６・10～12、第47図の各石器には刃こぼれが認められる。

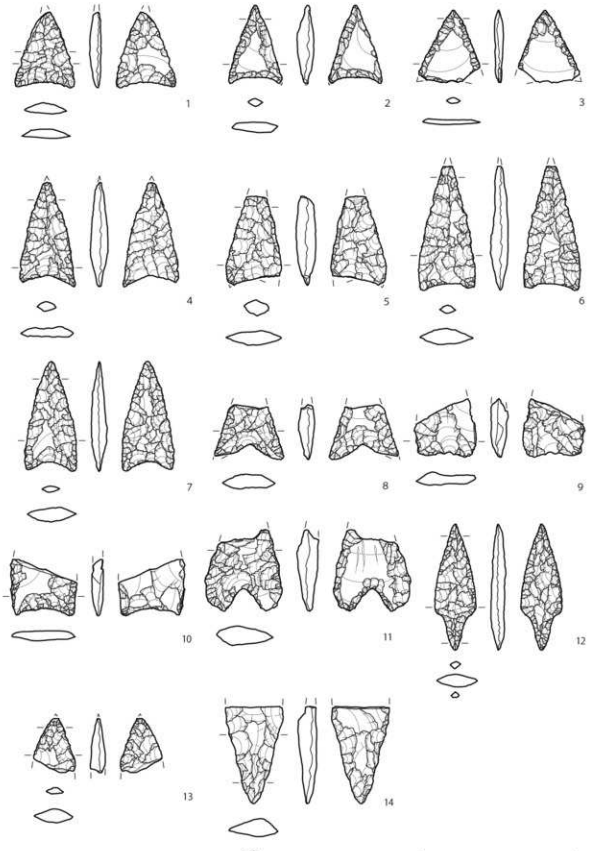


第 39 図　石鏃

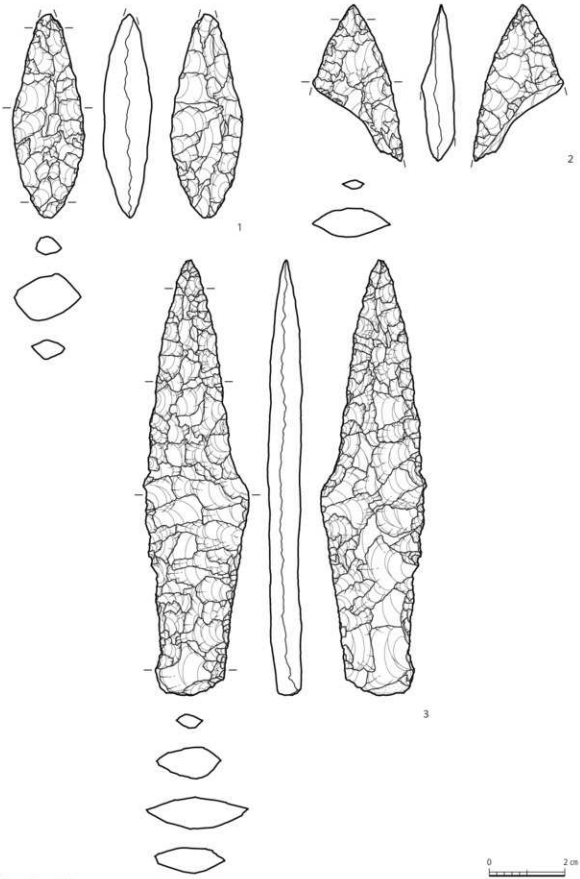
(4/5)



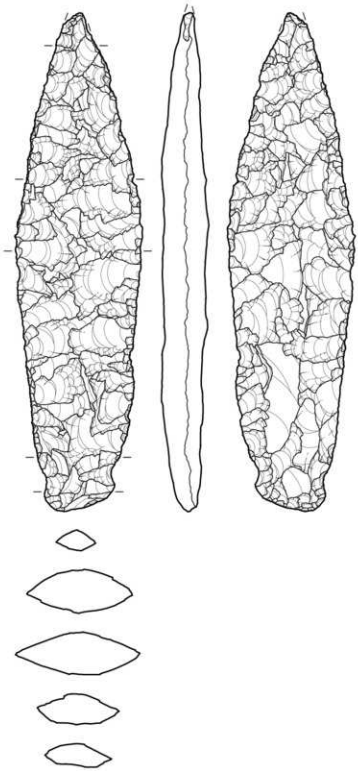
第 40 図　石鏃　(4/5)



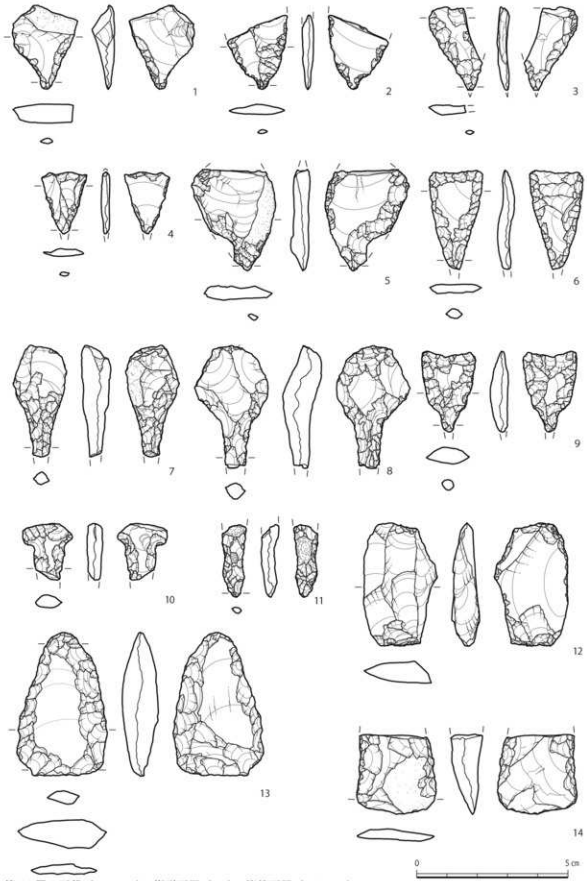
第41図　石鏃（1～12）石槍（13・14）　(4/5)



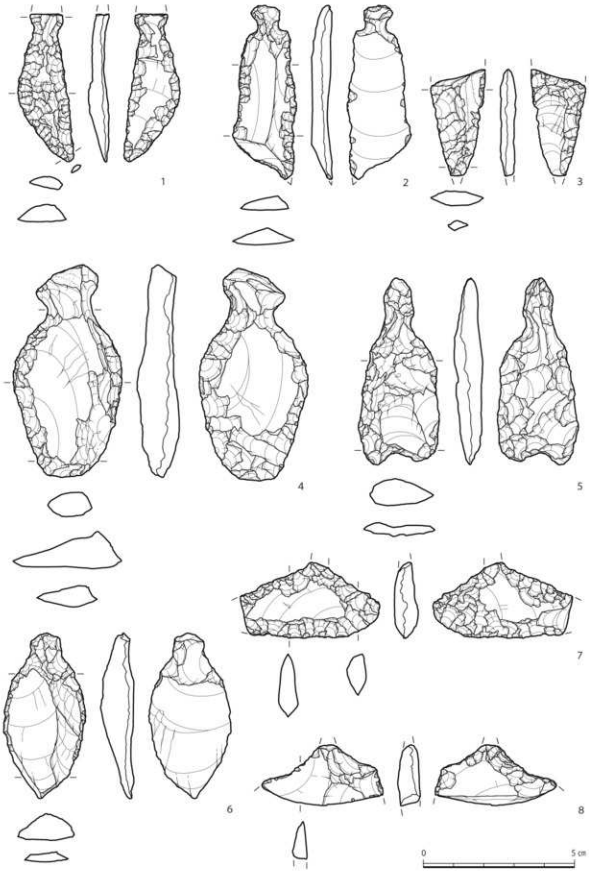
第 42 図　石槍



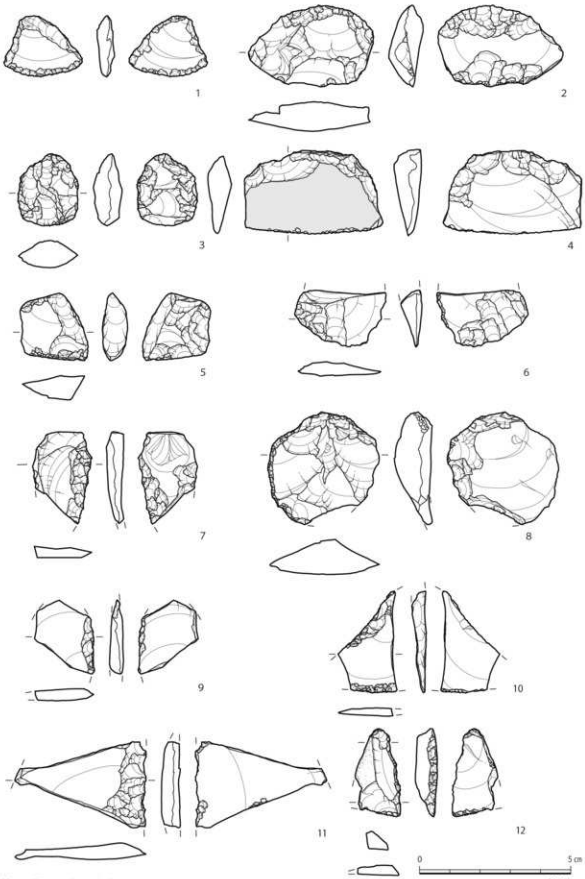
第 43 図　石槍



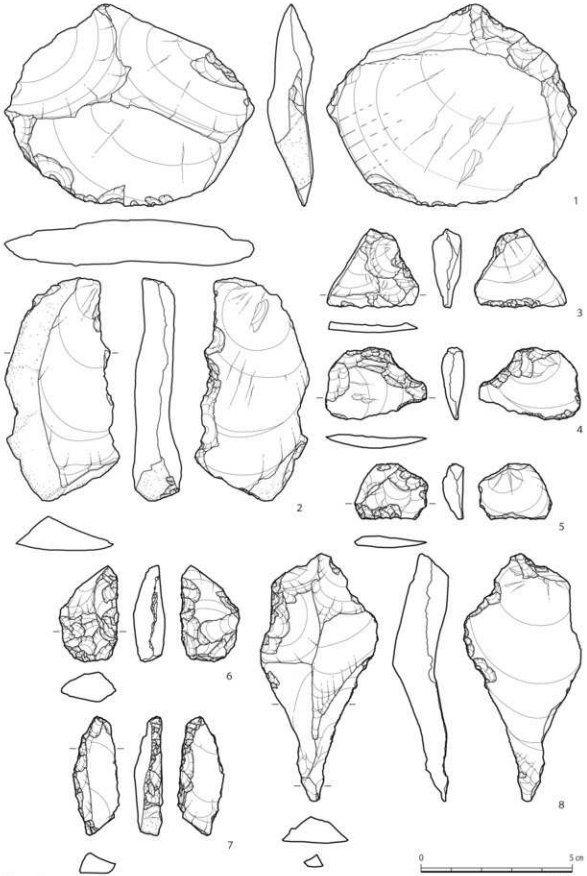
第 44 図　石錐（1 ～ 11）　楔形石器（12）　箆状石器（13・14）　(4/5)



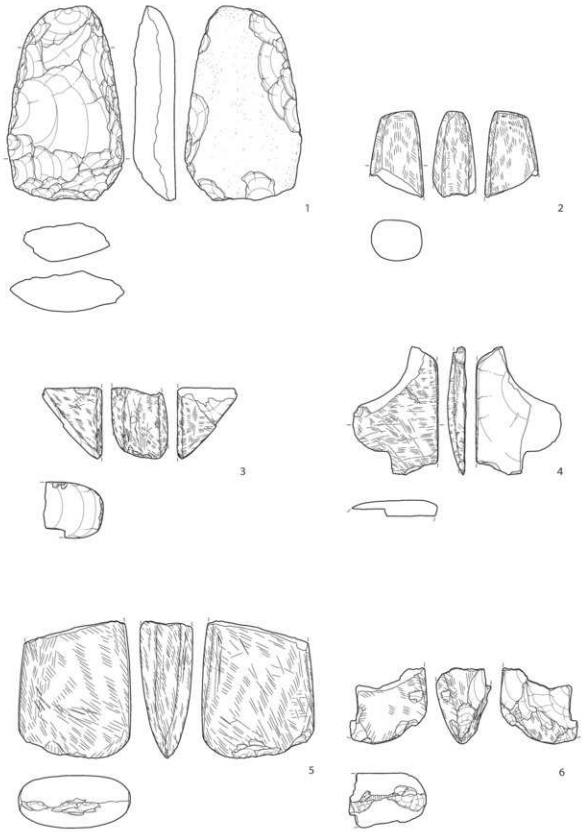
第 45 図　石匙　(4/5)



第 46 図　スクレイパー　(4/5)

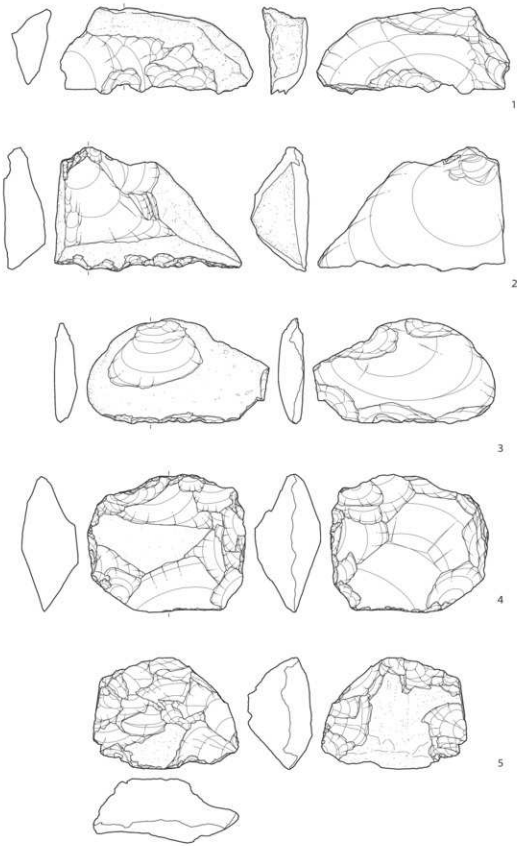


第 47 図　スクレイパー



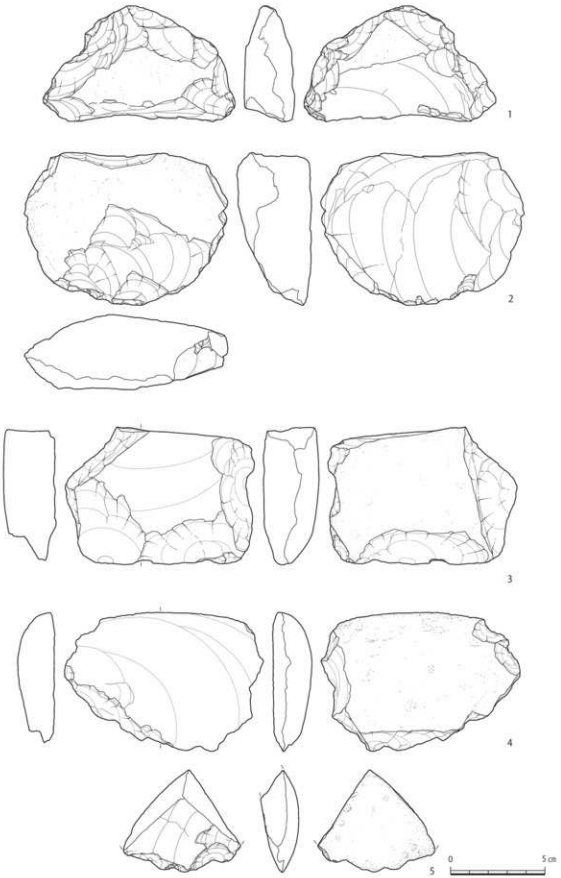
第48図　打製石斧（1）　磨製石斧（2～6）

(1/2)

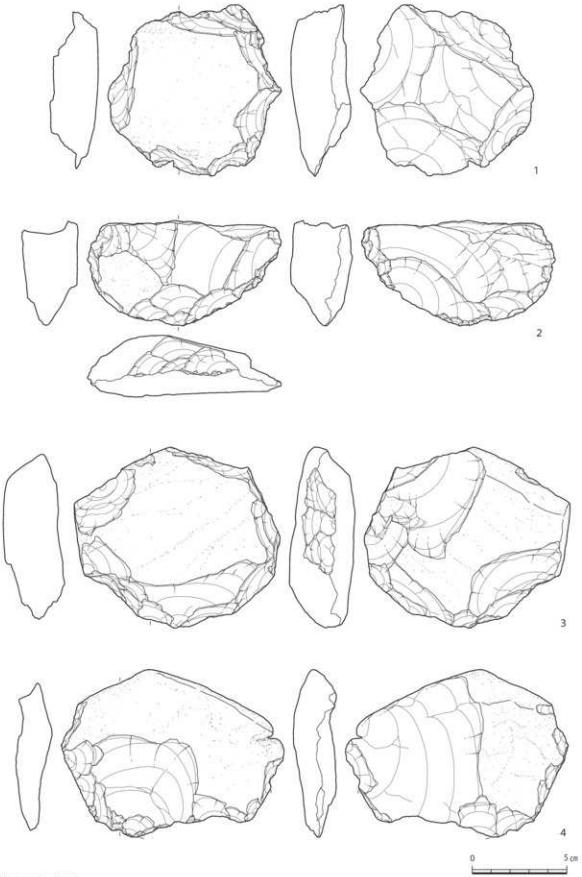


第49図　礫器

(1/2)

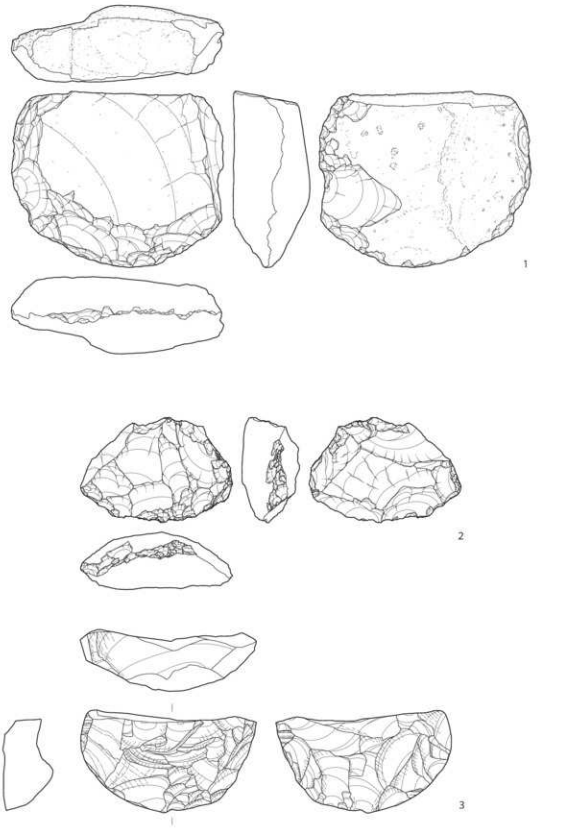


第 50 図　礫器

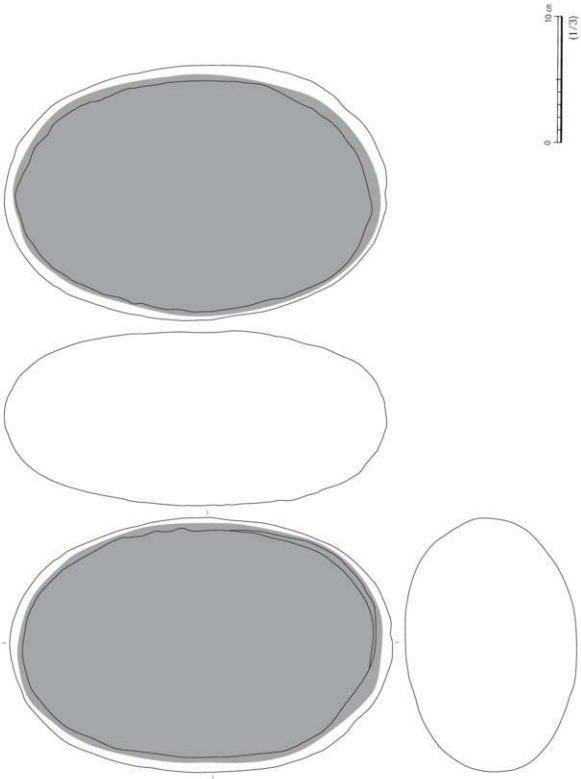


第51図　礫器

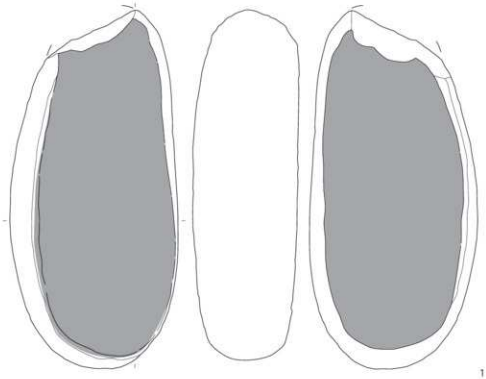
(1/2)

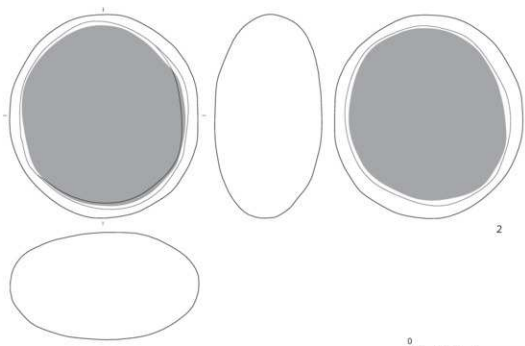


第52図　礫器



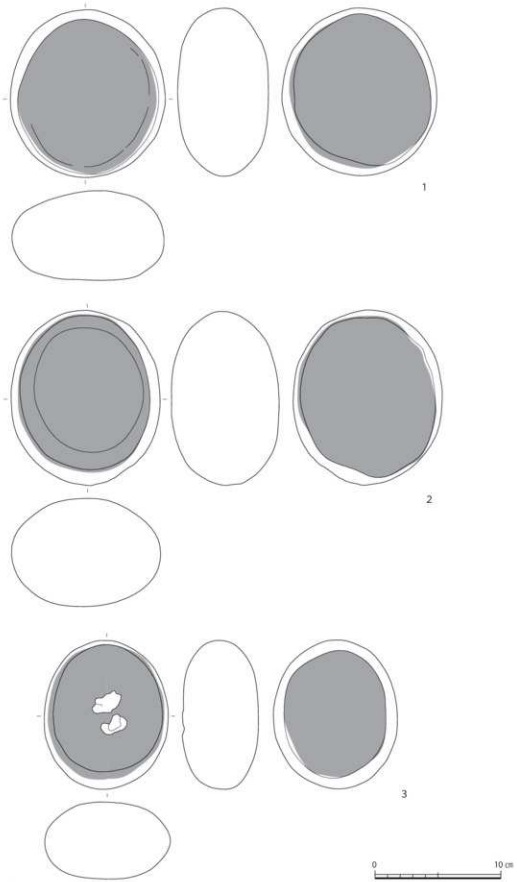
第53図　磨石



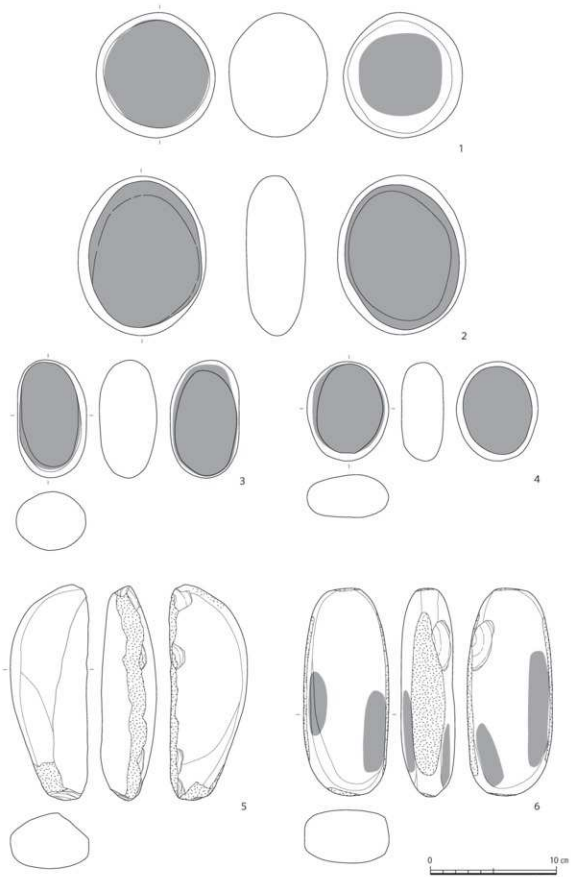


第 54 図　磨石

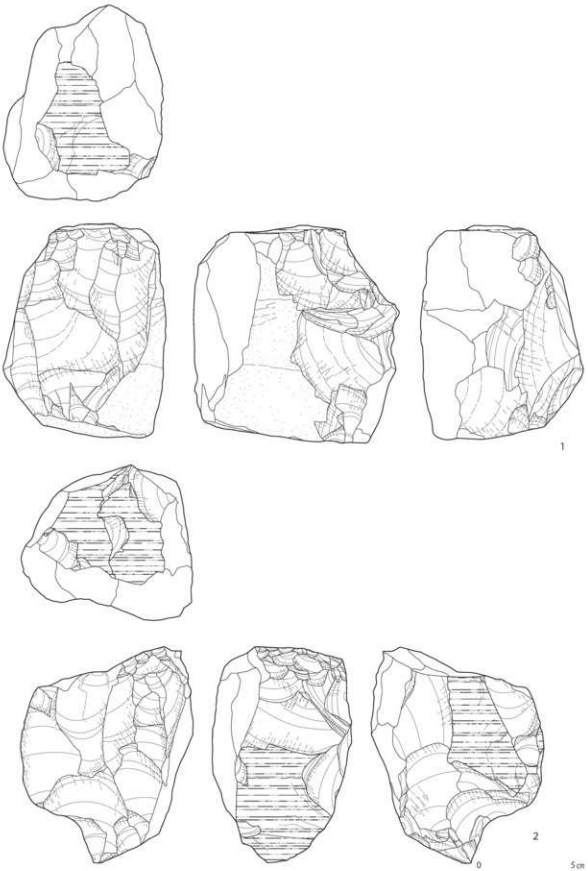
(1/3)



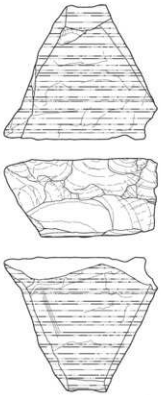
第 55 図　磨石



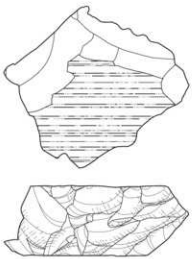
第56図　磨石（1～4）　敲石（5・6）

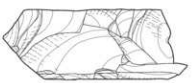


第 57 図　石核　(1/2)

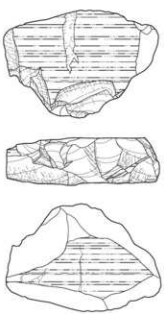


1





2

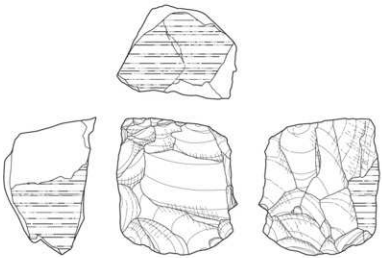


3

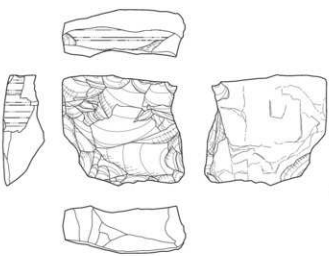
0 5cm

(1/2)

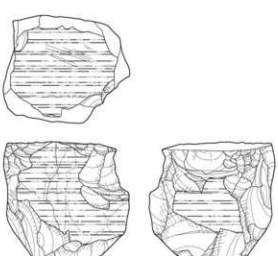
第58図　石核



1



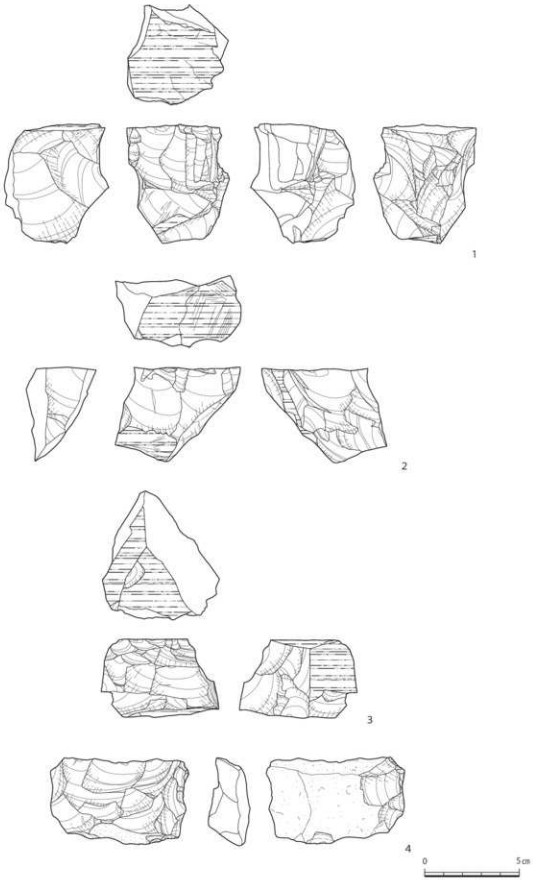
2



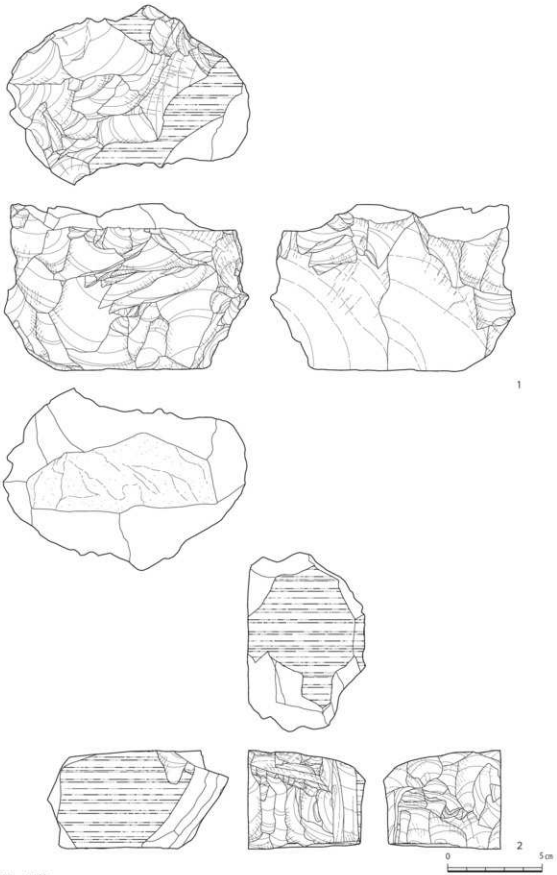
3

0　5cm
(1/2)

第 59 図　石核

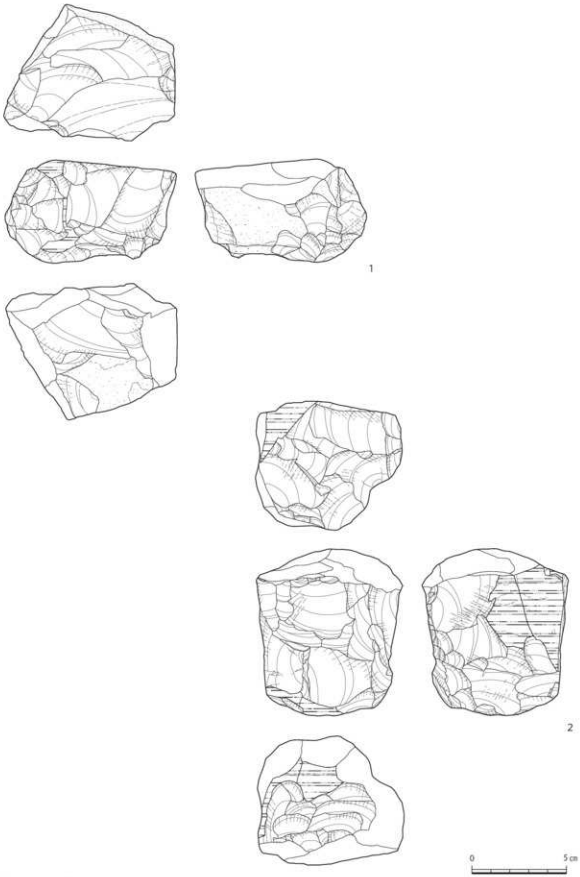


第 60 図　石核

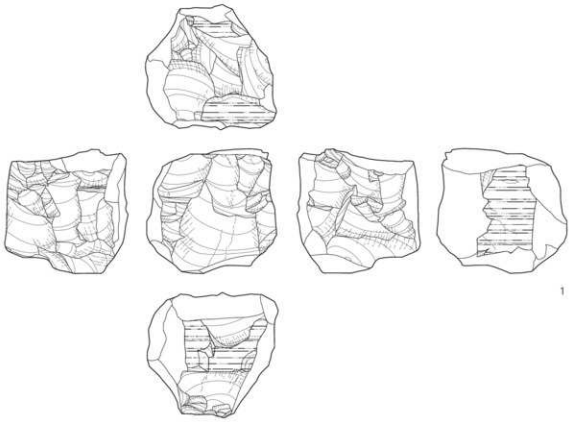


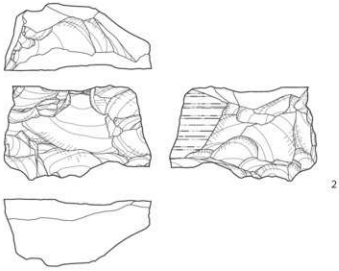
第61図　石核

(1/2)



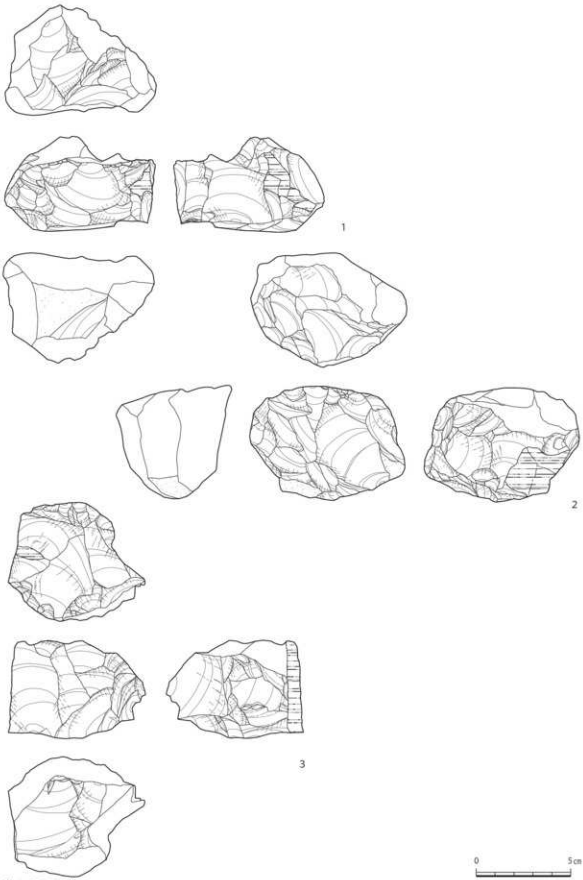
第 62 図　石核



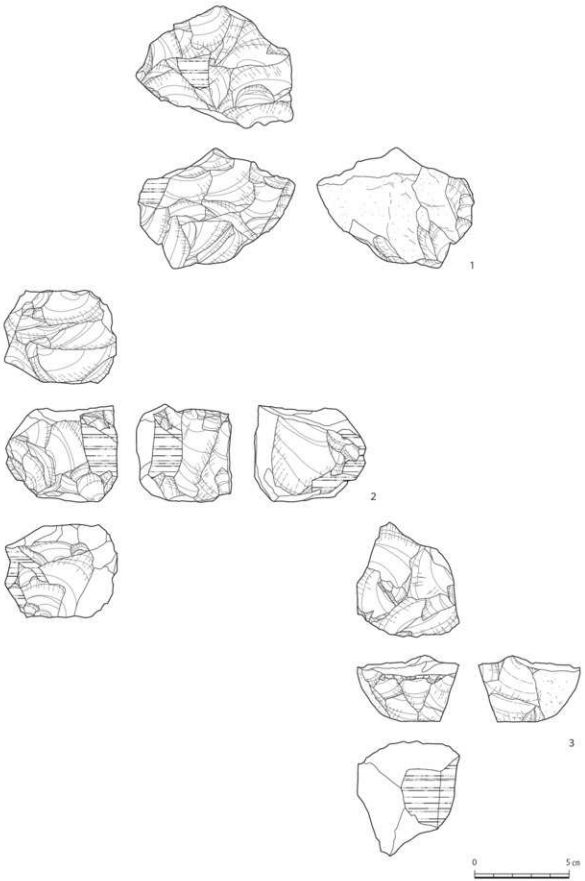


(1/2)

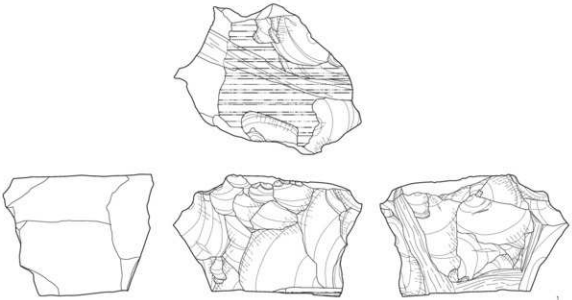
第63図　石核

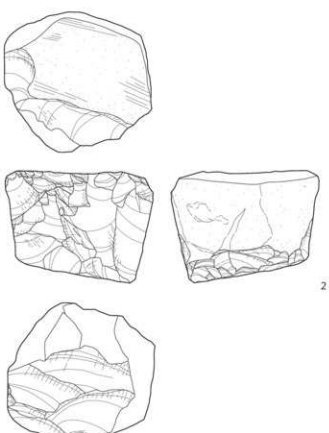


第 64 図　石核



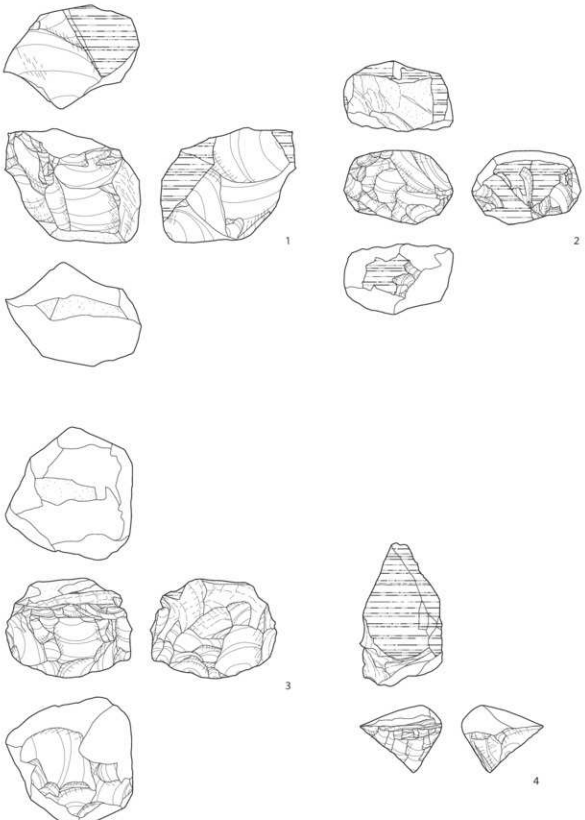
第 65 図　石核



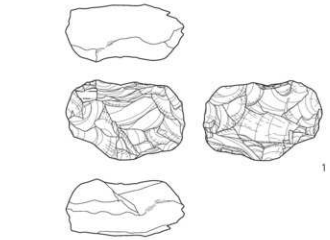


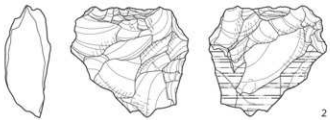
(1/2)

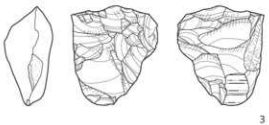
第66図　石核

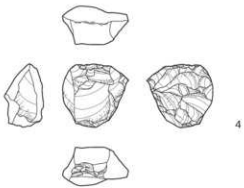


第 67 図　石核

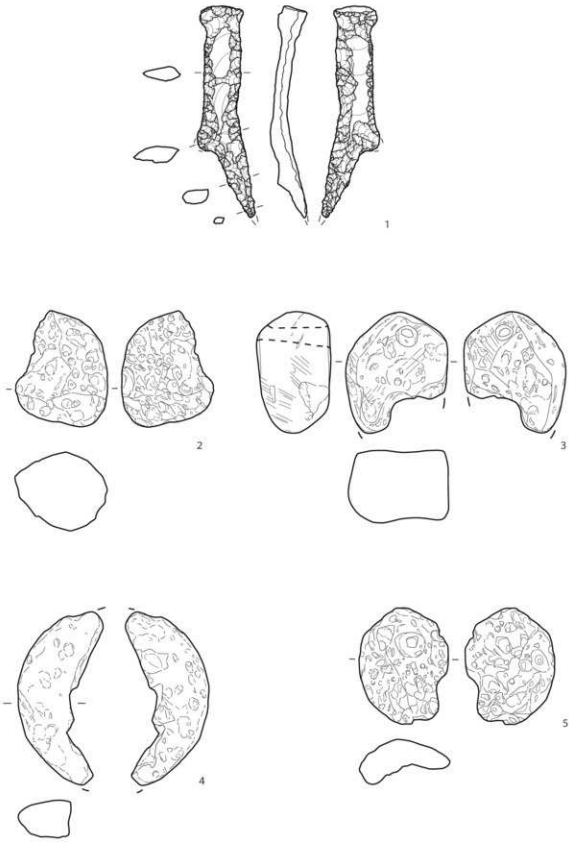




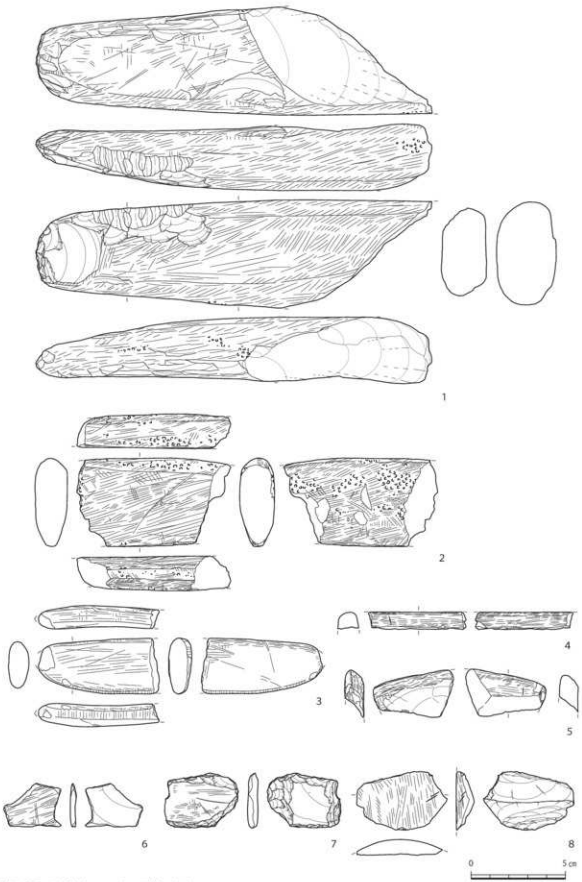




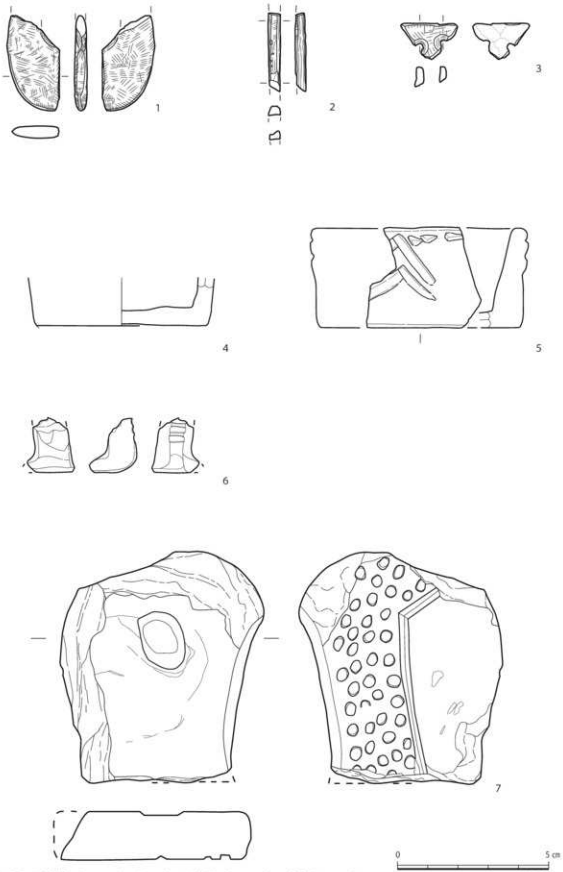
第68図　石核



第69図　異形石器（1）　軽石製品（2～5）　(4/5)



第70図　石剣（1～7）　石棒（8）　(1/2)



第 71 図　石製品（1～3）　ミニチュア土器（4・5）　土偶（6・7）　(4/5)

打製石斧（第48図1）片面に自然面を残す。刃部は片刃である。

磨製石斧（第48図2～6）すべて破損品である。研磨痕および線状痕がみられる。

礫　　器(第49図～第52図)打製石斧と同様に礫から剥離した厚い剥片素材の石器も含めている。

1類（第49図1～3　第50図4・5）分厚い剥片素材の礫器。片面に自然面を残している。

2類（第49図4・5　第50図1～3　第51図　第52図1)円礫に調整剥離を加えて作りだした礫器。刃部には細かな調整を加える例が多い。また、ほとんどの礫器の両面に自然面を残す。

3類（第52図2・3）両面ともに入念な調整剥離が加えられた例。石核の可能性もあるが、明確に打面縁調整と考えられる剥離痕がないよう思われる。

磨　　石（第53図～第56図1～4）

1類（第53図　第54図1）長径30cm前後の楕円形大形磨石。

2類（第54図2）直径16cm前後の円形大形磨石。

3類（第55図　第56図2）長径12～13cm台のやや楕円形の磨石。第55図3は凹石兼用。

4類（第56図1・3・4）長径8～9cm台 のやや楕円形の小形磨石。

敲　　石（第56図5・6）

1類（第56図5）長軸17cm 台の半楕円形。潰れたアバタ痕が側縁部に顕著である。

2類（第56図6）長軸16cm台の不整長方形。上下端・左右側縁部に敲打痕があり、潰れた面は平坦である。おそらく堅果類の敲打に使用されたものと考えられる。表裏面の縁部側に、手擦れによると思われる摩耗痕がある。

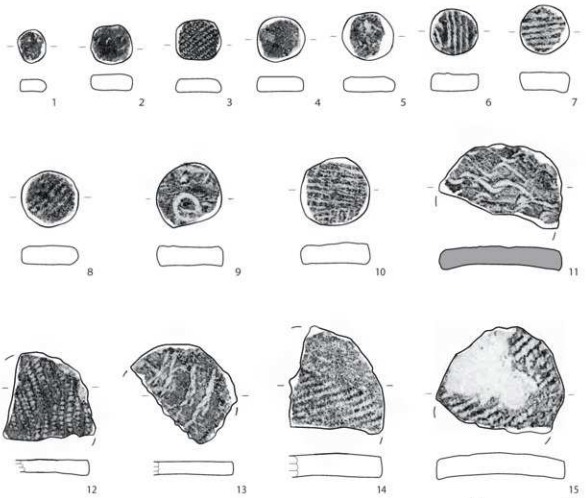
石　　核（第57図～第68図）石核は53点出土した。図化したのは34点である。石質は細粒砂岩（弱熱変成）・黒色頁岩（弱熱変成）・珪質頁岩・ホルンフェルスがある。

1類（第57図～第60図）自然面打面の石核。19点出土し、図化したのは12点である。平坦な石理面を打面とする個体がほとんどであるが、第60図4は礫面である。第57図1・2は出土石核中最大の長さ11.4cmの大形石核である。作業面は1面である。側面調整が加えられる。下縁調整がなく、石理面をそのまま下底面とする例が多い。

2類（第61図～第65図）多剥離面打面の石核。16点出土し、12点図化した。打面に一部石理面を残す個体が多い。作業面は多くの個体で1面であるが、打面転移のある個体（第62図1・2　第64図1・3）では2面である。側面調整が加えられ、下縁調整のある個体が多い。下底面には調整剥離が加えられ、部分的に石理面を残す個体もある。多くは平坦な面を形作る。

3類（第66図　第67図）複剥離面打面の石核。12点出土し、6点図化した。打面に石理面・礫面が多く残る。擦痕のある個体があるが、新しいキズのように思われる。作業面は1面である。側面調整が加えられる。下縁調整のある個体が多い。下底面は石理面・礫面および調整剥離を加えた平坦な形状の例が多いが、剥片剥離が進行して角錐状の個体もある。

4類（第68図）点状打面の石核。6点出土し、4点図化した。残核と考えられる。4は出土石核中最少の個体。長さ3.4cmである。



第 72 図　円盤状土製品　(1/2)

4　遺物包含層出土の石製品・土製品

異形石器（第 69 図 1）頭部つまみ状、脚部は一方が欠損している。多頭錐の可能性もある。

軽石製品（第 69 図 2～5）楕円形・不整多角形の製品。2 は穿孔されている。

石　　剣（第 70 図）表裏・側面に研磨痕がある。1 には先端部に断面 V 字状の敲打痕が 10 数条認められる。7 は破片の縁部に調整剥離を加えてスクレイパーに再利用している。

石　　棒（第 70 図 8）細い研磨痕がある。表面は平滑である。

玦状耳飾（第 71 図 1）表面・側面に細かな研磨痕がある。

棒状石製品（第 71 図 2）全体の形状は不明。細かな研磨痕がある。

有孔石製品（第 71 図 3）全体の形状は不明。

土　　偶（第 71 図 6・7）立体的な土偶の脚部と板状の 2 点出土している。

円盤状土製品（第 72 図）84 点出土している。ほぼ円形の例が多いが、3 のように矩形の製品もある。最少は 1 の直径 1.8cm である。最大の例は 14 の直径推定 5 cm の製品と思われる。1～10・14 には側面に擦痕がみられる。

5　雲南遺跡から出土した動物遺存体

1　分　析　資　料

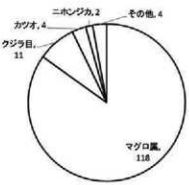
2013 年度の雲南遺跡の発掘調査において動物遺存体が出土した。貝層は検出されていないものの、調査区内では湧水が著しく、湿地状態であったために動物遺存体が残存したと思われる。動物遺存体は発掘時に目視で取り上げられたもので、保存状態の悪い脆弱な資料を多く含んでいる。当初二次堆積層と推測されたため、層位的な取り上げはおこなわれていないが、共伴した土器の型式から帰属時期は縄文時代前期～中期を主体とすると推測される。

種同定は、奈良文化財研究所の環境考古学研究室が所蔵する現生骨格標本と比較し、形態的特徴を観察することでおこなった。種名の記載と配列は阿部監修（2008）、中坊編（2013）に従った。

第 1 表　雲南遺跡出土動物遺存体種名表

脊椎動物門	
硬骨魚綱	
カツオ	*Katsuwonus pelamis*
マグロ属	*Thunnus* sp.
哺乳綱	
ニホンジカ	*Cervus nippon*
クジラ目	Cetacea sp.

第 73 図　動物遺存体の組成（n=139）



2　同　定　結　果

雲南遺跡から出土した動物遺存体は 4 分類群、計 139 点で、内訳は魚類 122 点、哺乳類 17 点である。魚類ではマグロ属とカツオ、哺乳類ではニホンジカ、クジラ目と種不明の中型哺乳類が出土している。

最も多く出土したのはマグロ属であり、全体の 8 割以上を占めている（第 73 図）。全て椎骨であり、状態が悪く計測できなかったものの、1m 以下の小さいものから 2m 近い大型の個体まで含まれていると推測される。マグロ属やカツオは季節的な回遊をおこない、三陸地方ではおもに初夏から秋にかけて来遊する（井田 1994）。したがって、当該季節における活発な漁撈活動が推測される。

マグロ属に次いで多かったのはクジラ目で、椎骨と上顎骨の一部と思われる破片が複数出土している。椎骨のサイズからイルカ程度の大きさであると思われる。ニホンジカは手根骨が 2 点出土しており、いずれも熱を受けて白く変色している。また、中型哺乳類は腰椎のみの出土であったため、種の特定には至らなかった。イヌやタヌキなどに近い大きさである。

3　考　　察

雲南遺跡では、2002～2004 年度にかけておこなわれた発掘調査で湧水の著しい地点から多くの

動物遺存体が出土している（遠藤ほか 2006）。今回と同様に貝層は検出されていないため脆弱な資料が多いが、1mm 目の篩によって微細な魚骨も多量に回収されている。マグロ属やニシン科が非常に多く出土しており、哺乳類は少ないことが特徴として挙げられる。出土したマグロ属の大部分は椎骨で占められるが、尾柄部や下尾軸骨にあたる椎骨の出土数が少なく、尾部が遺跡内に持ち込まれなかった可能性が指摘されている。

今回出土したマグロ属は、腹椎が 25 点、尾椎が 11 点、腹椎か尾椎か判別できないが体部の中央付近にあたる椎骨が 82 点であり、尾柄部が少ないという共通した特徴が認められた。尾柄部を切り落とすという解体行為があったことは周辺の貝塚においても指摘されているが、一方で尾柄部の椎骨が連結した状態で出土する例も少なからず認められる（及川ほか 1979、松崎・山崎 2017 など）。この点に関して、大船渡市の宮野貝塚と陸前高田市の大陽台貝塚から出土したマグロ属の部位別の出土比率の検討により、尾柄部がしばしば別の場所に廃棄されることはあったが、全身の部位を遺跡内に持ち込んでいたことが指摘されている（佐藤・吉田 2015）。雲南遺跡のように顕著な偏りが見られる事例はその他には報告されておらず、今後の発掘調査の蓄積が望まれるが、少なくとも集落外においてマグロ属の尾柄部を切り落とした後に持ち込む場合と、全身の部位を持ち込む場合があり、いくつかの解体手順があったことが示唆される。

引 用 文 献

阿部永監修 2008『日本の哺乳類　改訂 2 版』東海大学出版会

井田齊 1994「第三章　海洋生物」『陸前高田市史第一巻自然編』陸前高田市

遠藤勝博・佐藤正彦・熊谷賢・小金山一義・坂本優子 2006『雲南遺跡－主要地方道大船渡広田陸前高田線（アップルロード）道路改良工事－』陸前高田市教育委員会

及川洵・遠藤輝夫・遠藤勝博・金子浩昌・牛沢百合子 1979『大陽台貝塚』陸前高田市教育委員会

佐藤孝雄・吉田彩乃 2015「縄文時代におけるマグロ属の利用—岩手県宮野貝塚出土資料の検討—」『史学』85（1・2・3）、379-399 頁

中坊徹次編 2013『日本産魚類検索　全種の同定　第三版』東海大学出版会

松崎哲也・山崎健 2017「磯草貝塚から出土した動物遺存体」『気仙沼市震災復興関連遺跡発掘調査報告書 1－平成 24 年度東日本大震災復興交付金埋蔵文化財発掘調査事業に伴う個人住宅関連遺跡発掘調査－』気仙沼市教育委員会、67-76 頁

第２表　雲南遺跡出土動物遺存体一覧表

No.	遺跡名	地区	層位	大分類	小分類	部位	左右	成長	雌雄	備考
1	UNI3	グリッドE3	灰褐色土層	硬骨魚綱	マダイ属	尾椎				
4	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
4	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
4	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
4	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
4	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
4	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
4	UNI3	グリッドE1	不明	哺乳綱	大型哺乳類	離椎		未癒合		
5	UNI3	グリッドE1	不明	哺乳綱	クジラ目	尾椎		癒合（癒）		イルカサイズ
9	UNI3	グリッドE1	不明	哺乳綱	クジラ目	離椎		未癒合		イルカサイズ
15	UNI3	グリッドE2	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
25	UNI3	グリッドE2	不明	哺乳綱	大型哺乳類	不明			褐色/白色	最小値
28	UNI3	グリッドE1	不明	哺乳綱	ニホンジカ	手根骨	左		褐色/白色	
34	UNI3	グリッドE3後期	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
38	UNI3	グリッドE2上層	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
39	UNI3	グリッドE2上層	不明	哺乳綱	中型哺乳類	離椎		癒合		
40	UNI3	グリッドE2上層	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
41	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	カツオ	尾椎				
45	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	尾椎				
45	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
45	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
45	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
45	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
45	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
45	UNI3	グリッドE1	不明	哺乳綱	クジラ目	椎骨		未癒合		
46	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	カツオ	尾椎				
48	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	離椎				
48	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	離椎				
48	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	離椎				
48	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	尾椎				
48	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
48	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
48	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
48	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
48	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
48	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
48	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
48	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
48	UNI3	グリッドE1	不明	哺乳綱	クジラ目	上顎臼歯?				イルカサイズ
49	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	離椎				
49	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	離椎				
49	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	離椎				
49	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	離椎				
49	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	離椎				
49	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
49	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
49	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
50	UNI3	グリッドE2	不明	哺乳綱	クジラ目	離椎		癒合		イルカサイズ
50	UNI3	グリッドE2	不明	哺乳綱	クジラ目	離椎		癒合（癒）		イルカサイズ
50	UNI3	グリッドE2	不明	哺乳綱	クジラ目	離椎		癒合（癒）		イルカサイズ、癒合無癒合り、癒合しないがおそらく同一個体
54	UNI3	グリッドE2上層	1～6	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
56	UNI3	グリッドE2上層	不明	硬骨魚綱	マダイ属	離椎				
56	UNI3	グリッドE2上層	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
56	UNI3	グリッドE2上層	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
56	UNI3	グリッドE2上層	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
56	UNI3	グリッドE2上層	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
56	UNI3	グリッドE2上層	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
57	UNI3	グリッドE3/3間	灰褐色土層	硬骨魚綱	マダイ属	離椎				
57	UNI3	グリッドE3/3間	灰褐色土層	硬骨魚綱	マダイ属	離椎				
57	UNI3	グリッドE3/3間	灰褐色土層	硬骨魚綱	マダイ属	離椎				
57	UNI3	グリッドE3/3間	灰褐色土層	硬骨魚綱	マダイ属	離椎				
57	UNI3	グリッドE3/3間	灰褐色土層	硬骨魚綱	マダイ属	尾椎				
57	UNI3	グリッドE3/3間	灰褐色土層	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
57	UNI3	グリッドE3/3間	灰褐色土層	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
57	UNI3	グリッドE3/3間	灰褐色土層	哺乳綱	クジラ目	離椎		癒合		イルカサイズ
58	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
58	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
58	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
58	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
58	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
58	UNI3	グリッドE1	不明	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
59	UNI3	グリッドE3/3間	灰褐色土層	硬骨魚綱	マダイ属	離椎				
59	UNI3	グリッドE3/3間	灰褐色土層	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
59	UNI3	グリッドE3/3間	灰褐色土層	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
59	UNI3	グリッドE3/3間	灰褐色土層	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				
59	UNI3	グリッドE3/3間	灰褐色土層	硬骨魚綱	マダイ属	椎骨				

59	UN13	グリッドE3層	灰褐色土層	縄文前期	マグロ属	椎骨				
59	UN13	グリッドE3層	灰褐色土層	縄文前期	マグロ属	椎骨				
59	UN13	グリッドE3層	灰褐色土層	縄文前期	マグロ属	椎骨				
59	UN13	グリッドE3層	灰褐色土層	縄文前期	マグロ属	椎骨				
59	UN13	グリッドE3層	灰褐色土層	哺乳類	クジラ目	上腕骨破片				イルカサイズ
60	UN13	グリッドE3	不明	縄文前期	マグロ属	尾椎				
60	UN13	グリッドE3	不明	縄文前期	マグロ属	尾椎				
61	UN13	グリッドE3北側	褐色土層下	縄文前期	マグロ属	椎骨				
61	UN13	グリッドE3北側	褐色土層下	縄文前期	マグロ属	椎骨				
61	UN13	グリッドE3北側	褐色土層下	縄文前期	マグロ属	椎骨				
61	UN13	グリッドE3北側	褐色土層下	縄文前期	マグロ属	椎骨				
61	UN13	グリッドE3北側	褐色土層下	縄文前期	マグロ属	椎骨				
61	UN13	グリッドE3北側	褐色土層下	哺乳類	中型哺乳類	肋骨		焼合		
63	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	尾椎				
63	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	椎骨				
63	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	椎骨				
63	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	椎骨				
63	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	椎骨				
63	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	椎骨				
63	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	椎骨				
64	UN13	グリッドE2	不明	哺乳類	ニホンジカ	手根骨	右		褐熱白色	
65	UN13	グリッドE3	7～16	縄文前期	マグロ属	椎骨				
67	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	腹椎				
68	UN13	グリッドE3	灰褐色土層	哺乳類	クジラ目	腰椎		焼合（強）		イルカサイズ
69	UN13	グリッドE3	灰褐色土層	哺乳類	クジラ目	腰椎		焼合（強）		イルカサイズ
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	カツオ	尾椎				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	カツオ	尾椎				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	腹椎				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	腹椎				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	腹椎				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	腹椎				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	腹椎				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	腹椎				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	尾椎				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	尾椎				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	尾椎				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	尾椎				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	椎骨				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	椎骨				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	椎骨				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	椎骨				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	椎骨				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	椎骨				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	椎骨				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	椎骨				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	椎骨				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	椎骨				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	椎骨				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	椎骨				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	椎骨				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	椎骨				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	椎骨				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	椎骨				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	椎骨				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	椎骨				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	椎骨				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	椎骨				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	椎骨				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	椎骨				
70	UN13	グリッドE2	不明	縄文前期	マグロ属	椎骨				

Ⅴ 獺 沢 貝 塚

1 調 査 要 項

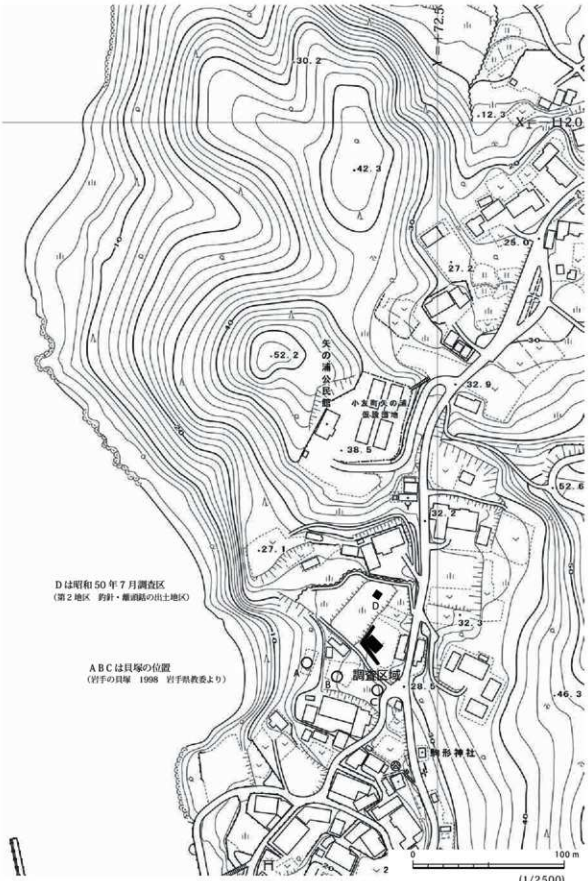
遺 跡 名 称　獺沢貝塚
遺 跡 略 号　UZ13（岩手県遺跡登録台帳番号 NF78－1067）
所　在　地　陸前高田市小友町字獺沢 64
遺 跡 現 況　畑地
遺 跡 性 格　貝塚
遺 跡 時 期　縄文時代
調 査 原 因　個人宅地造成
調 査 期 間　平成 25 年 8 月 29 日～平成 25 年 9 月 13 日
調 査 面 積　234.67 ㎡
調 査 主 体 者　陸前高田市教育委員会
調 査 担 当 者　陸前高田市教育委員会生涯学習課
調査担当職員　阿部泰之（同課主任主事・福岡市より派遣）
　　後藤　円（同課発掘調査員）

2　調査区の位置と周辺の遺跡

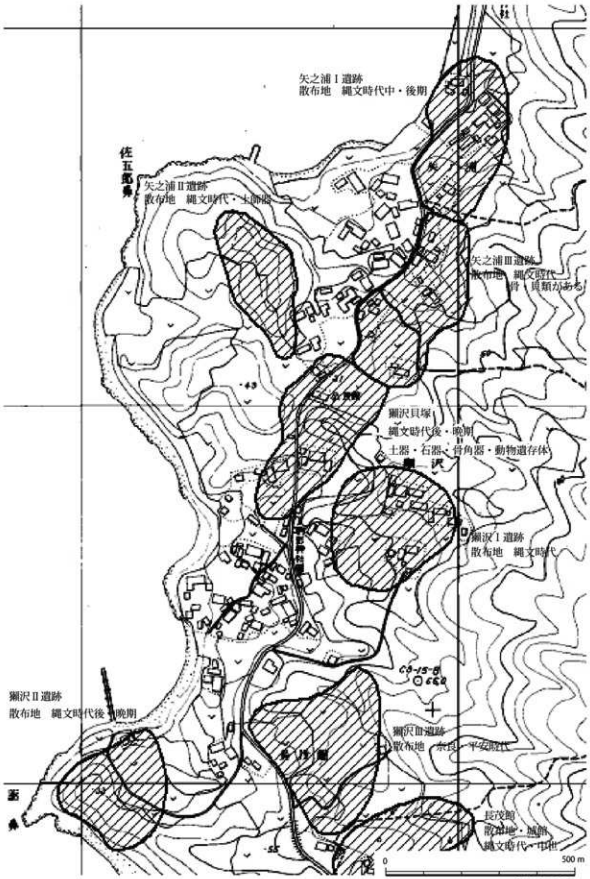
獺沢貝塚は海岸線へと続く斜面地に位置している。考古学史に名を残す著名な貝塚である。過去の調査については陸前高田市史に詳しい（佐藤正彦　1994　陸前高田市内の考古学研究史）。調査区はＢ・Ｃ地点貝塚の北側に隣接しているが、残念ながら貝層・遺構の検出はなかった（第 74 図）。

調査区の北側には、1975 年に調査が行われた第２地区がある（及川　洵　金子浩昌　1977）。縄文晩期中葉の一部残存していた貝層と破壊された貝層から多数の動物遺存体・骨角器が出土している。特に開窯式離頭銛の出土で注目された調査であった。

獺沢貝塚の南側には獺沢Ⅰ・Ⅱ遺跡が隣接しているが、おそらく貝塚を含めたこれら３遺跡は一体の遺跡群と思われる（第 75 図）。北には矢之浦Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡が位置するが、故及川千代松コレクションに縄文前期後葉から中期前葉の土器や貝類がある（大船渡市立博物館　1999）。



第 74 図　獅沢貝塚調査区域



第 75 図　獅沢貝塚と周辺の遺跡　（1/10000）

3　基　本　層　序

平成 24 年に実施した試掘調査の所見は以下の通りである。

第 1 層　褐色土層　層厚 10cm、表土、草木根を含む。

第 2 層　褐色シルト質土層　層厚 20cm。

第 3 層　暗褐色粘土質土層　層厚 20cm。

第 4 層　暗褐色土層　層厚 30cm。褐色シルト質土が混じる。遺物含む。

第 5 層　黄褐色土層　地山との漸移層。

第 6 層　黄褐色粘土質土層　地山。

4　調　査　の　成　果

1　遺物包含層

東から西へ緩やかな傾斜面に調査区は位置している。7 層の黒褐色シルト質土から遺物が出土している（第 76 図）。土器片は小破片が多く、他の遺物は器種に偏りがある。

2　遺物包含層出土の縄文土器・石器・石製品

縄文土器（第 77 図 1～11）1 は貝鳥式、2・3 は宮戸 2b 式である。4・5 も同時期と思われる。6～11 は大洞A′式の壷・鉢・浅鉢および台付浅鉢である。

磨製石斧（第 77 図 12）基部が欠損し、刃部の磨滅が著しい。

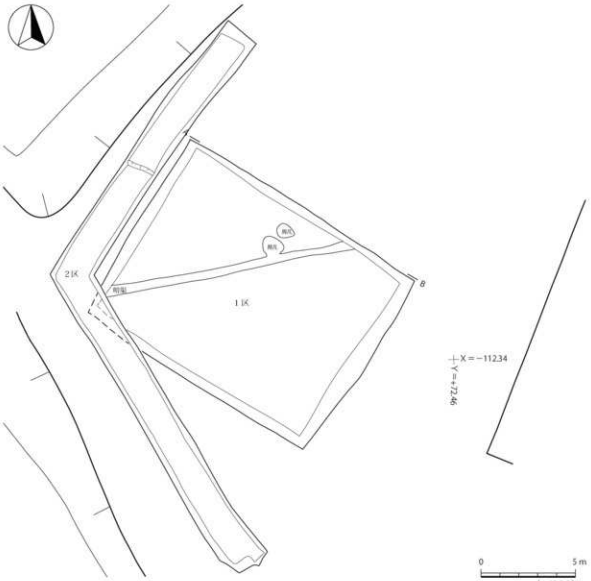
礫　　器（第 78 図 1・2）2 点とも礫から剝離した分厚い剝片を素材としている。

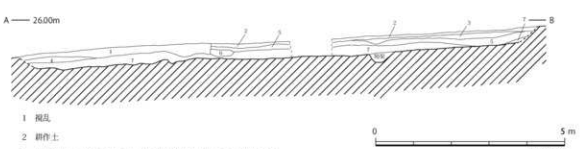
磨　　石（第 78 図 3・4）長径 10cm 前後の楕円形である。

凹　　石（第 78 図 5・6）矩形と不整楕円形の 2 点出土している。

石　　棒（第 77 図 13）断面やや楕円形である。

土　　偶（第 78 図 7）中空土偶の脚部である。かなり大形の土偶と思われる。器壁が厚いので大洞A′式期の製品と考えられる。





1　撹乱

2　耕作土

3　10YR4/1　褐灰色シルト質　地山および耕作土をブロック状に含む

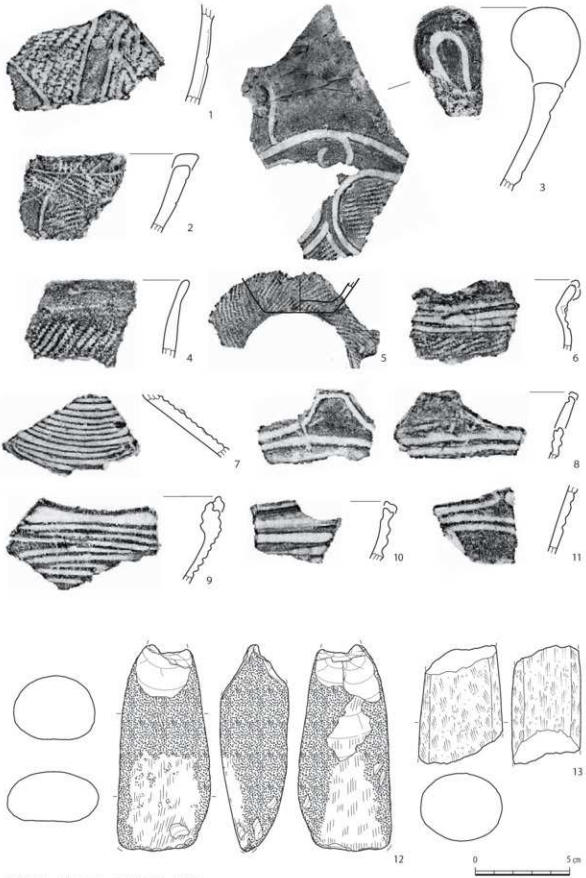
4　2.5Y4/1　黄灰色シルト質

5　2.5Y3/1　黒褐色シルト質

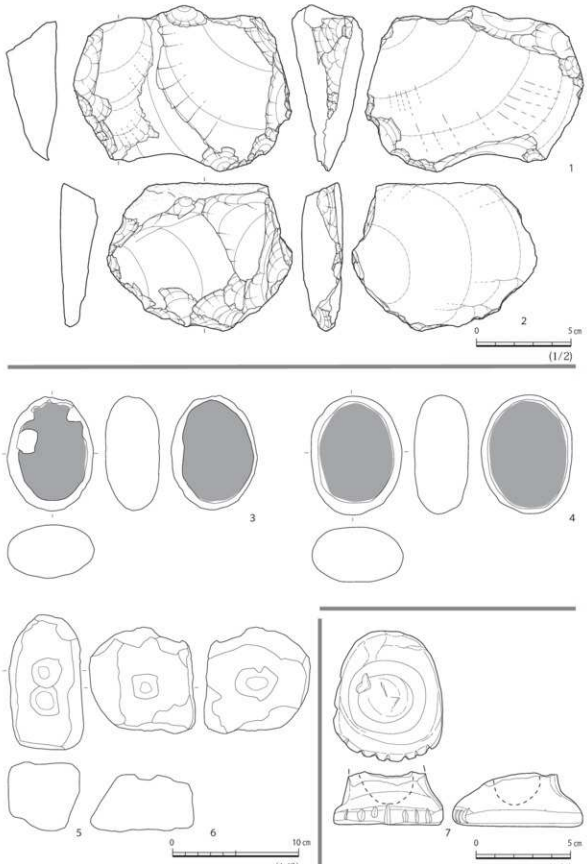
6　10YR3/2　黒褐色シルト質　地山および耕作土をブロック状に含む

7　10YR3/2　黒褐色シルト質　遺物少量含む

第76図　獺沢貝塚調査区全体図・土層断面図



第77図　縄文土器　磨製石斧　石棒



第78図　礫器　磨石　凹石　土偶

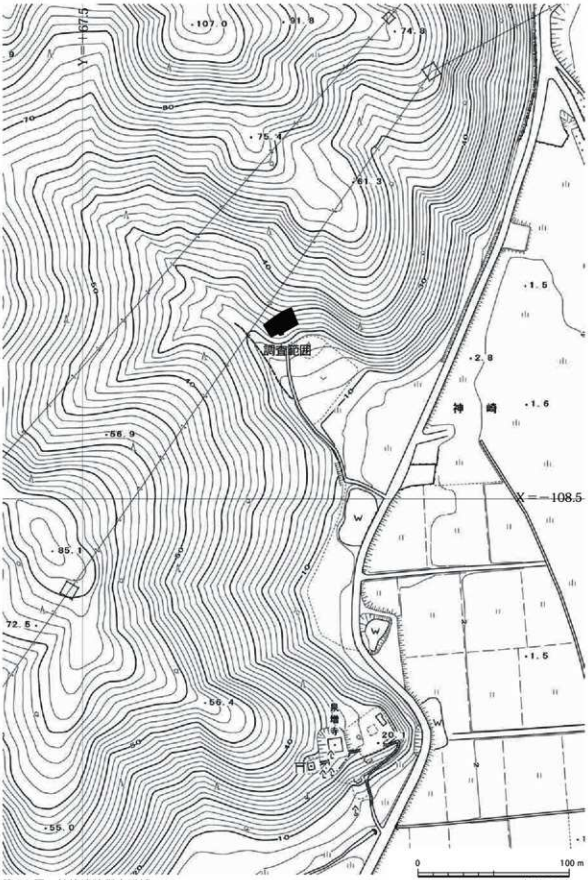
Ⅵ 神 崎 遺 跡

1 調 査 要 項

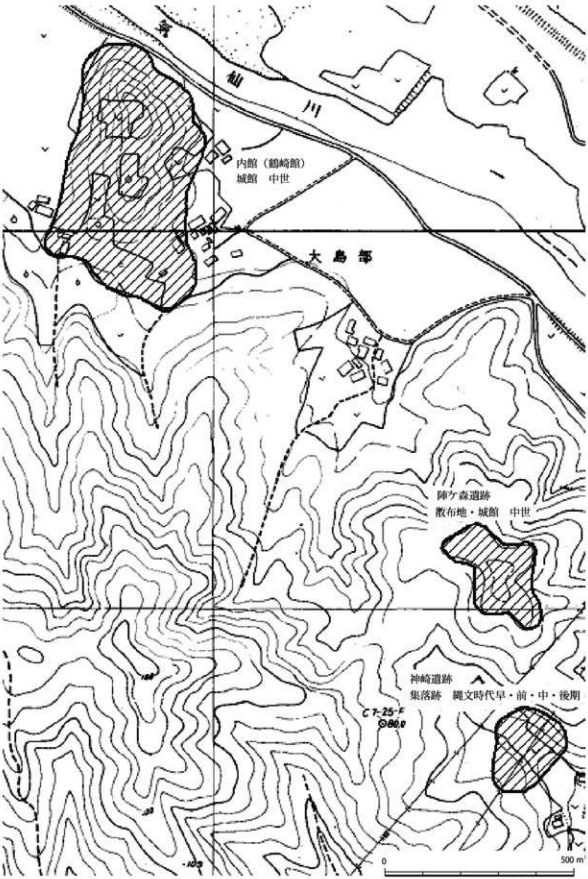
遺 跡 名 称　神崎遺跡
遺 跡 略 号　KZ13（岩手県遺跡登録台帳番号 NF66－0368）
所　在　地　陸前高田市気仙町字神崎 98
遺 跡 現 況　畑地・山林
遺 跡 性 格　集落跡
遺 跡 時 期　縄文時代
調 査 原 因　個人宅地造成
調 査 期 間　平成 25 年 10 月 3 日～平成 25 年 11 月 22 日
調 査 面 積　451.5 ㎡
調 査 主 体 者　陸前高田市教育委員会
調 査 担 当 者　陸前高田市教育委員会生涯学習課
調査担当職員　今井隆博（同課主事・福岡市より派遣）
　　後藤　円（同課発掘調査員）

2　調査区の位置と周辺の遺跡

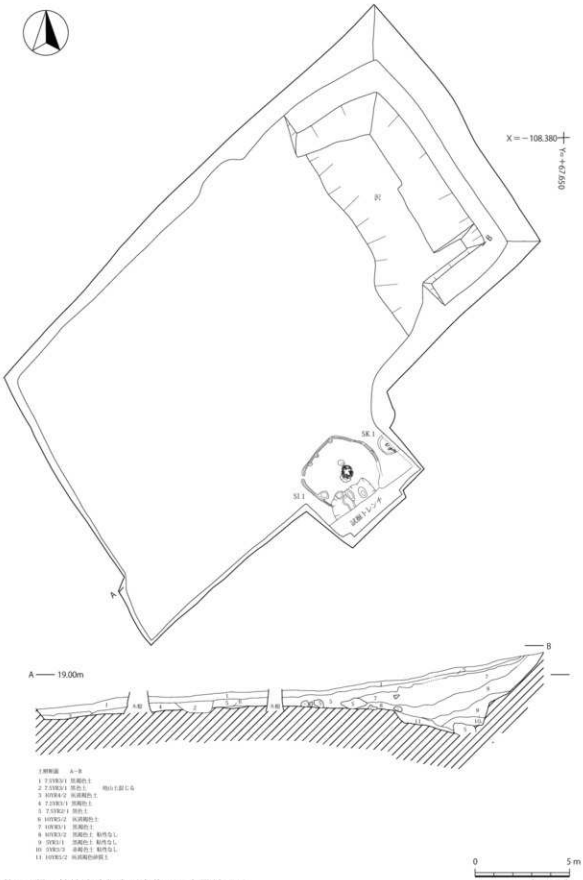
神崎遺跡は気仙川右岸の丘陵地に位置している。調査区の標高は 20mから 30mである（第 79 図）。北側には中世城館の陣ケ森遺跡が、さらにその西側には中世城館の内館がある（第 80 図）。内館の北西 200m 付近は、気仙川支流矢作川との合流点である。この矢作川流域は遺跡の分布密度が高く、特に左岸に密集している。昭和 62 年、矢作川に沿って延びる国道 343 号線の改良工事に伴い、打越・東角地遺跡・古館跡の発掘調査が岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターによって行われている（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1988）。打越遺跡は金の採掘跡 13 基が検出され、雪沢金山・玉山金山との関連が注目された。東角地遺跡は大木 6 式の遺構・遺物が出土している。古館跡では中世城館の遺構と縄文時代から弥生時代の遺構・遺物が出土している。城館の廃絶時期は 16 世紀の末と考えられている。



第 79 図　神崎遺跡調査区域　(1/2500)



第 80 図　神崎遺跡と周辺の遺跡



第 81 図　神崎遺跡調査区全体図・土層断面図

3　基　本　層　序

平成 25 年に実施した試掘調査の所見は以下の通りである。

第 1 層　暗褐色土層　層厚 20～40cm。

第 2 層　黒褐色土層　層厚 20～30cm。

第 3 層　黄褐色砂質粘土層　層厚 10cm 以上、地山。

4　調　査　の　成　果

1　1 号竪穴住居跡（SI 1）　（第 82 図～第 84 図 2）

平　面　形　東側の壁ラインが湾曲しているが、基本形は隅丸正方形である。南側壁ラインは撹乱のため破壊されている。東西方向 3.82m、南北方向は推定 3.7m である。

壁　　住居壁は深さ 2 cm 程度、残存していた。

柱　　穴　P1 から P5 が壁周溝に接している。P6 は炉に隣接する。住居床面からの深さは P1 が 13cm、P2 は 21cm、P3 は 22cm、P 4 は 27cm、P 5 は 19cm、P6 は 40cm であった。

炉　　住居跡のほぼ中央に位置する。花崗岩を使用した石囲炉である。平面形は長軸 69cm、短軸 61cm の楕円形である。炉石の内側に土器片を並べている。土器の被熱は著しい。土器底部の出土はなく、また、接合してみると同一個体の破片ではあるが、個体は全周することはない。意図的に打ち割った破片を利用している（第 83 図 1 ）。なお、調査時の記録によれば、焼土の堆積がなかったとあるので住居の利用はごく短期間であったと思われる。第 82 図には炉床の範囲は図示していない。

埋　　土　非常に薄いため図化された記録はエレベーションのみである。黒色土の堆積があったとの記録がある。

遺物出土状況　炉内の粗製深鉢と炉の周辺から出土した土器片・石鏃・石錐・スクレイパー（石匙つまみ部の再利用）・礫器・磨石（敲石兼用）がある。土器は 3 点とも第 9 群土器（縄内 B 式）である。

2　1 号土坑（SK 1）　（第 82 図・第 84 図 3・4）

1 号竪穴住居跡の東側に隣接する。平面形は直径 1.18m の円形と考えられる。深さは 26cm である。埋土中に粗製深鉢形土器が廃棄されていた（第 84 図 3・4）。第 8 群土器（縄内 A 式）である。

3　遺構出土の縄文土器

第８群土器（第 84 図３・４）１号土坑出土。図示した２個体は同一個体である。口縁部ゆるやかに外反屈曲している。２条の側面圧痕が施文される。貝鳥式から萪内Ａ式段階に認められる特徴と考えられる。調査区内の遺物包含層や沢部出土の土器は萪内Ａ式であるので、本例も同型式と思われる。

第９群土器（第 83 図１～３）３点ともに１号竪穴住居跡出土。粗製深鉢は口縁部外傾する。２は平行沈線文系、３は弧線文施文の磨消縄文系土器である。２の口縁部無文帯幅が宝ケ峯式に比較して狭いので萪内Ｂ式と考えられる。以上の特徴から３点とも萪内Ｂ式土器である。

４　遺構出土の石器・石製品

石　　鏃（第 83 図４・５）有茎式１点と凹基無茎式１点がある。ともに１号竪穴住居跡出土。

石　　錐（第 83 図６）錐部とつまみ状頭部の境界が不明瞭。頭部は三角形状。

スクレイパー（第 83 図７）石匙破損品の再利用。折れ面の縁部に調整剥離がある。

礫　　器（第 84 図１）大形の礫に調整剥離を加えている。基部の一部に自然面を残す。

磨　　石（第 84 図２）敲石兼用である。左右側縁部に溝状の深い敲打痕がある。

５　遺物包含層出土の縄文土器・石器

調査区内の木根付近および沢部から出土した遺物である。

第１群土器（第 85 図１・２）貝殻沈線文土器。

第２群土器（第 85 図３～５・第 86 図１～４）田柄貝塚第Ⅰ群土器。側面圧痕による対向する弧線文が特徴的である。口縁部縄文のみの例および胴部は前々段多条の原体である。

第３群土器（第 86 図５・６）上川名式土器の破片が２点出土している。

第４群土器（第 86 図７～９）大木１式土器。丸組紐の破片がある。

第５群土器（第 86 図 10）大木２ａ式土器。単軸絡条体第５類の破片が１点出土している。

第６群土器（第 86 図 11）大木８ｂ式土器。小形の深鉢である。

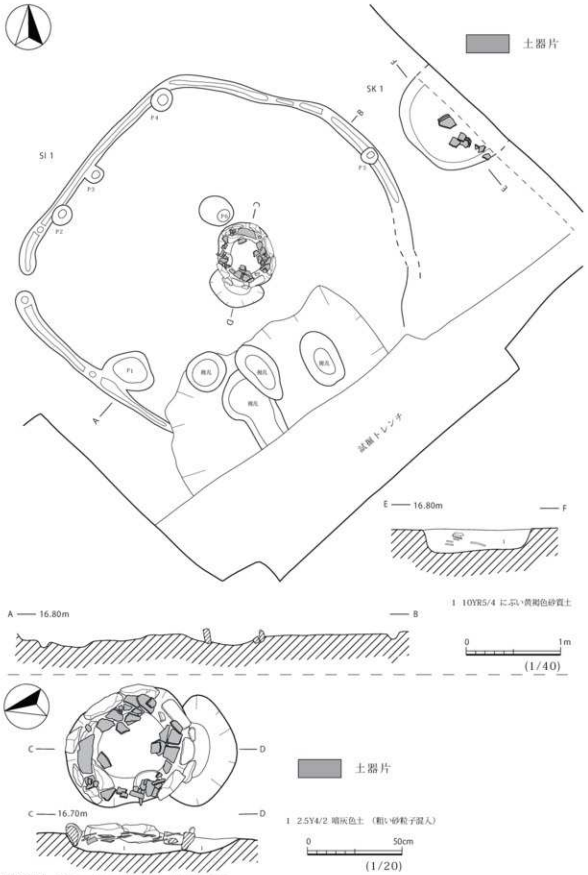
第７群土器（第 86 図 12・13・第 87 図１～３）大木９式土器。同式でも後半の個体である。

第８群土器（第 87 図４～９）萪内Ａ式土器。７は多重沈線文が特徴的である。

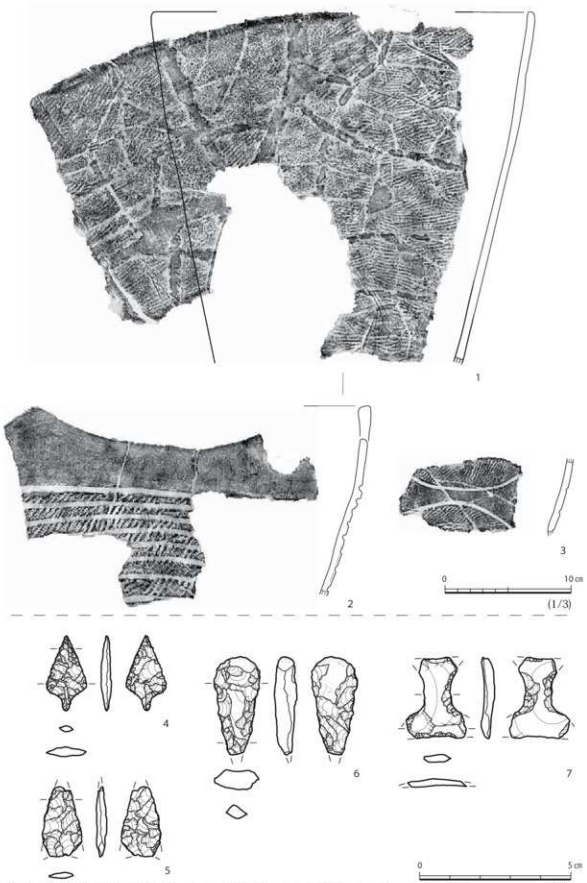
第９群土器（第 87 図10～14・第 88 図）萪内Ｂ式土器。第 87 図 10～14・第 88 図１は平行沈線文系、第 88 図２～５は磨消縄文系である。口縁部無文帯の幅が狭い。第 88 図７は胴部下半と台部下半を失っているが、華燭土器の全体像を知ることができる。台形縁の突起は３単位と考えられる。６は小形土器である。

石鏃・石匙・スクレイパー（第 89 図１～５）石鏃は凹基無茎式である。石匙は側縁が非対称形の小形の製品である。スクレイパーは素材剥片背面に入念な調整剥離があり、刃部弧状の掻器である。

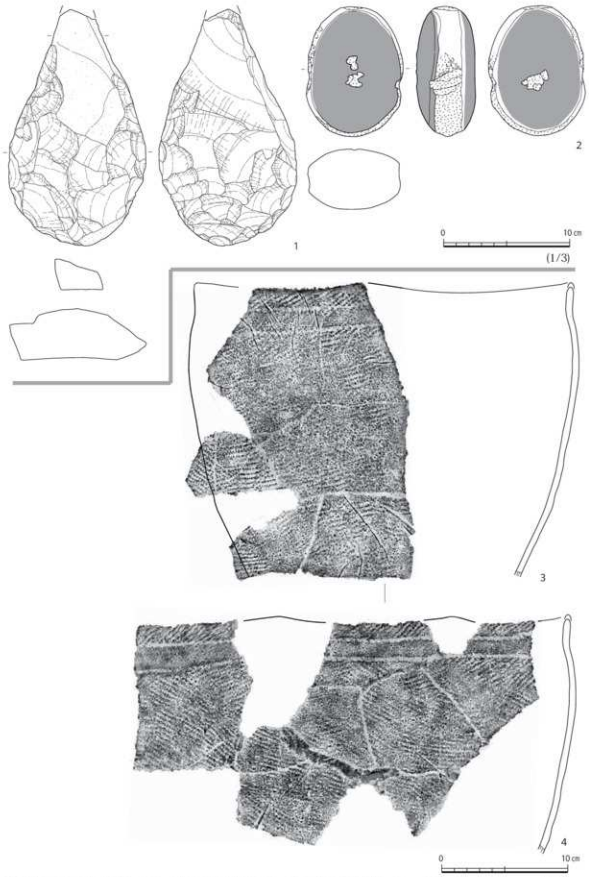
磨製石斧・礫器・磨石・敲石・凹石（第 89 図６～第 90 図）磨製石斧の破損品が一点出土している。他の石器も出土点数は少ない。



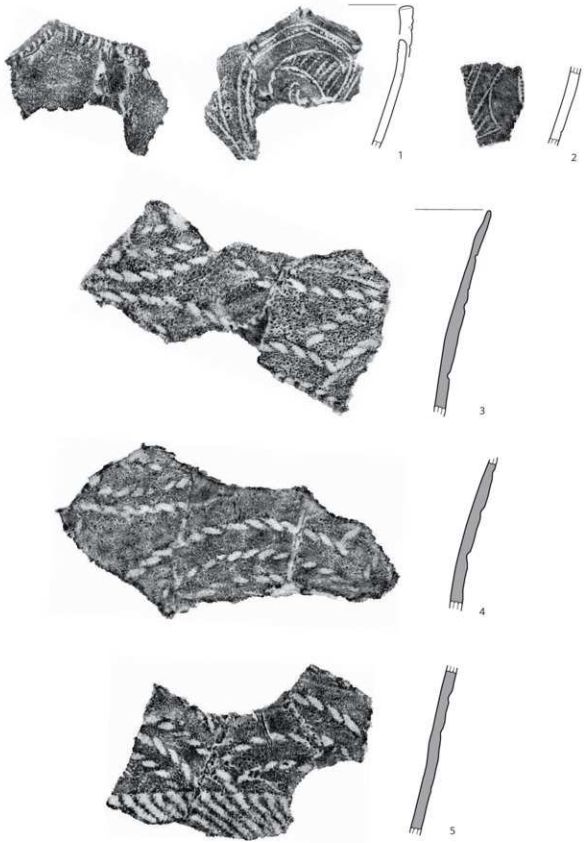
第 82 図　SI 1・SK 1 平面図・土層断面図



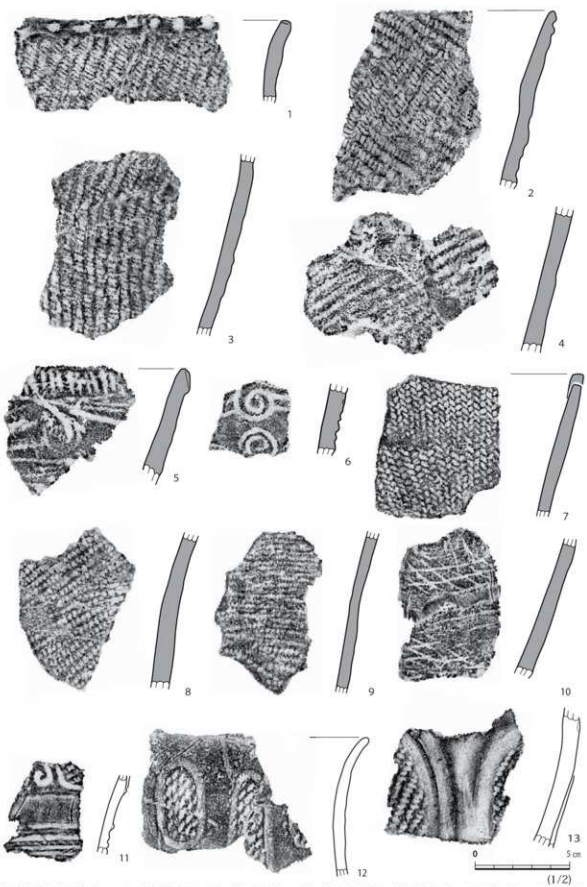
第83図　SI 1出土縄文土器（1～3）　石鏃（4・5）　石錐（6）スクレイパー（7）



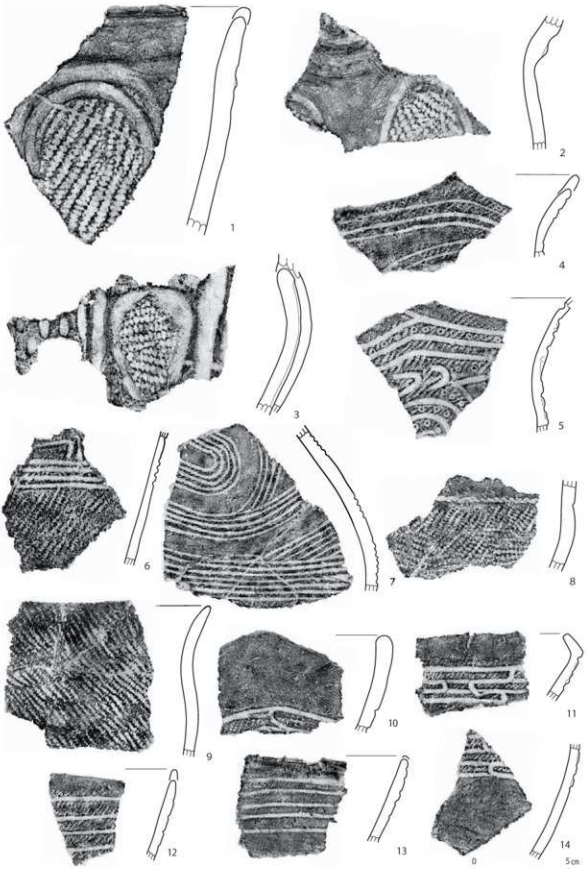
第84図　SI 1出土礫器（1）　磨石（敲石兼用2）・SK 1出土縄文土器（3・4）



第85図　第1群土器（1・2）第2群土器（3～5）



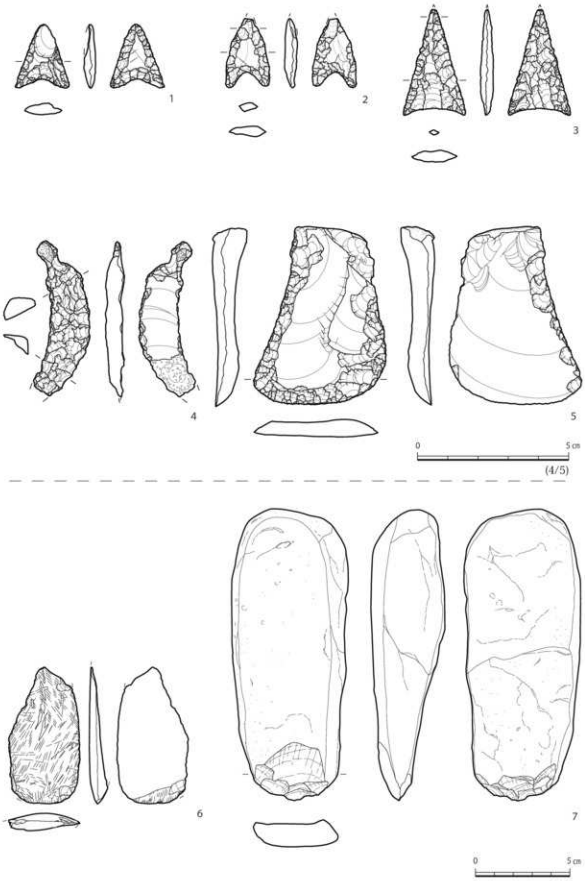
第86図　第2群（1～4）　第3群（5・6）　第4群（7～9）　第5群（10）　第6群（11）　第7群（12・13）土器



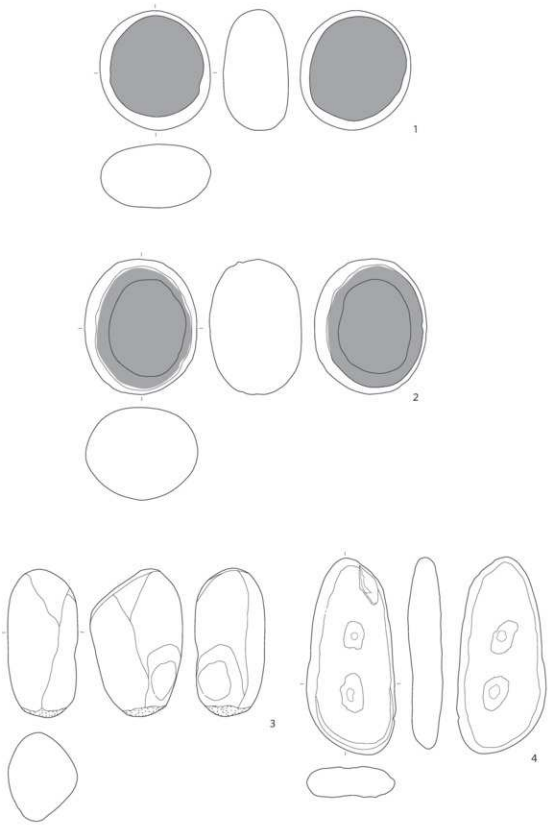
第87図　第7群（1～3）　第8群（4～9）　第9群（11～15）土器　(1/2)

第88図　第9群土器

(1/2)



第89図　石鏃（1～3）　石匙（4）　スクレイパー（5）　磨製石斧（6）　礫器（7）



第 90 図　磨石（1・2）　敲石（3）　凹石（4）

Ⅶ　三日市Ⅱ遺跡

1　調　査　要　項

遺 跡 名 称　三日市Ⅱ遺跡
遺 跡 略 号　MKI13（岩手県遺跡登録台帳番号 NF68－2198）
所　在　地　陸前高田市小友町字三日市 21
遺 跡 現 況　畑地
遺 跡 性 格　集落跡
遺 跡 時 期　縄文・奈良時代
調 査 原 因　個人宅地造成
調 査 期 間　平成 25 年 12 月 17 日～平成 26 年 1 月 15 日
調 査 面 積　53.75 ㎡
調 査 主 体 者　陸前高田市教育委員会
調 査 担 当 者　陸前高田市教育委員会生涯学習課
調査担当職員　後藤　円（同課発掘調査員）

2　調査区の位置と周辺の遺跡

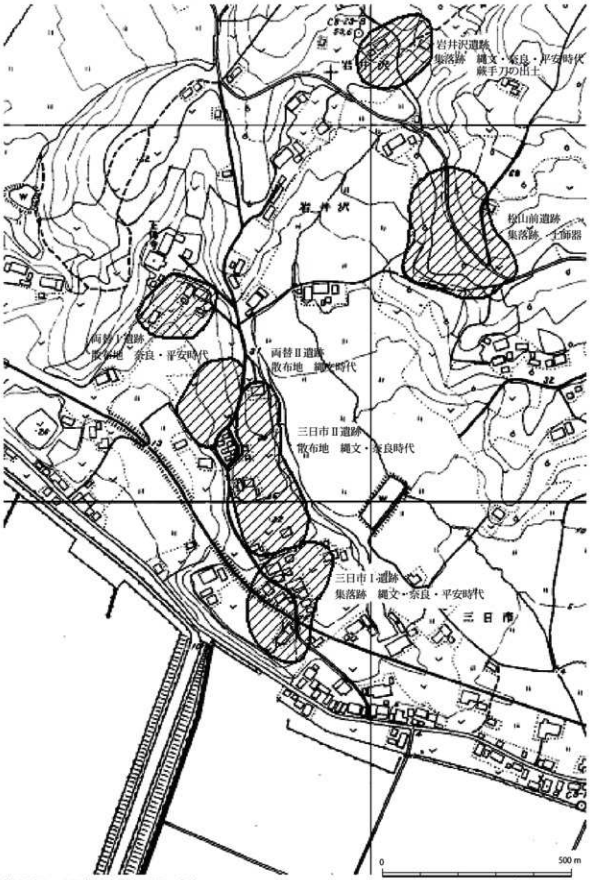
三日市Ⅱ遺跡は砂礫段丘上に位置している。調査区の標高は 20mから 22mである（第 91 図）。南へ約 400mの距離で海岸線に至る。北側には両替Ⅱ遺跡が、南側には三日市Ⅰ遺跡が位置している。周辺には縄文時代の遺跡とともに奈良・平安時代の遺跡が多い（第 92 図）。

松山前遺跡は 2004 年 4 月から 9 月の期間、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターにより大船渡広田陸前高田線緊急地方道路整備事業に伴い発掘調査が行われている（島原弘征　2006 ）。奈良時代前半の集落跡が発見され、8 棟の竪穴住居跡が検出されている。

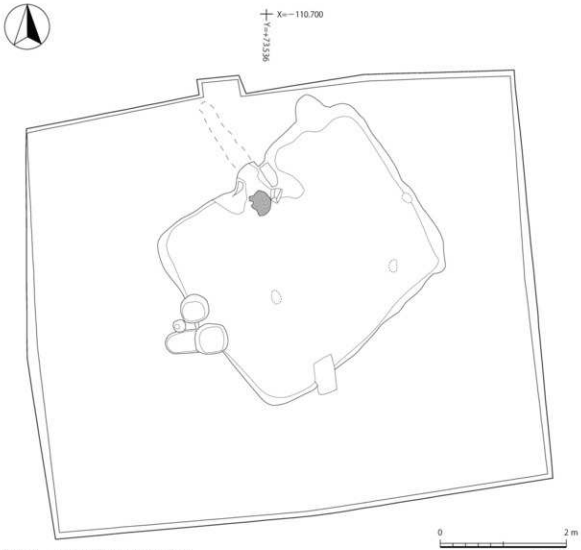
松山前遺跡の北東に隣接する岩井沢遺跡からは、蔵手刀が出土している。陸前高田市指定有形文化財に指定されている（陸前高田市教育委員会　1998　陸前高田市の指定文化財）。

小友町は奈良・平安時代の遺跡が多い傾向があり、古利常膳寺の西側に中西Ⅱ遺跡・西の坊遺跡が知られている。

第91図　三日市Ⅱ遺跡調査区域



第 92 図　三日市Ⅱ遺跡と周辺の遺跡　(1/10000)



第 93 図　三日市Ⅱ遺跡調査区全体図

3　基　本　層　序

平成 25 年に実施した試掘調査の所見は以下の通りである。

第 1 層　暗褐色土層　層厚 26～50cm。

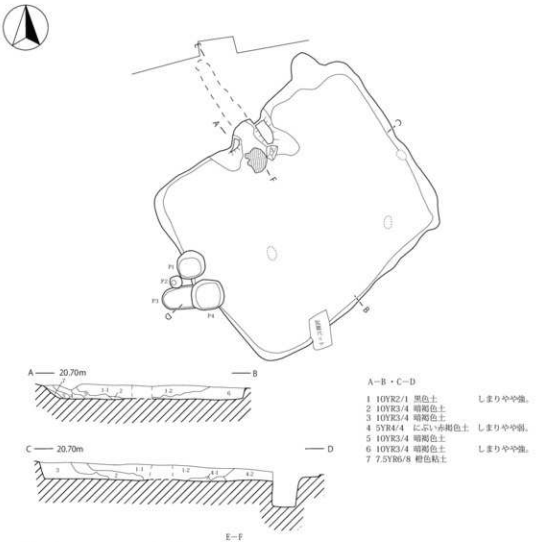
第 2 層　褐色粘土層　地山

4　調　査　の　成　果

1　1 号竪穴住居跡（SI 1）　（第 94 図・第 95 図）

平　面　形　長軸 4 m、短軸 3.40mの長方形。竈と対辺を基準にした主軸はN56˚ W。

竈　　住居北壁に設置されている。煙道を含めた長軸 2 m、短軸 1.2m。



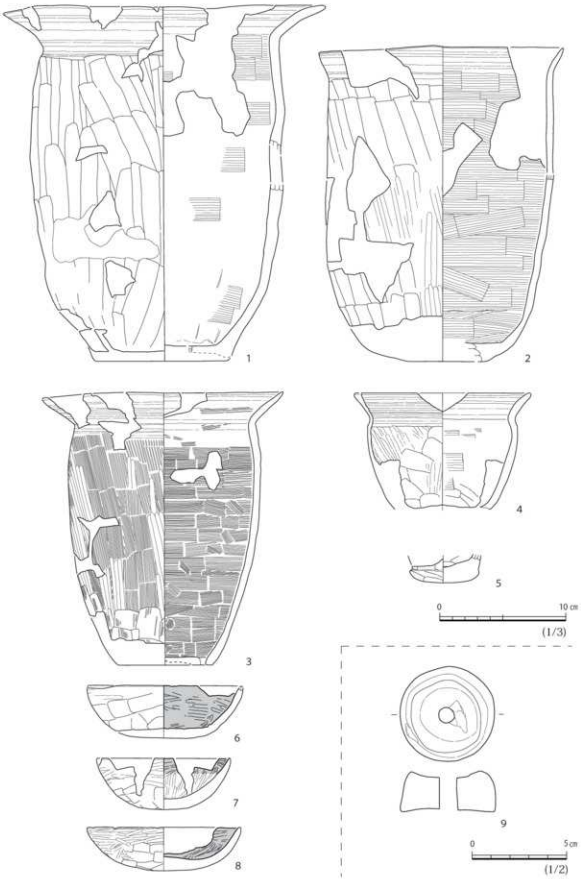
第 94 図　SI 1 平面図・土層断面図

壁　　住居壁は深さ 25cm～26cm 程度、残存していた。

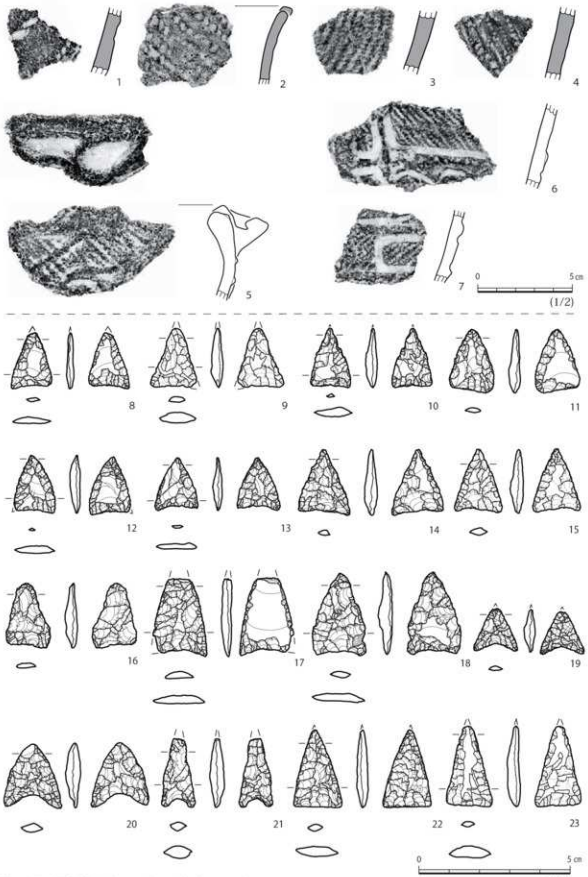
柱　　穴　主柱穴は未検出。P1 から P4 が壁に接している。住居跡との関係は確実ではないが、出入口に関連するピットの可能性はある。深さは P1 が 44cm、P2 は 21cm、P3 は 5 cm、P 4 は 62cm である。

埋　　土　黒色土・褐灰色土が堆積している。

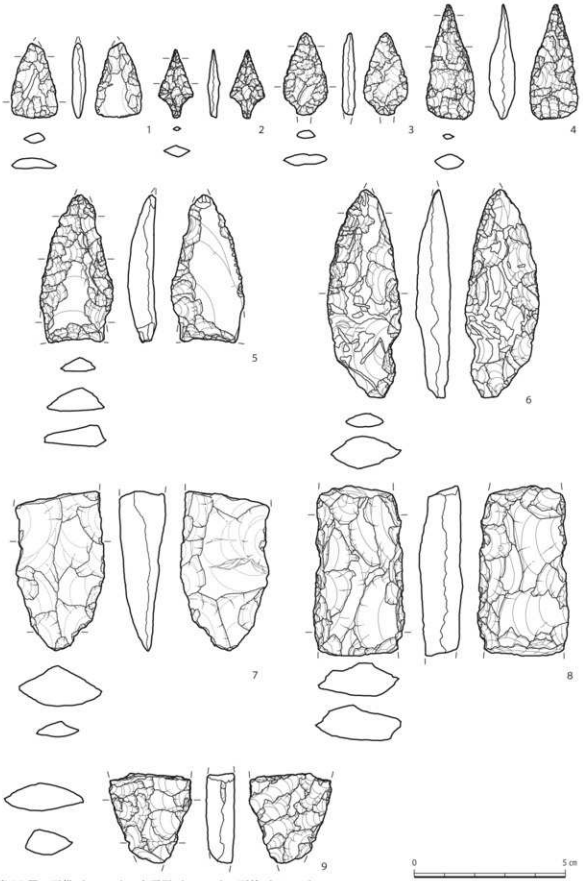
遺物出土状況・出土遺物　土師器は竈と竈周辺から甕 2 点（1・2）、小形甕 1 点（4）、甑 1 点（3）、鉢の底部 1 点（5）、坏 3 点（6～8）が出土した。土製品は紡錘車が 1 点（9）出土している。また、埋土中から縄文土器が数点出土した（第 96 図 1～7）。田柄貝塚第 I 群（1～4）と大木 7b 式（5～7）の小片である。



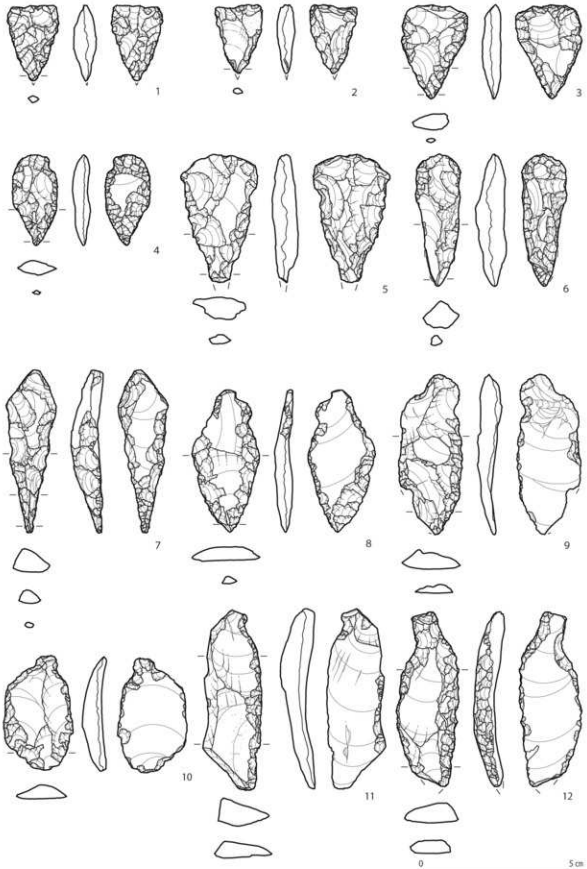
第 95 図　SI 1 出土土師器（1 ～ 8）　土製紡錘車（9）



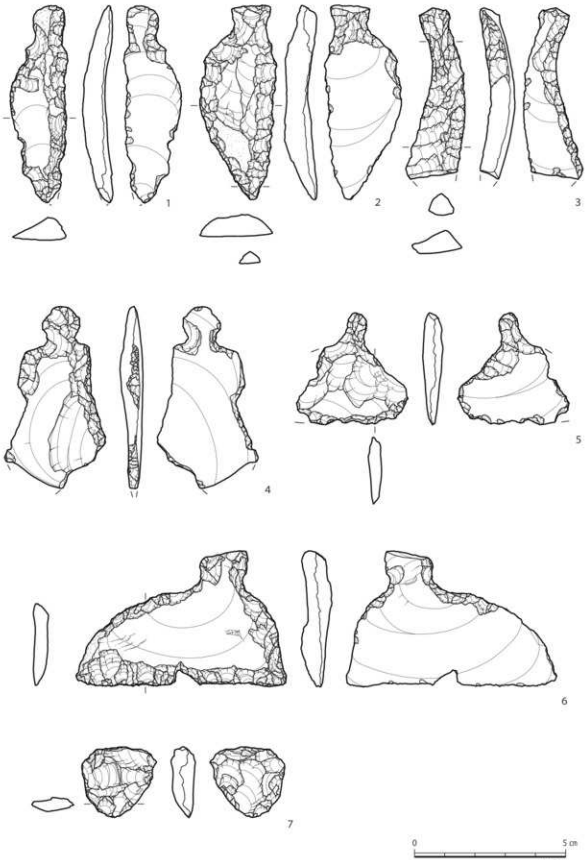
第96図　縄文土器（1～7）　石鏃（8～23）



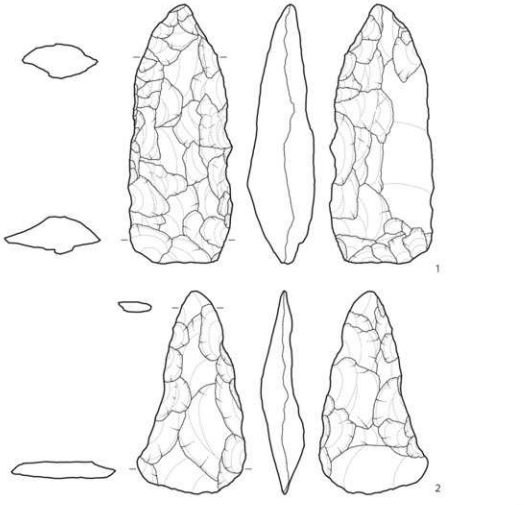
第97図　石鏃（1～3）　尖頭器（4・5）　石槍（6～9）　(4/5)



第98図　石錐（1～7）　石匙（8～12）　(4/5)



第99図　石匙（1～6）　スクレイパー（7）



第 100 図　小形打製石斧　(4/5)

2　調査区周辺採集の石器

石　　鏃（第 96 図 8～第 97 図 3）第 96 図 8 ～18 は凹基無茎式。抉入部が浅い。第 96 図 19～21 は抉入部の深い凹基無茎式。第 96 図 22～第 97 図 1 は平基無茎式。第 97 図 2 ・3 は有茎式の石鏃である。

尖　頭　器（第 97 図 4 ・ 5 ）厚さがあるが、両面とも入念な調整剥離が行われている。

石　　槍（第 97 図 6 ～ 9 ）いずれも破損品である。縄文早・前期の製品に比較して調整剥離痕が大きく、素材剝片は厚い。中期以降の石槍と思われる。

石　　錐（第 98 図 1 ～ 7 ）錐部とつまみ状頭部の境界が不明瞭。

石　　匙（第 98 図 8 ～第 99 図 6 ）縦形と横形が採集されている。

スクレイパー（第 99 図 7 ）刃部厚く、弧状。掻器としての用途・機能が考えられる。

小形打製石斧（第 100 図）2 は剥離面を刃部としている。縄文早期末に特徴的な小形打製石斧である。

Ⅷ 総　　括

1 雲 南 遺 跡

1　出土遺物点数

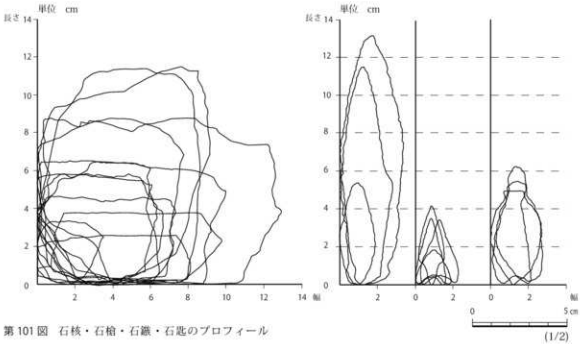
調査面積は 113.6 ㎡と狭い範囲であったが、出土遺物量は多く、総数は 3821 点であった。縄文土器 2067 点・弥生土器 1 点・土師器 2 点（内黒ロクロ成形）・須恵器 1 点・剝片 1387 点（内　粘板岩片 574 点）・石核 53 点・石鏃 45 点・石槍 6 点・石錐 11 点・篦状石器 2 点・楔形石器 1 点・石匙 16 点・スクレイパー26 点・打製石斧 1 点・磨製石斧 5 点・礫器 20 点・磨石 71 点・敲石 2 点・異形石器 1 点・軽石製品 4 点・石剣 7 点・石棒 1 点・玦状耳飾 1 点・石製品（棒状 1 点・有孔 1 点）2 点・ミニチュア土器 2 点・土偶 2 点・円盤状土製品 84 点である。

2　縄文土器の構成

雲南遺跡の縄文土器は、早期から晩期まで複数の型式が出土した。口縁部資料 335 点について型式別に数量を数えると早期第 1 群は 1 点のみであったが、前期の諸型式は数多い。以下列記すれば、第 2 群 4 点・第 3 群 49 点・第 4 群 19 点・第 5 群 30 点・第 6 群 31 点・第 7 群 16 点・第 8 群 2 点・第 9 群 118 点である。第 9 群大木 6 式が最多であることがわかる。中期以降は第 10 群 60 点・第 11 群 1 点・第 12 群 3 点・第 13 群 1 点である。第 10 群大木 7 a 式が多い。前期前葉から中期初頭の型式が主体を占め、前期末から中期初頭の大木 6 式と大木 7 a 式の出土量が際立っている。

大木 6 式の構成　大木 6 式の編年案は松田（松田光太郎　2003）今村（今村啓爾　2006）千葉（千葉直樹　2007）の論文がある。また、資料としては長根貝塚（藤沼邦彦　1969）滝ノ沢遺跡（稲野裕介他 1983）小梁川遺跡（相原淳一他　1986）嘉倉貝塚（佐藤憲幸・三好秀樹　2003）の諸例と隣接する地域では磯草貝塚（西村　力　2017）の土器群が知られている。雲南遺跡の第 9 群土器については今村論文を参考に時間的序列を検討すると、球胴形土器は 1・9 類が 1 期、10・12 類が 2・3 期（12 類の第 28 図 8 は 4 期）、11・13 類は 4 期（11 類の第 20 図 1 は台状部が長く 5 期）と考えられる。浮線文系球胴形土器は 14 類が 3 期、15 類が 5 期である。長胴形土器は 4・5・6 類が 2 期、2 類は 2・3 期（ただし、第 19 図 1・2 は 4 期）、7 類は 3 期、8 類は 4 期、3 類は 4・5 期（第 25 図 7・8 は 5 期）と考えられる。他の類型では 17 類が 5 期である。

大木 7 a 式の構成　長根貝塚第 3 群（藤沼　前掲）、丹羽論文の 7 a 式第Ⅰ・Ⅱ段階（丹羽　茂　1981）と考えられるのは第 10 群 1 類～6 類である。糠塚式（今村　前掲）は中期と後期の境界を示す型式



第 101 図　石核・石槍・石鏃・石匙のプロフィール

のように思われる。第 10 群 7 類～11 類は山内清男博士大木式土器写真の 7 a 式に該当する段階と考えられる（興野義一　1996）。丹羽論文の第Ⅱ段階以降（丹羽　前掲）である。

3　出　土　石　器

雲南遺跡の特徴として、石器の大量出土が挙げられる。石核（細粒砂岩・黒色頁岩・珪質頁岩・ホルンフェルス）は 53 点出土している。2002 年～2004 年の調査では、石核と残核 371 点、石槍 97 点出土の記録がある（佐藤正彦・坂本優子他　2006）。昨年調査が行われた大船渡市内田貝塚（縄文前期後葉～中期初頭）でも石器の大量出土が報告されている（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター現地説明会資料）。第 101 図には石核・石鏃・石槍・石匙の外形を示した。石核長さ 4 cm までが石鏃、6 cm までが石匙、8 cm～12cm が大形石槍に対応している。ただし、石槍 2 点は黄白色と明黄茶褐色の良質な珪質頁岩、石匙 1 点は明赤色の良質な珪質頁岩であって、石核の石質には無い製品である（第 42 図 1・3　第 45 図 1）。574 点出土した粘板岩片は整理作業期間の制約から図化しえなかったが、二次加工であるのか埋没する過程で刃こぼれ状の欠損が生じたのか明確に区別できなかった。粘板岩は気仙川右岸に分布している。雲南遺跡に持ち込まれたと考えられる。

4　雲南遺跡周辺の縄文時代前期の貝塚

広田湾岸には縄文前期の大規模な貝塚が分布している（第 2 図）。二日市貝塚と牧田貝塚は雲南遺跡の西 6.5km に位置する。二日市貝塚については大正 14 年の調査があるのみで詳細は不明だが、縄文前期の土器片が知られている（陸前高田市史第 2 巻　1994　気仙町地区の遺跡）。一方、牧田貝塚は 2 度の発掘調査が行われている（及川　洵　金子浩昌　1971・村上　拓　佐々木努　1996）。時期はほぼ雲南遺跡と共通し、大木 2 b 式から大木 7 a 式である。1970 年の調査は貝層の検出を目的とし

たものであった。A地点貝塚に4枚の貝層があり、下層は大木2b 式が上層は大木6式が出土している。大木6式が最多であったと報告されている（及川　金子　前掲）。動物遺存体はマグロ・マダイの出土が特徴的であったと金子浩昌氏の報告にある。1994 年の調査地区では大木3・4式の土器が多数出土している（村上　佐々木　前掲）。

雲南遺跡の南には2km 離れて大陽台貝塚が位置する。1976 年から 1977 年の調査では大木 5 式の貝層が発見されている。牧田貝塚と同様にマグロ・マダイが特徴的であった。大陽台貝塚のさらに南2kmに位置する国指定史跡中沢浜貝塚では、1986 年の 3 年次範囲確認調査で大木 4 式の貝層が、1987 年の 4 年次範囲確認調査で前期（型式の記載はない）の貝層が発見されている（佐藤正彦　蒲生琢磨　1987・1988）。また、中沢浜貝塚の真西に当たる対岸の出山山には、2012 年から 2013 年にかけて調査が行われた波怒棄館遺跡がある（文化庁文化財部記念物課　2016）。前期後葉の貝層から、マグロをはじめとして大量の遺物が発見された。

広田湾岸では大木2b 式から活発な漁撈活動が開始され、大木6・7a 式まで存続している。その後、大木7b・8a式の貝層が明確ではなくなる。大木8b式以降になると大陽台・門前・堂の前・貝畑・中沢浜貝塚が比較的長期継続型の貝塚と考えられる。雲南遺跡は今回の調査でも貝層の発見はなかったが、広田湾岸の前期貝塚と時代・時期に共通点が認められる。

2　獺沢貝塚・神崎・三日市Ⅱ遺跡

1　出土遺物点数

獺 沢 貝 塚　縄文土器 531 点・磨製石斧1点・礫器2点・磨石2点・凹石2点・石棒1点・土偶1点、総数540点。

神 崎 遺 跡　縄文土器1077点・石鏃5点・石錐1点・石匙1点・スクレイパー2点・磨製石斧1点・礫器2点・磨石3点（内　磨敲兼用1）・敲石1点・凹石1点、総数1094点。

三日市Ⅱ遺跡　縄文土器7点・土師器593点・石鏃38点・尖頭器2点・石槍5点・スクレイパー10点・石錐7点・石匙11点・小形打製石斧2点・砥石1点（現代）・土製紡錘車1点、総数677点。

2　遺構・遺物

獺 沢 貝 塚　遺構はなかったが、大洞A 式期の中空土偶脚部が出土した。縄文晩期の中核的集落の一端が窺える。

神 崎 遺 跡　萪内B式期の竪穴住居跡が発見された。沢部（自然流路）から萪内A・B式（鈴木克彦 2001）の土器資料が出土し、完全な形ではなかったが萪内B式の華燭土器が出土している。

三日市Ⅱ遺跡　8世紀後半国分寺下層式（氏家和典　1967・加藤道男　1989）の甕・甑・鉢・坏が出土した竪穴住居跡が発見された。南西1kmに位置する松山前遺跡（島原弘征　2006）と同時期の遺跡と考えられる。

引用・参考文献

加藤　孝　1951「宮城県上川名貝塚の研究」『宮城学院女子大学研究論文集 1』

小岩未治　1961「大木式系統土器の分布・大木式土器について　(山内清男博士提供の大木式土器写真　第 21 図・第 22 図・第 36 図・第 37 図・第 38 図・第 39 図)」『岩手県史第一巻　上古篇　上代篇』

氏家和典　1967「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』

小笠原好彦 1968「東北地方南部における前期末から中期初頭の縄文式土器」『仙台湾周辺の考古学的研究』

興野義一　1968「大木式土器理解のために（Ⅲ）」『考古学ジャーナル』18　ニュー・サイエンス社

興野義一　1968「大木式土器理解のために（Ⅳ）」『考古学ジャーナル』24　ニュー・サイエンス社

興野義一　1969「大木式土器理解のために（Ⅴ）」『考古学ジャーナル』32　ニュー・サイエンス社

藤沼邦彦　1969「出土遺物の考察」『埋蔵文化財緊急発掘調査概報―長根貝塚―』宮城県文化財調査報告書 第 19 集

興野義一　1970「大木 5b 式土器の提唱」『古代文化』22 巻 4 号

興野義一　1970「大木式土器理解のために（Ⅵ）」『考古学ジャーナル』48　ニュー・サイエンス社

及川　洵・金子浩昌　1971『牧田貝塚発掘調査概要』陸前高田市教育委員会

渡辺　誠　1973『縄文時代の漁業』考古学選書 7　雄山閣

保角里志　1975「小林 A 遺跡出土の土器について」『小林遺跡』東根市教育委員会

佐藤鎮雄・佐藤正俊　1976『小林遺跡』山形県埋蔵文化財調査報告書　第 8 集 山形県教育委員会

及川　洵・金子浩昌　1977『獅沢貝塚』岩手県陸前高田市教育委員会

八巻正文　他　1978『大木囲貝塚』七ヶ浜町文化財調査報告書　3 集

八巻正文　他　1979『大木囲貝塚』七ヶ浜町文化財調査報告書　4 集

及川　洵・牛沢百合子　1979『大陽台貝塚』　陸前高田市教育委員会

山内清男　1979『日本先史土器の縄紋』先史考古学会

渡辺　誠　1980「飛騨白川村のトチムキ石」『藤井雄介君追悼記念　考古学論叢』

丹羽　茂　1981「大木式土器」『縄文文化の研究』4 巻

及川　洵　1983『気仙地方の縄文貝塚』 陸前高田郷土史第二集　陸前高田市郷土史研究会

稲野裕介 他　1983『滝ノ沢遺跡』北上市文化財調査報告 33 集

小笠原好彦　1984「縄文時代前・中期の土偶」『宮城の研究 1』

相原淳一 他 1986『小梁川遺跡　遺物包含層土器編』宮城県文化財調査報告書　117 集

相原淳一　1986「第 I 群土器」『田柄貝塚』宮城県文化財調査報告書　111 集

佐藤典邦　1986『弘源寺貝塚』いわき市埋蔵文化財調査報告　第 13 冊

小田野哲憲　1987「岩手の弥生式土器編年試論」『岩手県立博物館研究報告書』第 5 号

庄子　敦　1987『笹谷六田遺跡』利府町文化財調査報告書 第 3 集

佐藤正彦・蒲生琢磨　1987『中沢浜貝塚発掘調査概報Ⅲ』陸前高田市文化財報告　第 11 集

佐藤正彦・蒲生琢磨　1988『中沢浜貝塚発掘調査概報Ⅳ』陸前高田市文化財報告　第 12 集

玉川英喜・中川重紀　1988『打越・東角地遺跡・古館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 131 集

加藤道男　1989「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会

白鳥良一　1989「前期大木式土器様式」『縄文土器大観 1』小学館

丹羽　茂　1989「中期大木式土器様式」『縄文土器大観 1』小学館

相原淳一　1990「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年」『考古学雑誌』76 巻 1 号

後藤勝彦　1990『仙台湾貝塚の基礎的研究』

長橋　至・佐藤正一 1990『押出遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書 150 集

志間泰治・桑月　鮮 1991『宝ヶ峯』財団法人 齋藤報恩会

藤沼邦彦　1992「宮城県の土偶　土偶とその情報」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 37 集

佐藤正彦　1994「陸前高田の遺跡」『陸前高田市史　第二巻　地質・考古編』

佐藤正彦　1994「陸前高田市内の考古学研究史」『陸前高田市史　第二巻　地質・考古編』

村上　拓・佐々木努　1996『牧田貝塚発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書　第 241 集

興野義一　1996「山内清男先生供与の大木式土器写真セットについて」『画龍天晴　山内清男先生没後 25 年記念論集』
佐藤典邦　1996『綱取貝塚』いわき市埋蔵文化財調査報告　第 45 冊
岩手県教育委員会　1998『岩手の貝塚』岩手県文化財調査報告　102 集
大船渡市立博物館　1999『気仙の遺跡Ⅱ　及川千代松コレクション』
鈴木克彦　2001「岩手県の後期前葉土器の編年」　『岩手考古学』第 13 号
鈴木克彦　2001『北日本の縄文後期土器編年の研究』　雄山閣
佐藤正彦　2002『相川Ⅰ遺跡発掘調査報告書』陸前高田市文化財調査報告書　24 集
佐藤浩彦　2002『新田Ⅱ遺跡』遠野市埋蔵文化財調査報告書　13 集
星　雅之　2002「縄文時代前期十和田中撮テフラ降下期集落跡の検討」『紀要』21 岩手県文化振興事業団埋蔵文化センター
佐藤憲幸・三好秀樹　2003『嘉倉貝塚』宮城県文化財調査報告書　第 192 集
鈴木克彦　2003「宝ヶ峯式土器の研究」『縄文時代』14 号
松田光太郎　2003「大木 6 式土器の変遷とその地域性」『神奈川考古』39 号
鈴木克彦　2004「華蠟土器」『縄文時代』15 号
鈴木克彦　2004「門前式土器様式の編年学的研究」『考古学雑誌』88 巻 4 号
今村啓爾　2006「大木 6 式土器の諸系統と変遷過程」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』20 号
今村啓爾　2006「縄文土器系統の担い手―関東地方から東北地方を北上した鍋屋町系土器の場合―」『伊勢湾考古』20 号
佐藤淳一・中村絵美　2006『大清水上遺跡発掘調査報告書』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書　第 475 集
須藤隆　他　2006「東北大学文学研究科考古学陳列館所蔵大木囲貝塚出土基準資料」Bullentin of the Tohoku University Museum
佐藤正彦・坂本優子　他　2006『雲南遺跡』陸前高田市文化財調査報告書　26 集
島原弘征　2006『松山前遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第 484 集
小林圭一　2007「押出遺跡出土の縄文時代前期の土器」『押出遺跡』山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
千葉直樹　2007「宮城県における縄文時代前期後葉の土器に関する一考察」『考古学談義』須藤隆先生退任記念論文集
領家正浩　2008「貝殻・沈線文系土器」『総覧　縄文土器』同刊行会
田村正樹　2013『大木囲貝塚』七ヶ浜町文化財報告書 10 集
野中裕貴　2016「気仙地域における弥生時代後期に属する土器について」『紀要』35 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
文化庁文化財部記念物課　2016「波怒棄館遺跡」『東日本大震災の復興と埋蔵文化財保護　中間報告』
西村　力　2017「磯草貝塚」『気仙沼市震災復興関連遺跡発掘調査報告書 1』気仙沼市文化財調査報告書 第 10 集

附 編

雲南遺跡における自然科学分析

株式会社古環境研究所

1．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復元に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。しかし花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もあり、堆積物の形成要因を知る手がかりにもなる。本報告では、雲南遺跡の縄文時代前期後半の堆積物について花粉分析を実施し、当時の植生と堆積環境について検討する。

2．試料とその性状

（1）試料

分析試料は、縄文時代前期後半の遺物を包含する丘陵斜面の谷地形を呈する遺構から採取された以下の６点である。

試料１：１層（黒褐色シルト）
試料２：２層（試料２暗黒褐色シルト）
試料３：３層（黒褐色～暗褐色砂混シルト～粘土）上部
試料４：３層（黒褐色～暗褐色砂混シルト～粘土）中部
試料５：３層（黒褐色～暗褐色砂混シルト～粘土）下部
試料６：４層（試料６褐色砂混シルト）

（2）性状

上位から、試料１（１層）は粗粒分が少なく細粒分に偏り、淘汰を受けた堆積物であるが、シルト・粘土の割合が高い。暗褐色化した微細木片が含まれ、土壌化ないし風化による分解を著しく受けている。試料２（２層）は中粒砂にピークがあり、淘汰を受けた堆積物であるが、シルト・粘土の割合が高く、暗褐色化した微細木片が含まれる。試料１同様に土壌化ないし風化による分解を著しく受け生成された堆積物である。試料３～５（３層）では、砂粒は淘汰が悪く、シルト・粘土の割合が高く、土壌化ないし風化による分解を著しく受け生成されている。試料６（４層）では、砂粒の割合が高く、またピークがなく淘汰されておらず、シルト・粘土はやや低く発達が悪い。土壌化ないし風化による堆積物であるが、形成速度が速かったとみなされる。

3．方法

花粉・寄生虫卵の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

1）試料から1 cm³を採量
2）0.5％リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
3）水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
4）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
5）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
6）再び氷酢酸を加えて水洗処理
7）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製
8）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉（1973）、中村（1980）を参照して行った。イネ属については、中村（1974，1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

4．結果

（1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉5、草本花粉3、シダ植物胞子1形態の計9である。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、クリ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属

〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子

（2）花粉群集の特徴

いずれの試料も花粉密度が極めて低いか、出現しなかった。特徴を以下に記す。

1）試料1（1層）

樹木花粉のイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、クリ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、草本花粉のイネ科、ヨモギ属、シダ植物単条溝胞子がわずかに検出された。

2）試料2（2層）

樹木花粉のマツ属複維管束亜属、草本花粉のイネ科、カヤツリグサ科、シダ植物単条溝胞子がわずかに検出された。

3）試料３～５（３層）

試料５から樹木花粉のマツ属複維管束亜属がわずかに検出された。

4）試料６（４層）

花粉は検出されなかった。

5．推定される植生と堆積環境

いずれの試料も花粉が極めて低い密度か出現せず、詳細な植生は復原されない。試料１（１層）の時期はクリやヨモギ属など乾燥を好む樹木や草の分布が推定される。他に要素としてはイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属の樹木、イネ科、シダ植物の草本が分布していた。試料２（２層）では、樹木ではマツ属複維管束亜属、イネ科、カヤツリグサ科、シダ植物の草本が植生の要素である。試料３～５（３層）ではわずかにマツ属複維管束亜属が要素として出現している。試料６（４層）では花粉は検出されていない。なお、試料となった堆積層は、いずれも著しい土壌生成作用ないし風化による分解を受け生成された堆積物であり、１層（試料１）と２層（試料２）は淘汰も受け生成されたとみなされる。

6．まとめ

雲南遺跡の丘陵斜面の谷地形を呈する遺構の堆積物について花粉分析（寄生虫卵分析を含む）を行い、あわせて堆積物の性状の解析から植生と堆積環境の検討を加えた。いずれの堆積層も花粉の密度が低いか出現しない。暗褐色化した微細木片が検出されることから、著しい土壌生成作用ないし風化作用により分解を受け生成された堆積物とみなされた。下部より３層ないし２層はマツ属複維管束亜属が要素であり、上部の１層はクリ林の分布が推定され、ヨモギ属などの乾燥を好む草本も生育から、疎林の状態が推定される。以上、縄文時代前期後半の遺物を包含する谷地形の堆積物からは、クリやマツ属複維管束亜属の疎林の分布が推定された。

参考文献

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.

中村純（1967）花粉分析．古今書院，p.82-102.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として.第四紀研究,13.p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第 10 号，p.21-30.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集，91p.

雲南遺跡における放射性炭素年代　（ AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C (‰) (AMS)	δ ^{13}C 補正あり Libby Age（yrBP）	δ ^{13}C 補正あり pMC (%)
IAAA-130832	1	第 1 層	土壌	HCl	**-23.12 ± 0.57**	**4,830 ± 30**	**54.80 ± 0.20**
IAAA-130833	2	第 2 層	土壌	HCl	**-24.88 ± 0.46**	**5,440 ± 30**	**50.78 ± 0.20**
IAAA-130834	3	第 3 層	土壌	HCl	**-19.44 ± 0.58**	**5,940 ± 30**	**47.71 ± 0.18**
IAAA-130835	4	第 3 層	土壌	HCl	**-21.50 ± 0.41**	**6,480 ± 30**	**44.63 ± 0.17**
IAAA-130836	5	第 3 層	土壌	HCl	**-20.82 ± 0.55**	**7,280 ± 30**	**40.41 ± 0.17**
IAAA-130837	6	第 4 層	土壌	HCl	**-24.12 ± 0.46**	**7,340 ± 30**	**40.12 ± 0.16**

放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）

［#5935］

測定番号	δ ^{13}C 補正なし Age（yrBP）	δ ^{13}C 補正なし pMC（%）	暦年較正用(yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
IAAA-130832	4,800 ± 30	55.01 ± 0.19	4,832 ± 29	3654calBC - 3632calBC (42.5%) 3557calBC - 3538calBC (25.7%)	3694calBC - 3681calBC (2.5%) 3665calBC - 3627calBC (49.2%) 3589calBC - 3528calBC (43.7%)
IAAA-130833	5,440 ± 30	50.79 ± 0.19	5,444 ± 30	4340calBC - 4319calBC (27.0%) 4295calBC - 4264calBC (41.2%)	4348calBC - 4249calBC (95.4%)
IAAA-130834	5,850 ± 30	48.26 ± 0.17	5,944 ± 30	4881calBC - 4871calBC (5.0%) 4849calBC - 4782calBC (63.2%)	4907calBC - 4863calBC (15.6%) 4857calBC - 4726calBC (79.8%)
IAAA-130835	6,420 ± 30	44.95 ± 0.17	6,481 ± 30	5483calBC - 5466calBC (25.7%) 5441calBC - 5423calBC (15.6%) 5406calBC - 5383calBC (26.8%)	5490calBC - 5370calBC (95.4%)
IAAA-130836	7,210 ± 30	40.75 ± 0.16	7,279 ± 33	6211calBC - 6137calBC (51.3%) 6111calBC - 6085calBC (16.9%)	6221calBC - 6068calBC (95.4%)
IAAA-130837	7,320 ± 30	40.19 ± 0.16	7,336 ± 32	6237calBC - 6205calBC (28.1%) 6191calBC - 6184calBC (3.5%) 6171calBC - 6157calBC (7.6%) 6145calBC - 6102calBC (29.0%)	6326calBC - 6321calBC (0.6%) 6251calBC - 6080calBC (94.8%)

［参考値］

雲南遺跡は、岩手県陸前高田市小友町字雲南 20-1（北緯 38°　59′　22″ 、東経 141°　41′　21″ ）に所在し、丘陵に挟まれた谷部に位置する。測定対象試料は、丘陵裾の谷部の自然堆積層から採取された土壌 6 点である。第 1、2、4 層より各 1 点が採取された。第 3 層に属する 3 点の試料は、3 が第 3 層の中で相対的に上位、4 が中位、5 が下位に当たる位置から採取された。

※　土器が層位別に取り上げられていないため、採取資料の時期が不明であるが、測定値は概ね早期末から前期末の範囲である。

（生涯学習課学芸員佐藤　注記）

縄文原体の種類

LR ヨコ　第9図7・21・23　第10図7　第11図5・7・8・10・14　第12図2・5・6・7・8・9・10・11・13・14・16　第13図1・2・3・5・6・11　第14図1・3・6・7・9　第15図6　第23図5　第25図15・16　第26図5・9　第27図11　第28図3・4・6・12　第29図7・14　第31図12・13　第32図3・4・5　第33図1・3・4　第34図4・8　第35図1・7・8・9　第36図2・6・7　第37図4　第77図3・4・5・6　第83図2・3　第86図8・11　第87図4・5・6・7・10・11・14　第88図1・2・3・4・5　第96図5・7

LR タテ　第9図5　第27図2　第28図8　第29図1・4　第33図5　第34図2　第96図6　LR タテ・ヨコ　第31図11　第88図7　LR・R L ヨコ　第16図7　LR・RL タテ　第29図15

LR ナナメ　第14図10　第25図5・13　第28図7　第32図7・8　第36図1　第38図1　第86図9

LRL ヨコ　第26図3・6　L ヨコ　第10図1　第16図2　L タテ　第36図4　第38図11

LR ヨコ・結節R　第28図5　第32図10　第33図2（隆帯上タテ）　第34図5　LR タテ・結節R　第24図5　LR タテ・ヨコ・結節R　第30図8　結節L　第9図12　結節R　第9図9

結節R・RL 側面圧痕（隆帯上）　第30図3　LR ヨコ・LR 側面圧痕　第33図7・8　LR タテ・LR 側面圧痕　第30図4　LR 側面圧痕　第32図2　第87図8（LR ヨコ・ナナメ）

LR・RL 側面圧痕　第85図3・4　第85図5（刺L ヨコ）　第96図1

RL ヨコ　第9図2・3・10　第11図4・6・15　第14図2・13・14　第23図1　第37図5　第87図2・9　第96図2・4　RL タテ　第77図1　第96図3　RL ヨコ・タテ　第26図4　第77図2

RL R ヨコ　第33図6　RL R タテ　第34図1　第86図13　第87図1

0段多条LR　第86図1・3・4　0段多条RL・LR　第86図2　直線段反撃L　第14図5　第15図1・2・7　第87図12　前々段反撃LRR　第9図19　第11図13　第12図12　第13図4　第14図8

丸頭棒　LL・LL　第86図7

結束第1種　L・R　第26図7　結束第1種　LR・LR　第35図2　結束第1種　LR・RL　第26図1　第29図5　第35図3・4　結束第1種　LR・RL・結節R　第29図13

平軸絡条体第1類L　第15図5・11　第16図5　第36図3　第38図8　平軸絡条体第1類R　第14図11　第15図4　第16図1・4　第24図4　第86図12　平軸絡条体第5類R　第9図4　第10図17　第86図10

平軸絡条体第3類　第9図6・20　第10図6・8・9・10・11・12・13・14・15・16

平軸絡条体第1A類3　L，L　第35図6　平軸絡条体第1A類5　L・R，R・L　第35図5

附加条1種 RL・L・結節L　第38図5　附加条2種 RL・L　第10図18　附加条2種 RL・R　第28図9

縄文土器観察表

単位ｃｍ・（　）推定

図版 No.	分　類	口 径	胴 部 径	底 径	器 高	縄 文 原 体	備　考
第17図1	第3群	17.2			16.8	LR タテ	
第17図2	第5群	22.1			21.3	前々段反撃RLL ヨコ	
第17図3	第6群	(33.1)			17.8	結節R・LR ヨコ	
第17図4	第6群	(18.3)			13.2	LR ヨコ	
第17図5	第6群			10.3	18.5	平軸絡条体第1類R	
第18図	第5群	34.1		16.1	26.0	前々段反撃LRR ヨコ	
第19図1	第9群	(22.7)			20.9	LR ヨコ	
第19図2	第9群	(19.2)			9.8		
第19図3	第9群	(25.3)			10.5	平軸絡条体第1類R	
第19図4	第9群		(34.1)		16.1	結節L・LR タテ・RL タテ	
第20図1	第9群	23.2	25.3	(13.6)	29.8		脚部高14.7
第20図2	第9群	(30.9)	(40.1)		20.9	LR ヨコ	
第21図1	第10群	(41.8)			20.1	LR ヨコ・タテ・結節R	
第21図2	第6群		29.7	16.4	35.4	LR ヨコ・ナナメ	
第22図	第10群	(45.3)	(37.0)		43.9	RL ヨコ	口縁部に close end
第83図1	第9群	(30.2)			27.9	RL タテ・ナナメ	
第84図3	第8群	(29.8)			23.4	LR ヨコ・ナナメ　LR 側面圧痕	4と同一個体
第88図7	第9群	(22.4)	(15.0)		(27.5)	LR タテ・ヨコ	

土師器観察表

単位ｃｍ・（　）推定

図版 No.	分　類	口 径	胴 部 径	底 径	器 高	調　　整
第95図1	壺	25.8	20.2	10.8	28.2	外面・口縁ヨコナデ　胴部ヘラケズリ　底部周縁ヘラケズリ　内面・口縁ヨコナデ　胴部ヘラナデ
第95図2	壺	19.7	17.7	(6.3)	25.2	外面・口縁ヨコナデ　胴部、底部周縁ヘラケズリの後ミガキ　内面・口縁ヨコナデ　胴部 底部ヘラナデ
第95図3	甕	19.3	15.1	7.5	21.7	外面・口縁 胴部ヨコナデ胴部ヘラメの後ミガキ 底部周縁ヘラケズリ　内面・口縁ヨコナデ ハケメ 胴部ハケメ 底部ヘラケズリ
第95図4	小形壺	(14.2)	(12.0)		9.3	外面・口縁ヨコナデ　胴部ヘラケズリの後ヘラミガキ　内面・口縁ヨコナデ　胴部ヘラナデ　底部周縁ヘラケズリ
第95図5	鉢			5.4	2.3	外面・胴部下端 底部ヘラケズリ　内面・胴部ヘラケズリ
第95図6	坏	12.4		5.6	4.2	外面・口縁ヘラミガキ　胴部ヘラケズリ　内面・ヘラミガキ　黒色処理
第95図7	坏	10.7		3.2	4.1	外面・口縁ヘラミガキ　胴部ヘラケズリ　輪積み痕あり　内面・ヘラミガキ　黒色処理（全体に不定全）
第95図8	坏	12.3		2.9	3.5	外面・口縁ヘラミガキ　胴部ヘラケズリ　内面・ヘラミガキ　黒色処理

石器・石製品・土製品計測表

挿図番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質
第39図1	石鏃	16.9	11.3	2.7	0.2	珪質頁岩
第39図2	石鏃	17.7	17.0	3.1	0.7	珪質頁岩
第39図3	石鏃	17.9	18.4	3.3	0.9	珪質頁岩
第39図4	石鏃	25.8	17.4	4.2	1.5	細粒砂岩
第39図5	石鏃	24.3	13.3	5.6	0.9	細粒砂岩
第39図6	石鏃	21.3	18.2	4.5	1.1	珪質頁岩
第39図7	石鏃	22.3	10.2	4.4	1.0	珪質頁岩
第39図8	石鏃	22.4	10.6	3.4	0.4	珪質頁岩
第39図9	石鏃	25.4	18.7	5.3	1.9	黒色頁岩
第39図10	石鏃	22.3	14.7	5.5	1.2	黒色頁岩＊
第39図11	石鏃	18.8	17.2	3.7	0.8	珪質頁岩
第39図12	石鏃	18.0	16.9	3.5	0.8	黒色頁岩＊
第39図13	石鏃	19.7	17.6	4.5	1.2	珪質頁岩
第39図14	石鏃	22.4	15.5	4.3	0.7	珪質頁岩
第39図15	石鏃	18.1	17.7	4.8	1.2	珪質頁岩
第39図16	石鏃	23.9	16.3	3.9	1.0	珪質頁岩
第39図17	石鏃	26.0	18.0	4.6	1.8	黒色頁岩＊
第39図18	石鏃	23.3	14.3	4.9	1.6	凝灰質砂岩
第40図1	石鏃	21.1	13.8	4.9	1.3	細粒砂岩＊
第40図2	石鏃	25.2	16.5	5.7	1.8	細粒砂岩
第40図3	石鏃	34.0	15.3	6.4	2.2	珪質頁岩
第40図4	石鏃	32.2	9.6	4.8	1.2	珪質頁岩
第40図5	石鏃	35.0	15.4	7.4	2.8	細粒砂岩
第40図6	石鏃	24.2	14.5	5.6	1.9	黒色頁岩
第40図7	石鏃	32.5	16.2	6.8	2.3	珪質頁岩
第40図8	石鏃	26.1	19.1	4.2	2.0	細粒砂岩
第40図9	石鏃	33.7	16.7	4.6	2.7	細粒砂岩
第40図10	石鏃	27.9	13.8	4.7	1.9	細粒砂岩＊
第40図11	石鏃	36.4	16.6	6.9	3.7	細粒砂岩＊
第40図12	石鏃	34.5	15.9	4.5	1.9	細粒砂岩＊
第40図13	石鏃	33.4	19.8	5.2	2.1	細粒砂岩
第40図14	石鏃	31.9	15.7	5.3	2.4	細粒砂岩
第40図15	石鏃	22.7	17.1	3.0	1.1	珪質頁岩
第41図1	石鏃	25.3	19.5	3.6	1.1	珪質頁岩
第41図2	石鏃	25.8	17.4	4.2	1.5	細粒砂岩＊
第41図3	石鏃	23.7	20.0	2.5	0.3	珪質頁岩
第41図4	石鏃	34.2	18.2	5.8	2.6	黒色頁岩＊
第41図5	石鏃	29.4	18.0	6.5	2.6	細粒砂岩
第41図6	石鏃	40.9	18.4	5.6	3.2	珪質頁岩
第41図7	石鏃	30.9	12.4	4.7	2.2	細粒砂岩
第41図8	石鏃	17.1	22.9	5.0	1.2	細粒砂岩
第41図9	石鏃	19.0	19.7	4.8	1.7	珪質頁岩
第41図10	石鏃	18.2	22.3	3.5	1.3	珪質頁岩
第41図11	石鏃	27.2	23.5	6.9	3.8	細粒砂岩
第41図12	石鏃	41.6	13.5	4.6	1.9	細粒砂岩＊
第41図13	石錐	17.7	14.0	5.4	0.8	黒色頁岩＊
第41図14	石錐	31.9	19.1	6.5	3.1	細粒砂岩
第42図1	石錐	53.6	18.6	13.1	11.4	珪質頁岩
第42図2	石錐	41.6	20.9	8.3	4.7	黒色頁岩
第42図3	石錐	114.6	27.8	8.4	26.7	珪質頁岩
第43図	石錐	131.3	33.7	11.7	51.8	黒色頁岩＊
第44図1	石匙	27.4	21.4	7.5	2.9	細粒砂岩＊
第44図2	石匙	22.9	21.5	3.6	1.2	珪質頁岩
第44図3	石匙	28.5	12.1	3.8	1.0	細粒砂岩＊
第44図4	石匙	20.2	14.9	2.7	0.7	珪質頁岩
第44図5	石匙	32.9	27.8	5.7	5.2	細粒砂岩
第44図6	石匙	32.6	17.4	4.8	2.4	細粒砂岩
第44図7	石匙	27.4	21.4	7.5	2.9	細粒砂岩
第44図8	石匙	30.4	24.0	10.0	7.4	黒色頁岩
第44図9	石匙	28.5	17.6	6.0	2.2	細粒砂岩＊
第44図10	石匙	18.5	16.2	5.2	1.4	凝灰質砂岩
第44図11	石匙	23.6	7.7	5.7	0.9	細粒砂岩＊
第44図12	楔形石器	24.8	40.3	7.6	8.4	珪質頁岩
第44図13	異形石器	24.8	40.3	7.6	8.4	黒色頁岩
第44図14	異形石器	25.8	25.7	10.8	7.5	珪質頁岩
第45図1	石匙	48.7	15.9	6.4	4.2	珪質頁岩
第45図2	石匙	57.3	20.7	6.1	5.9	珪質頁岩
第45図3	石匙	34.3	18.0	5.1	2.5	珪質頁岩
第45図4	石匙	69.8	35.6	12.8	27.8	珪質頁岩
第45図5	石匙	61.3	26.6	8.8	12.7	細粒砂岩
第45図6	石匙	54.4	26.9	10.7	12.0	ホルンフェルス
第45図7	石匙	45.9	25.1	7.6	8.5	珪質頁岩
第45図8	石匙	19.9	39.6	6.8	4.3	細粒砂岩
第46図1	スクレイパー	24.7	19.5	5.0	2.6	黒色頁岩＊
第46図2	スクレイパー	27.0	41.9	9.6	1.7	珪質頁岩
第46図3	スクレイパー	23.5	19.8	9.3	4.3	珪質頁岩
第46図4	スクレイパー	28.2	45.3	9.5	12.5	細粒砂岩
第46図5	スクレイパー	22.1	22.9	8.0	3.7	珪質頁岩
第46図6	スクレイパー	13.0	18.1	6.7	2.7	珪質頁岩
第46図7	スクレイパー	30.4	19.0	5.4	2.6	細粒砂岩＊
第46図8	スクレイパー	38.6	33.2	12.1	13.8	黒色頁岩
第46図9	スクレイパー	19.3	24.2	4.4	2.2	細粒砂岩
第46図10	スクレイパー	24.7	32.5	4.2	1.8	珪質頁岩
第46図11	スクレイパー	43.1	27.7	5.3	6.0	珪質頁岩
第46図12	スクレイパー	14.3	29.4	7.1	2.9	黒色頁岩＊
第47図1	スクレイパー	69.1	81.6	13.6	96.1	細粒砂岩
第47図2	スクレイパー	40.2	79.9	17.6	47.6	ホルンフェルス
第47図3	スクレイパー	28.4	33.2	6.4	5.6	黒色頁岩＊
第47図4	スクレイパー	27.5	33.2	7.5	4.6	珪質頁岩
第47図5	スクレイパー	18.2	24.4	5.0	2.4	珪質頁岩
第47図6	スクレイパー	19.3	31.5	10.6	6.2	珪質頁岩
第47図7	スクレイパー	38.9	15.8	9.3	5.2	珪質頁岩
第47図8	スクレイパー	82.0	33.7	10.5	29.0	珪質頁岩
第48図1	打製石斧	103.5	60.9	21.7	183.0	中粒砂岩
第48図2	磨製石斧	43.7	28.1	23.0	38.8	細粒砂岩
第48図3	磨製石斧	37.2	(31.4)	29.2	39.7	細粒砂岩
第48図4	磨製石斧	67.6	44.7	(9.5)	31.1	細粒砂岩
第48図5	磨製石斧	73.3	59.1	27.8	197.0	細粒砂岩
第48図6	磨製石斧	29.2	45.1	27.9	44.1	閃緑岩
第49図1	礫　器	42.2	102.0	20.2	105.0	細粒砂岩
第49図2	礫　器	66.0	98.5	28.9	169.0	ホルンフェルス
第49図3	礫　器	54.5	95.7	11.9	87.7	細粒砂岩＊
第49図4	礫　器	71.2	83.3	33.5	209.0	細粒砂岩
第49図5	礫　器	58.1	74.4	29.5	136.0	ホルンフェルス
第50図1	礫　器	58.1	101.1	23.8	160.0	細粒砂岩
第50図2	礫　器	81.2	105.0	38.1	397.0	チャート
第50図3	礫　器	73.8	100.5	28.7	270.0	ホルンフェルス
第50図4	礫　器	105.2	72.3	20.2	209.0	細粒砂岩
第50図5	礫　器	53.9	61.9	18.1	52.5	細粒砂岩＊
第51図1	礫　器	91.6	95.3	97.3	230.0	細粒砂岩＊
第51図2	礫　器	53.4	102.8	31.4	189.0	細粒砂岩＊
第51図3	礫　器	104.9	94.3	32.9	441.0	中粒砂岩＊
第51図4	礫　器	88.4	111.9	21.5	202.0	細粒砂岩
第52図1	礫　器	90.5	112.1	39.4	544.0	細粒砂岩
第52図2	礫　器	55.8	79.8	28.5	131.0	黒色頁岩＊
第52図3	礫　器	50.4	93.1	30.8	150.0	黒色頁岩＊
第53図	磨石	304.5	201.6	139	6202.8	花崗岩
第54図1	磨石	286.0	132.9	82.5	5200.0	花崗岩
第54図2	磨石	162.0	150.5	75.0	3200.0	花崗岩
第55図1	磨石	136.0	119.2	81.2	1993.0	花崗岩
第55図2	磨石	131.8	123.3	68.8	1757.0	花崗岩
第55図3	磨石	117.2	98.4	57.8	1033.0	花崗岩

挿図番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質
第56図1	磨石	96.4	94.5	77.0	1063.0	花崗岩
第56図2	磨石	106.6	102.3	35.8	1156.5	花崗岩
第56図3	磨石	91.9	51.8	39.0	339.0	花崗岩
第56図4	磨石	78.3	63.2	33.9	271.0	花崗岩
第56図5	敲石	171.0	61.4	42.5	647.0	閃緑岩
第56図6	敲石	166.0	68.8	42.2	813.0	中粒砂岩
第57図1	石核	114.0	86.2	109.8	1367.0	細粒砂岩
第57図2	石核	114.2	92.1	74.1	857.0	細粒砂岩＊
第58図1	石核	42.0	82.0	71.3	310.0	珪質頁岩
第58図2	石核	37.2	98.1	86.5	286.3	黒色頁岩
第58図3	石核	26.3	83.4	57.4	146.3	珪質頁岩
第59図1	石核	72.8	64.1	49.5	299.4	細粒砂岩＊
第59図2	石核	58.6	64.2	25.4	110.5	珪質頁岩
第59図3	石核	65.3	67.4	57.1	325.8	黒色頁岩
第60図1	石核	63.1	54.7	57.3	213.3	ホルンフェルス
第60図2	石核	50.8	66.8	37.0	93.1	ホルンフェルス
第60図3	石核	41.0	62.1	68.4	148.6	細粒砂岩＊
第60図4	石核	46.9	73.2	21.0	83.4	細粒砂岩＊
第61図1	石核	88.7	131.6	96.5	1154.3	黒色頁岩＊
第61図2	石核	32.3	61.9	95.0	429.6	ホルンフェルス
第62図1	石核	54.6	91.1	72.2	411.2	珪質頁岩
第62図2	石核	88.0	78.1	68.2	621.3	ホルンフェルス
第63図1	石核	66.1	69.3	66.2	395.5	細粒砂岩＊
第63図2	石核	49.9	77.2	35.6	129.6	黒色頁岩
第64図1	石核	51.1	82.0	58.9	262.6	黒色頁岩
第64図2	石核	60.3	82.6	61.0	325.3	黒色頁岩
第64図3	石核	52.7	72.5	63.9	254.4	細粒砂岩＊
第65図1	石核	64.0	84.5	65.0	274.2	細粒砂岩
第65図2	石核	51.0	60.1	50.9	193.7	細粒砂岩＊
第65図3	石核	55.1	54.2	68.0	123.1	細粒砂岩＊
第66図1	石核	64.5	100.3	79.6	567.8	細粒砂岩＊凝灰岩
第66図2	石核	60.0	78.3	74.0	440.5	黒色頁岩
第67図1	石核	61.5	71.8	54.8	205.1	黒色頁岩
第67図2	石核	39.0	57.9	37.8	107.7	珪質頁岩
第67図3	石核	52.5	66.9	70.8	276.7	珪質頁岩
第67図4	石核	36.0	43.2	76.1	98.3	細粒砂岩＊
第68図1	石核	42.0	63.1	30.0	82.1	細粒砂岩＊
第68図2	石核	59.1	63.3	24.1	84.7	珪質頁岩
第68図3	石核	52.3	45.8	26.0	71.1	珪質頁岩
第68図4	石核	34.0	35.1	21.3	24.8	珪質頁岩
第69図1	異形石器	70.6	14.3	8.7	6.3	珪質頁岩
第69図2	軽石製品	38.5	30.5	26.4	5.3	軽石
第69図3	軽石製品	40.6	33.8	24.2	5.3	軽石
第69図4	軽石製品	90.5	21.1	13.3	3.1	軽石
第69図5	軽石製品	38.1	29.5	9.4	3.6	軽石
第70図1	石棒	210.0	54.8	33.3	490.0	ホルンフェルス
第70図2	石棒	81.0	46.1	17.9	101.0	ホルンフェルス
第70図3	石棒	64.0	29.5	10.2	29.9	ホルンフェルス
第70図4	石棒	51.4	8.6	11.2	8.6	ホルンフェルス
第70図5	石棒	43.2	24.2	10.6	7.4	ホルンフェルス
第70図6	石棒	31.5	24.7	2.7	1.7	ホルンフェルス
第70図7	石棒	39.7	28.2	5.0	8.3	ホルンフェルス
第70図8	石棒	29.8	47.7	9.3	14.1	ホルンフェルス
第71図1	玦状耳飾	30.2	17.1	4.1	3.3	ホルンフェルス
第71図2	石製品	25.6	4.2	3.1	0.5	ホルンフェルス
第71図3	石製品	18.4	11.6	3.0	0.6	細粒砂岩
第71図6	土偶	16.0	17.0	13.9	3.0	
第71図7	土偶	75.6	61.2	15.8	93.4	
第72図1	円盤状土製品	15.9	14.6	6.5	2.1	
第72図2	円盤状土製品	21.9	21.0	8.6	4.6	
第72図3	円盤状土製品	23.8	20.9	6.5	4.7	
第72図4	円盤状土製品	24.0	26.4	8.4	6.6	
第72図5	円盤状土製品	24.1	24.5	8.7	6.6	
第72図6	円盤状土製品	26.4	24.1	9.7	7.1	
第72図7	円盤状土製品	25.9	25.7	10.4	7.5	
第72図8	円盤状土製品	28.5	29.3	9.5	10.5	
第72図9	円盤状土製品	30.4	32.3	9.5	9.7	
第72図10	円盤状土製品	35.4	38.0	11.5	17.6	
第72図11	円盤状土製品	43.7	46.0	7.4	18.6	
第72図12	円盤状土製品	35.9	65.5	10.7	31.4	
第72図13	円盤状土製品	57.2	43.8	8.0	22.3	
第72図14	円盤状土製品	52.7	52.0	12.9	42.4	
第72図15	円盤状土製品	52.8	67.5	12.5	49.4	
第77図12	磨製石斧	108.8	50.2	35.3	258.0	閃緑岩
第77図13	石棒	59.2	43.3	36.0	157.0	閃緑岩
第78図1	礫器	80.3	115.9	38.5	354.0	細粒砂岩＊
第78図2	礫器	76.6	94.7	19.5	283.4	細粒砂岩＊
第78図3	磨石	95.3	70.9	41.8	452.0	花崗岩
第78図4	磨石	89.9	68.6	40.2	374.0	花崗岩
第78図5	凹石	109.1	57.3	54.1	469.0	細粒砂岩
第78図6	凹石	83.2	81.4	47.0	465.0	細粒砂岩
第78図7	土偶	28.2	57.5	69.4	81.4	
第83図4	石鏃	24.5	13.0	3.4	0.5	珪質頁岩
第83図5	石鏃	23.2	12.9	3.3	0.5	黒色頁岩
第83図6	石鏃	32.4	14.9	7.0	3.1	碧玉
第83図7	スクレイパー	18.9	26.8	3.6	1.4	珪質頁岩
第84図1	礫器	187.0	110.1	53.6	1180.0	中粒砂岩
第84図2	磨石（敲石兼用）	104.4	75.7	47.2	586.0	細粒砂岩
第89図1	石鏃	20.9	17.6	3.7	0.9	珪質頁岩
第89図2	石鏃	22.8	14.4	4.0	1.0	細粒砂岩
第89図3	石鏃	34.8	20.3	4.2	1.6	珪質頁岩
第89図4	石匙	47.8	28.4	6.0	3.5	珪質頁岩
第89図5	スクレイパー	58.9	44.0	11.6	20.6	珪質頁岩
第89図6	磨製石斧	71.8	37.7	(8.6)	21.1	細粒砂岩
第89図7	礫器	132.7	62.2	37.1	495.0	細粒砂岩＊
第90図1	磨石	96.4	87.7	53.5	705.0	花崗岩
第90図2	磨石	106.5	88.6	71.8	1044.0	花崗岩
第90図3	敲石	114.9	72.9	55.1	682.0	細粒砂岩
第90図4	凹石	155.0	69.2	25.0	377.0	閃緑岩
第96図8	石鏃	18.6	13.3	2.4	0.4	珪質頁岩
第96図9	石鏃	19.6	15.0	3.8	0.7	細粒砂岩
第96図10	石鏃	19.6	13.2	3.7	0.6	珪質頁岩
第96図11	石鏃	20.8	14.5	3.6	0.9	細粒砂岩
第96図12	石鏃	19.5	13.5	3.4	0.7	珪質頁岩
第96図13	石鏃	17.8	14.1	3.0	0.4	珪質頁岩
第96図14	石鏃	21.7	17.0	3.9	1.0	珪質頁岩
第96図15	石鏃	20.9	15.7	4.3	1.0	細粒砂岩＊
第96図16	石鏃	21.6	14.5	3.9	0.8	珪質頁岩
第96図17	石鏃	25.4	17.8	3.2	1.3	珪質頁岩
第96図18	石鏃	26.9	17.9	4.4	1.4	珪質頁岩
第96図19	石鏃	13.9	14.3	3.8	0.4	珪質頁岩
第96図20	石鏃	20.8	19.0	4.8	1.2	珪質頁岩
第96図21	石鏃	22.4	11.0	4.6	0.7	細粒砂岩
第96図22	石鏃	25.5	15.9	3.5	1.0	細粒砂岩
第96図23	石鏃	26.9	15.0	4.0	1.1	細粒砂岩
第97図1	石鏃	24.5	15.1	4.1	1.4	細粒砂岩
第97図2	石鏃	22.5	11.3	3.9	0.6	チャート
第97図3	石鏃	27.0	14.4	4.2	1.3	黒色頁岩＊
第97図4	尖頭器	37.7	15.5	8.6	3.6	黒色頁岩
第97図5	尖頭器	48.5	24.2	8.5	9.0	珪質頁岩
第97図6	石錐	68.7	23.6	11.1	16.7	黒色頁岩
第97図7	石錐	32.3	29.3	14.7	22.7	黒色頁岩＊

挿図番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質
第97図8	石錐	56.5	29.6	13.4	27.9	珪質頁岩
第97図9	石錐	29.1	26.9	9.2	8.1	珪質頁岩
第98図1	石匙	24.7	16.9	7.5	2.4	珪質頁岩
第98図2	石匙	22.4	15.4	5.7	1.6	黒色頁岩
第98図3	石匙	30.7	21.3	6.1	4.2	珪質頁岩
第98図4	石匙	29.6	14.5	5.3	1.9	珪質頁岩
第98図5	石匙	42.2	25.3	7.7	7.2	珪質頁岩
第98図6	石匙	43.3	14.8	9.7	5.7	黒色頁岩
第98図7	石匙	53.6	15.8	8.1	5.5	珪質頁岩
第98図8	石匙	46.7	22.4	4.6	5.1	珪質頁岩
第98図9	石匙	52.8	21.1	7.2	6.1	珪質頁岩
第98図10	石匙	37.5	22.8	7.3	5.1	珪質頁岩
第98図11	石匙	59.4	18.7	9.5	8.6	黒色頁岩＊
第98図12	石匙	57.5	20.3	6.7	8.5	黒色頁岩
第99図1	石匙	64.8	18.8	8.2	7.9	珪質頁岩
第99図2	石匙	64.0	24.9	8.3	12.9	ホルンフェルス
第99図3	石匙	54.7	19.4	7.8	7.3	珪質頁岩
第99図4	石匙	59.7	33.3	7.3	9.4	珪質頁岩
第99図5	石匙	36.6	36.5	6.6	5.7	珪質頁岩
第99図6	石匙	44.6	69.2	7.0	17.4	珪質頁岩
第99図7	スクレイパー	25.5	23.1	7.0	4.1	珪質頁岩
第100図1	小型打製石斧	85.2	33.8	22.3	60.6	ホルンフェルス
第100図2	小型打製石斧	66.7	35.4	11.2	24.3	黒色頁岩

図　　版

（1）調査区遠景（北より）

（2）調査区全景（南より）

（1）谷部の状況（東より）

（2）西壁土層

（1）南壁土層

（2）調査状況

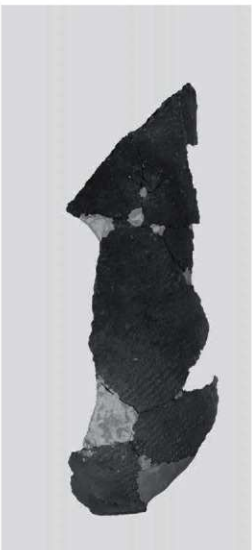
第 3 群土器

(1) 口縁細部

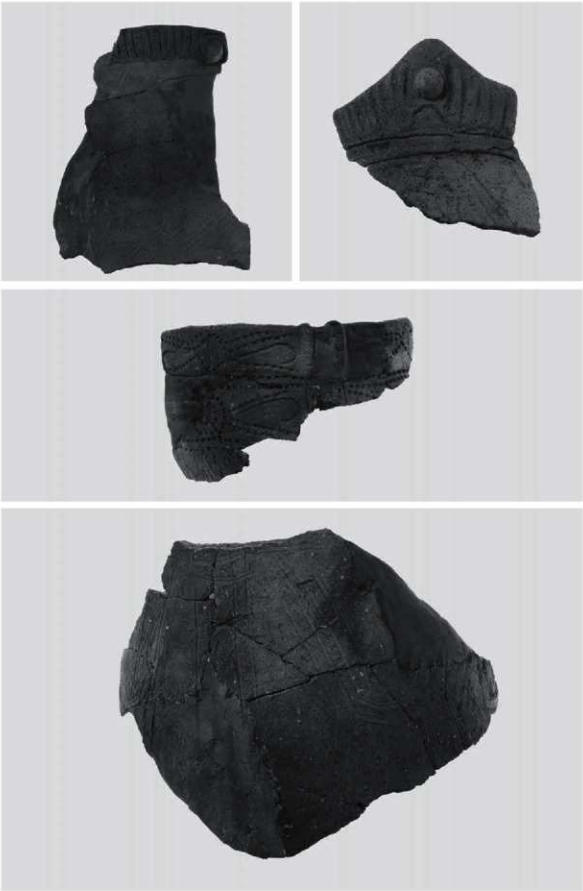
(2) 第 5 群土器

(1) 口縁細部

(2) 第 5 群土器



第 6 群土器



第 9 群土器

（1）口縁細部

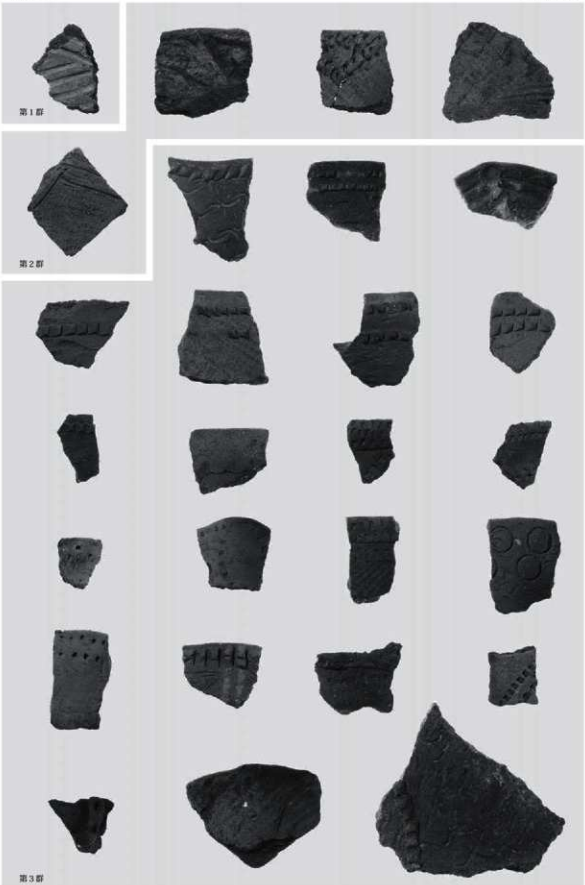
（2）第 9 群土器

（1）第 9 群土器

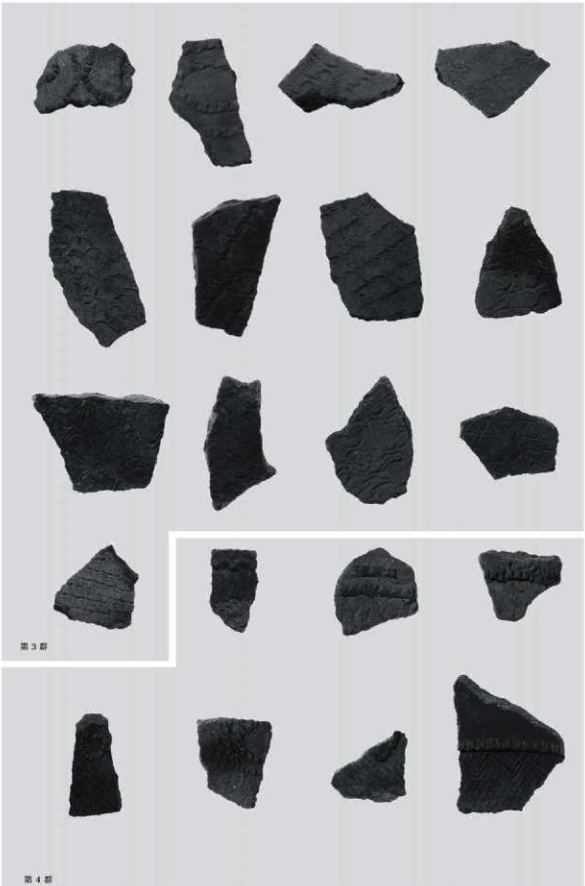
（2）第 10 群土器

（1）口縁細部

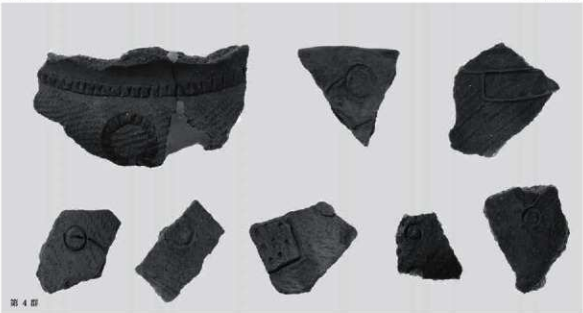
（2）第 10 群土器

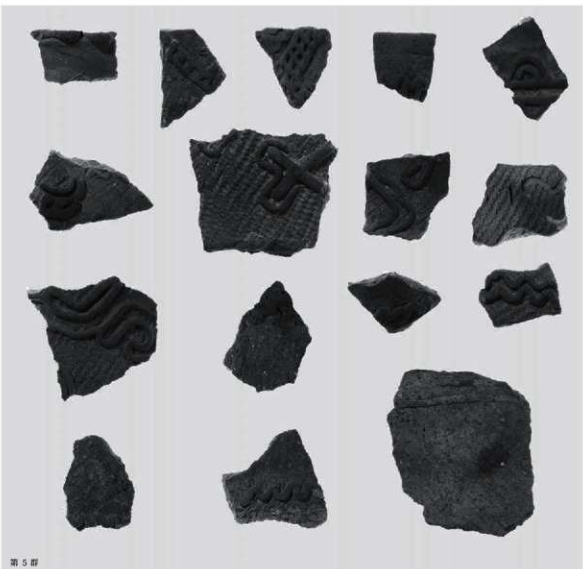


第 1 群　第 2 群　第 3 群土器

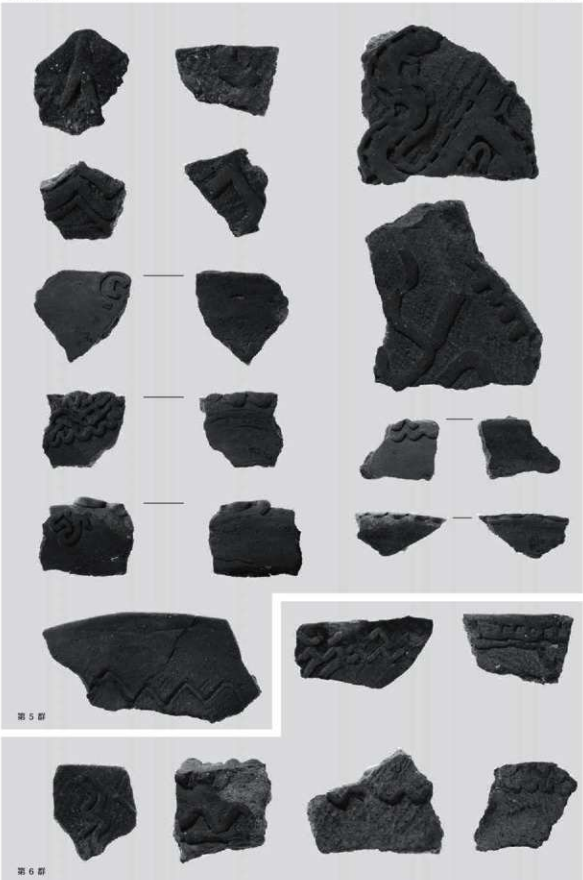


第３群　第４群土器

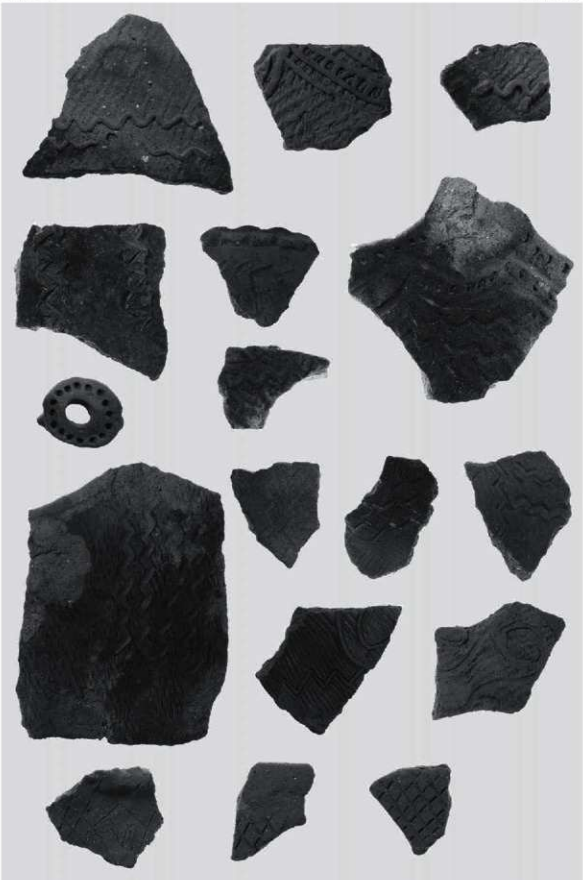




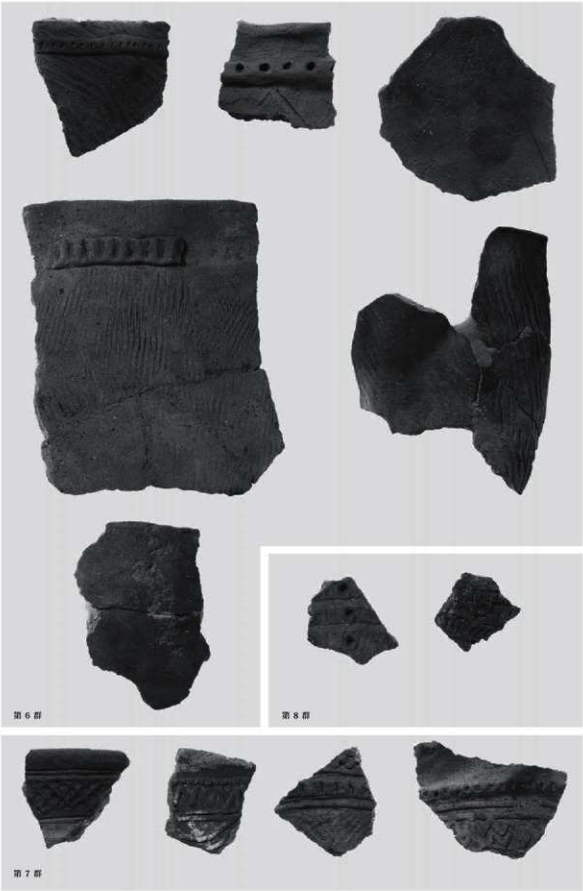
第 4 群　第 5 群土器



第 5 群　第 6 群土器

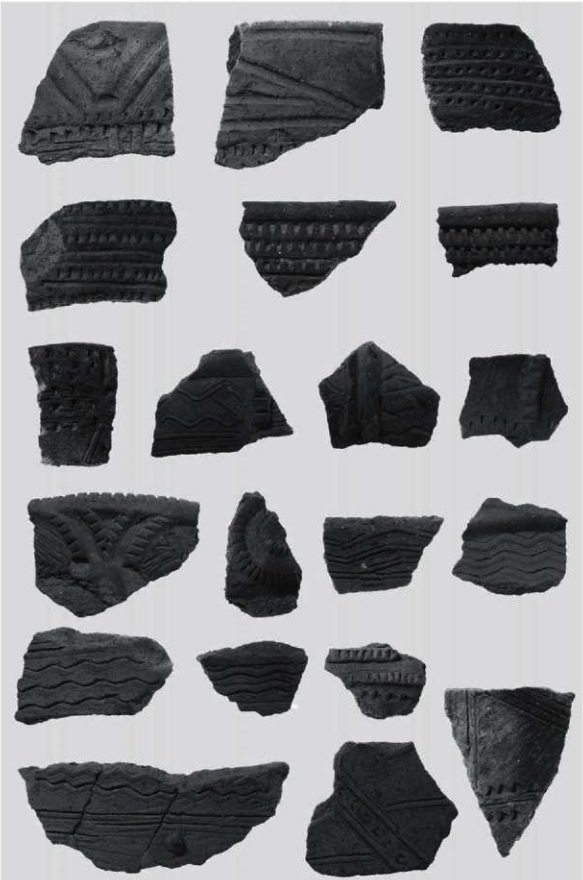


第 6 群土器

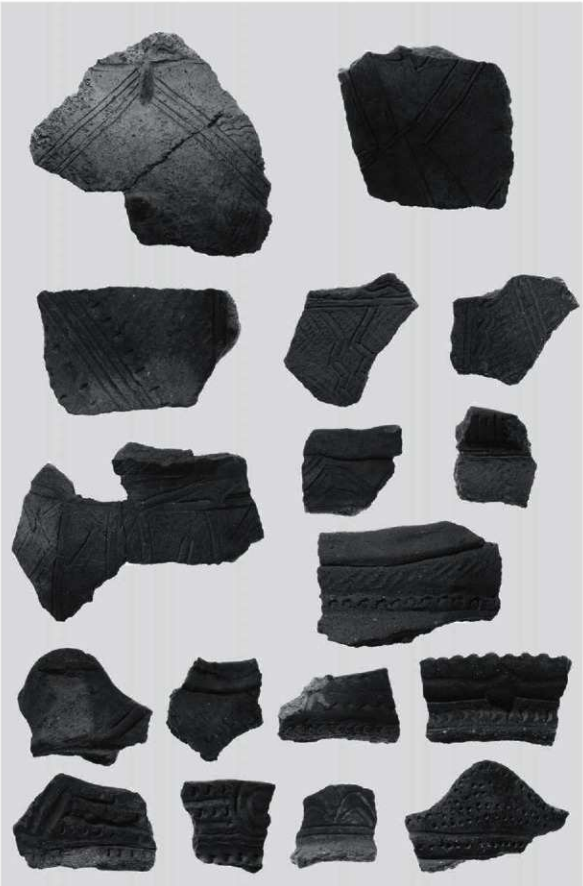


第６群　第７群　第８群土器

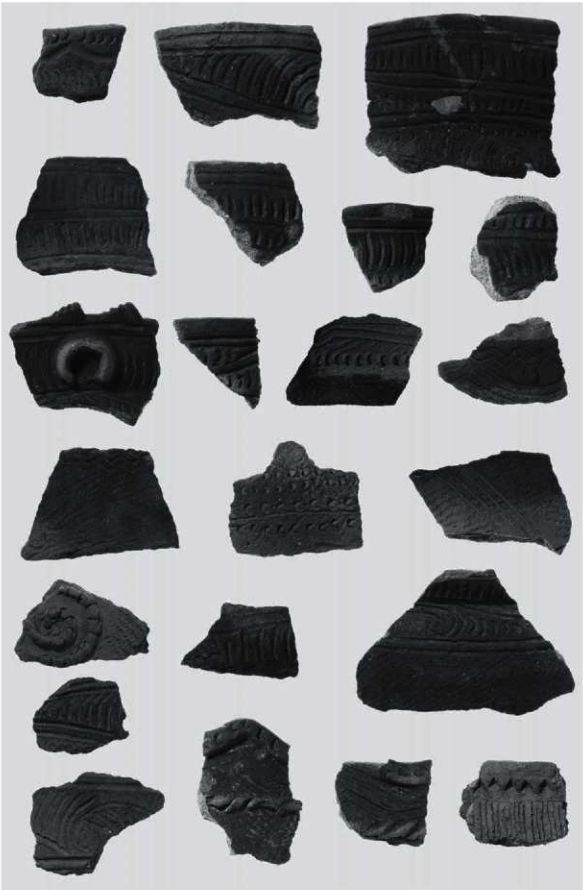
第 9 群土器



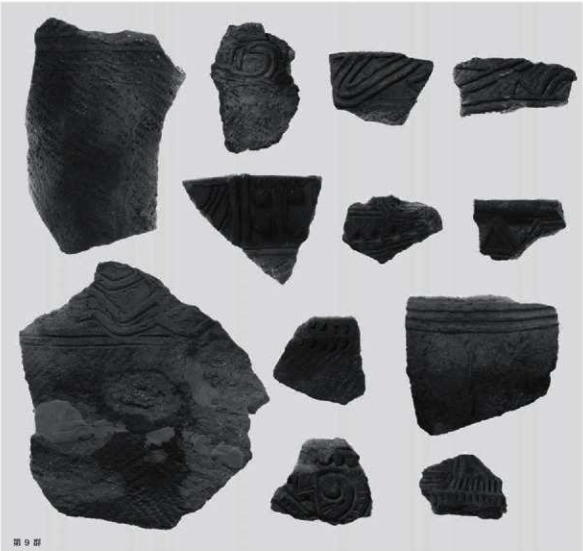
第 9 群土器



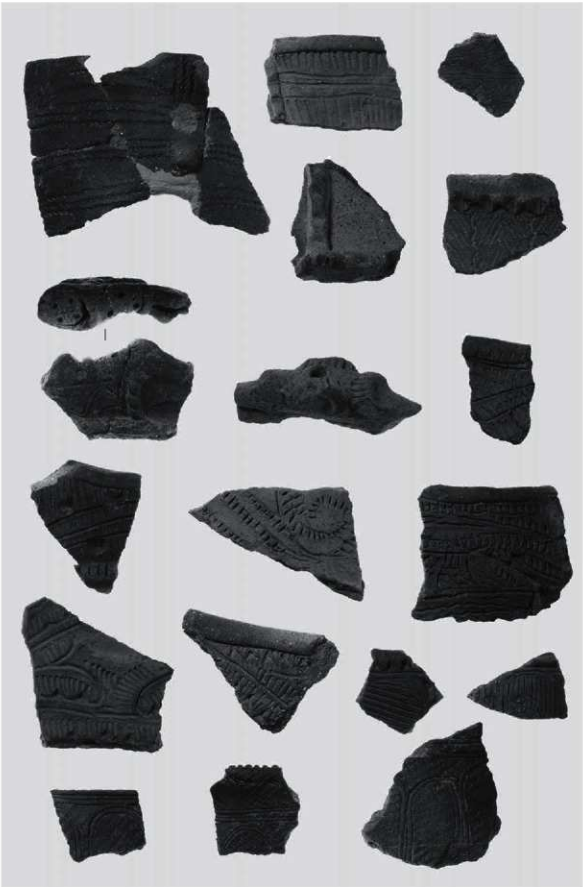
第 9 群土器



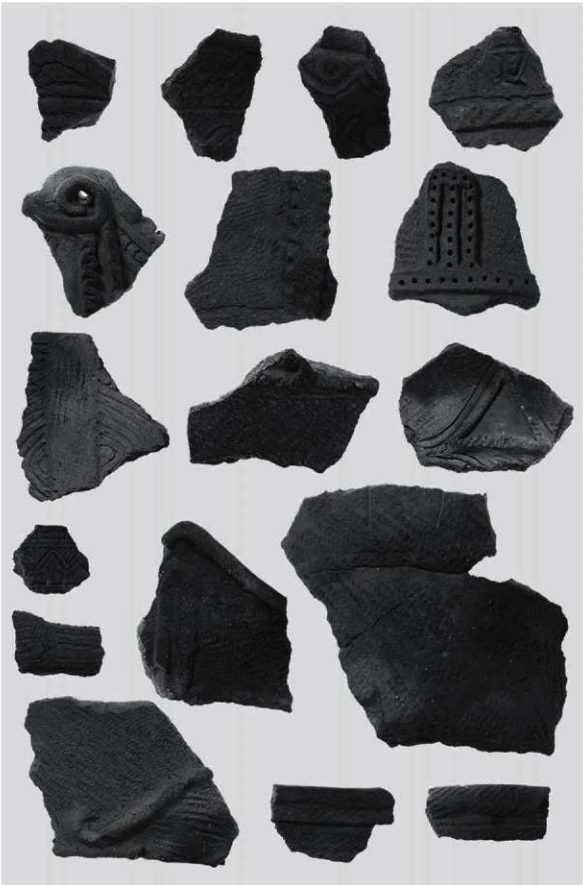
第 9 群土器



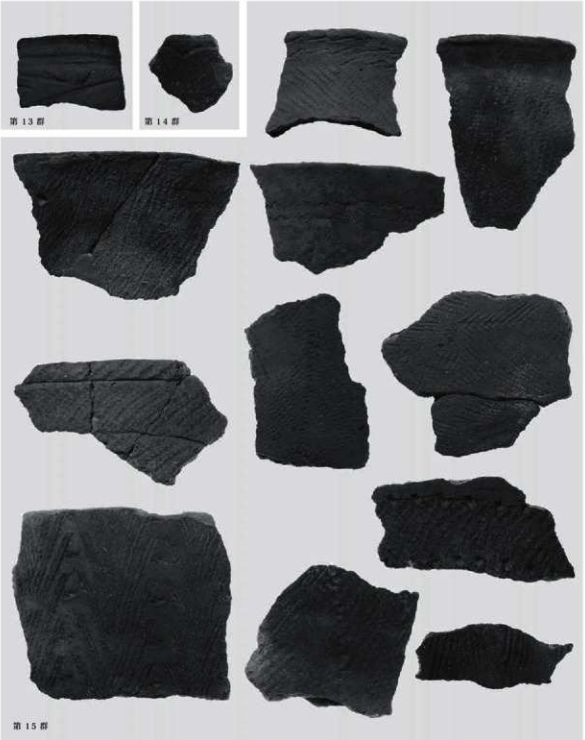
第9群　第10群土器



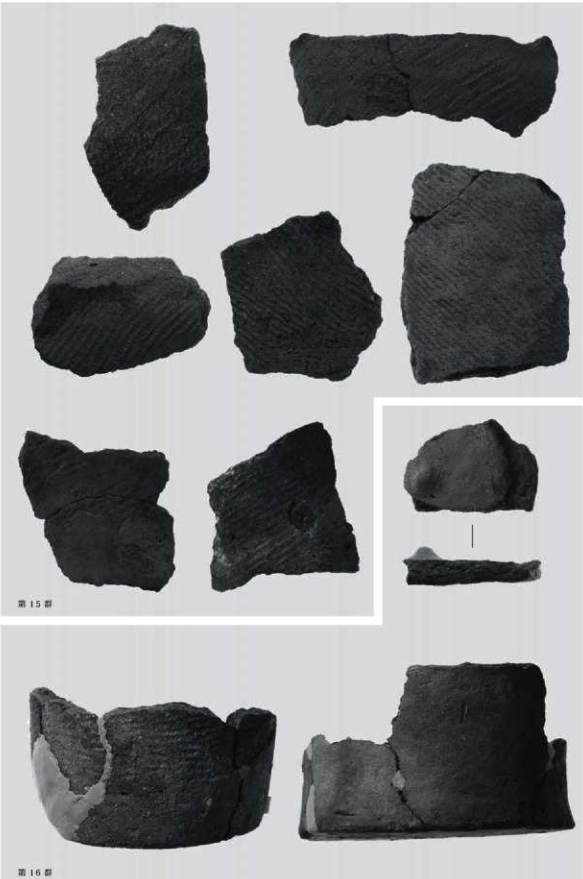
第 10 群土器



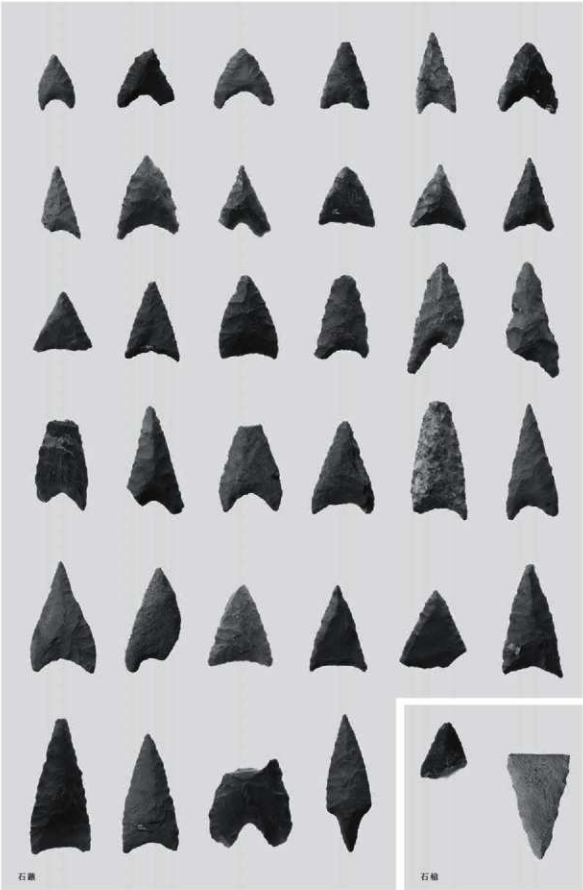
第 10 群土器



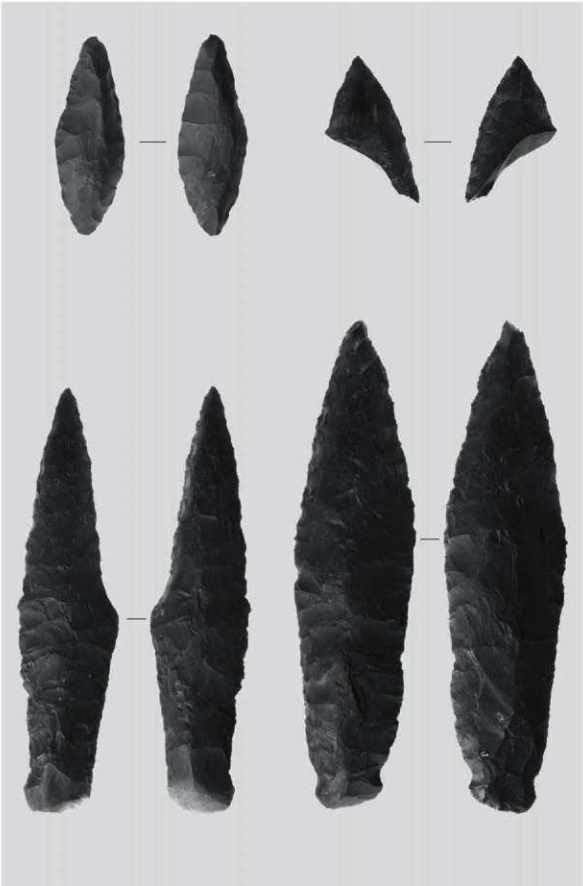
第 11 群　第 12 群　第 13 群　第 14 群　第 15 群土器



第 15 群　第 16 群土器

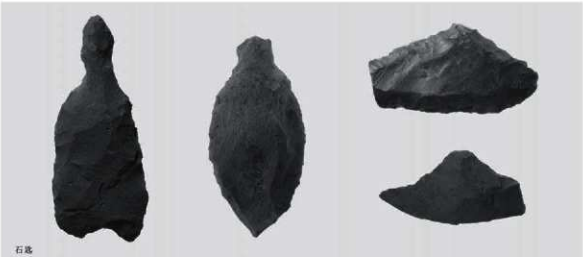


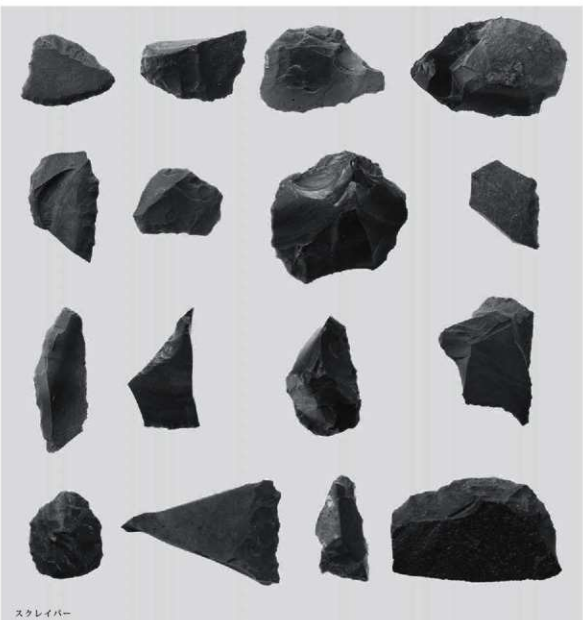
石鏃　石槍



石槍

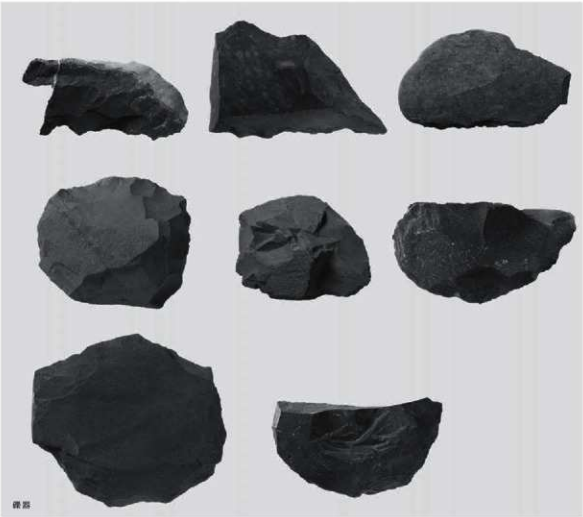
石錐　楔形石器　篦状石器　石匙

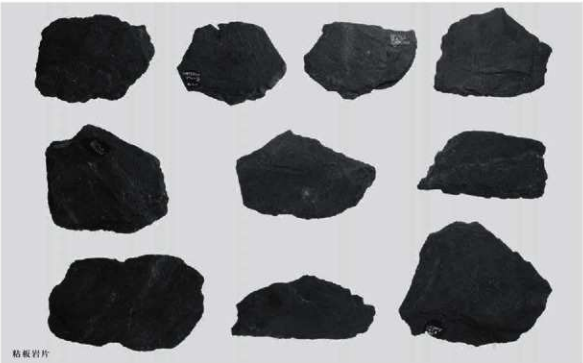




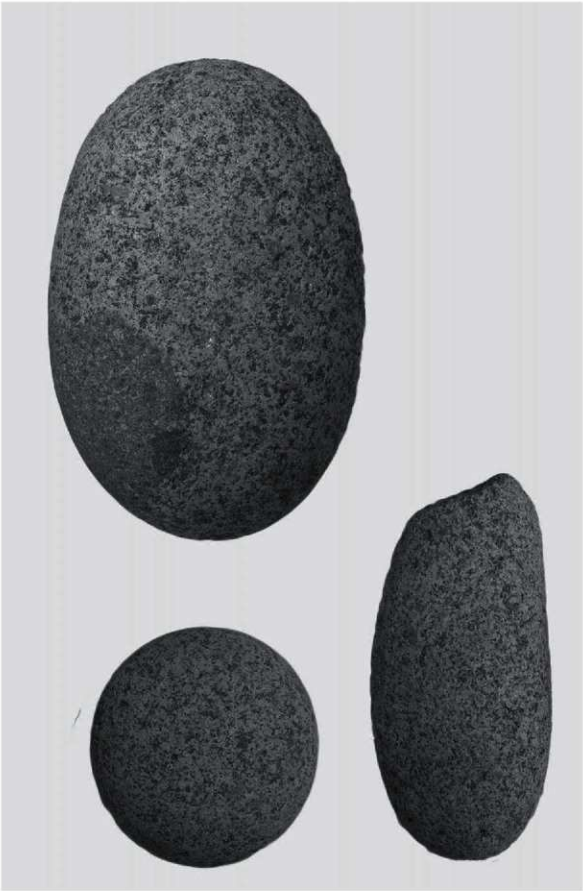
石匙　スクレイパー

スクレイパー　打製石斧　磨製石斧

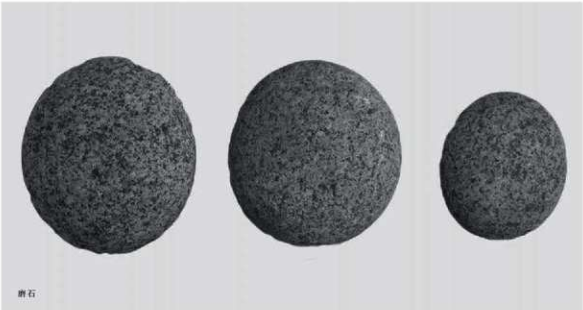


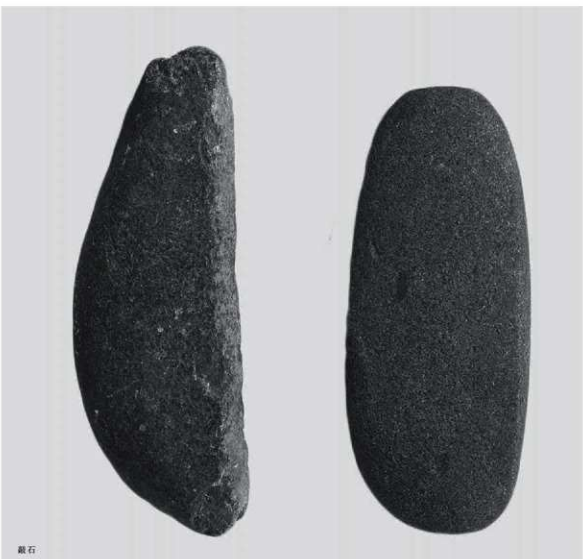


礫器　粘板岩片

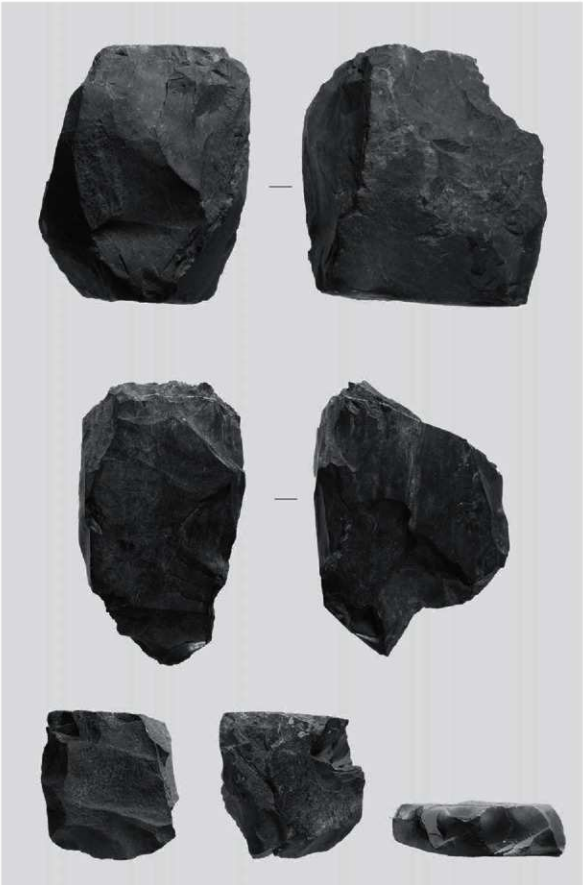


磨石

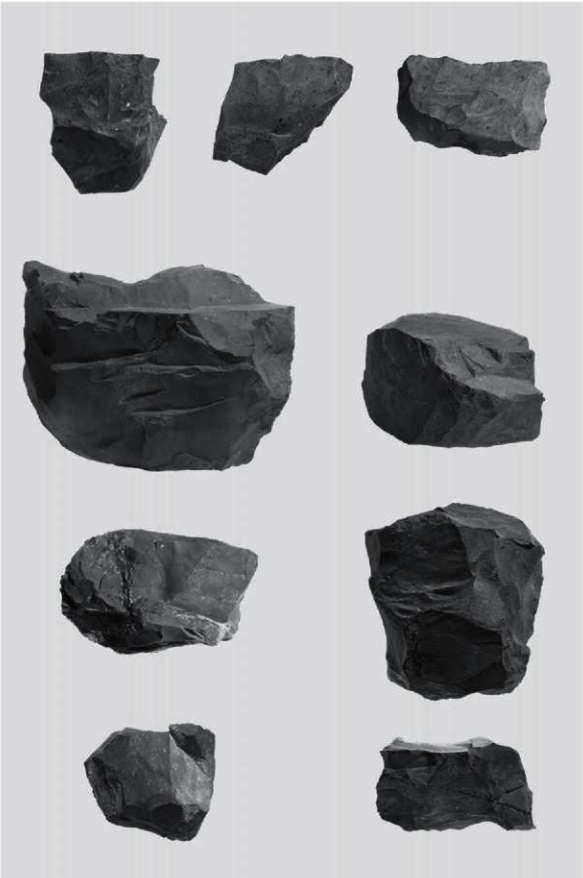




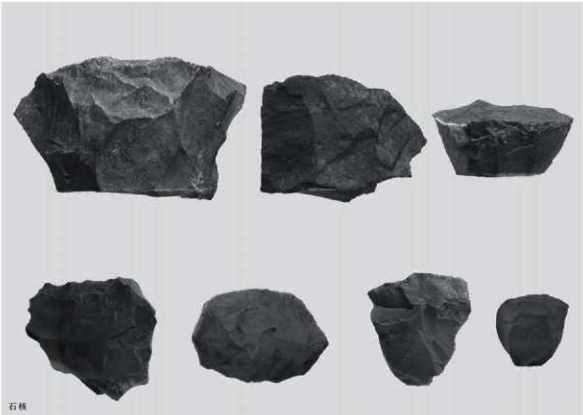
磨石　敲石

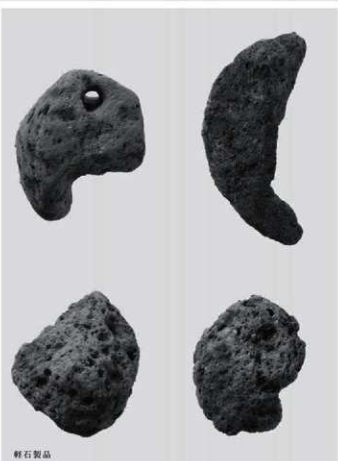


石核

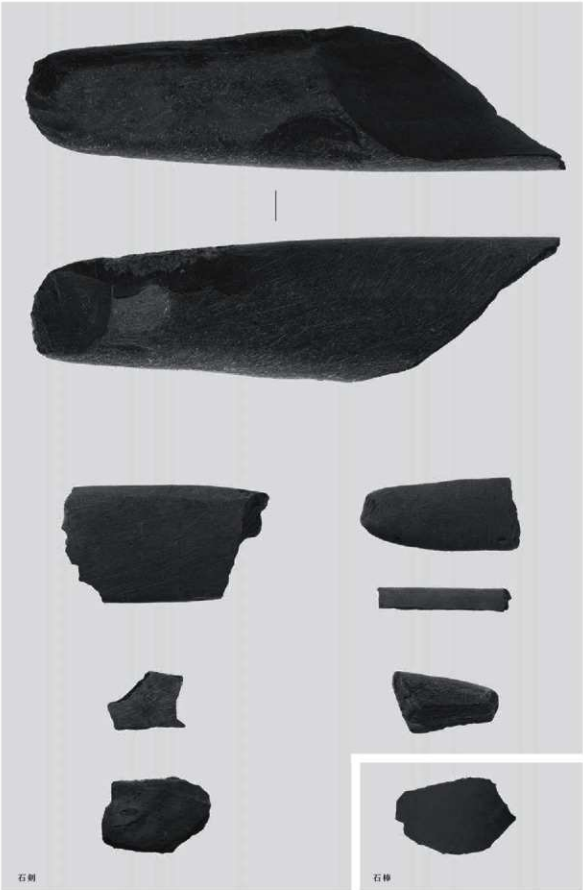


石核

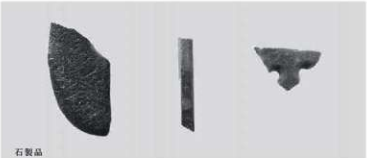


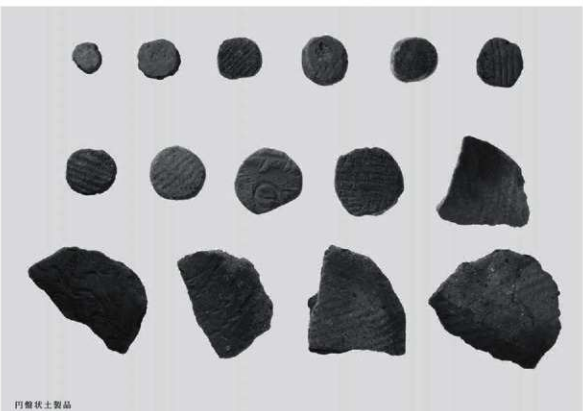


石核　異形石器　軽石製品



石剣　石棒





石製品　ミニチュア土器　土偶　円盤状土製品

（1）2 区表土除去

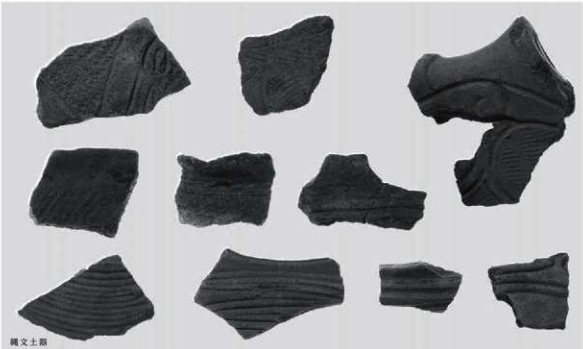
（2）1 区全景（北より）

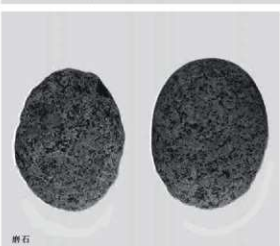
（1）2 区西半部全景

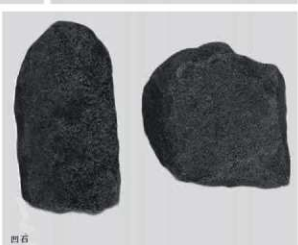
（2）調査区北壁西半部

（1）調査区北壁東半部

（2）作業状況







縄文土器　土偶　磨製石斧　石棒　礫器　磨石　凹石

（1）調査前状況

（2）調査区全景（北より）

(1) SI 1 全景（北西より）

(2) SI 1 炉（西より）

(1) SI 1 炉検出状況（西より）

(2) SI 1 炉検出状況（東より）

(1) SI 1 炉断面

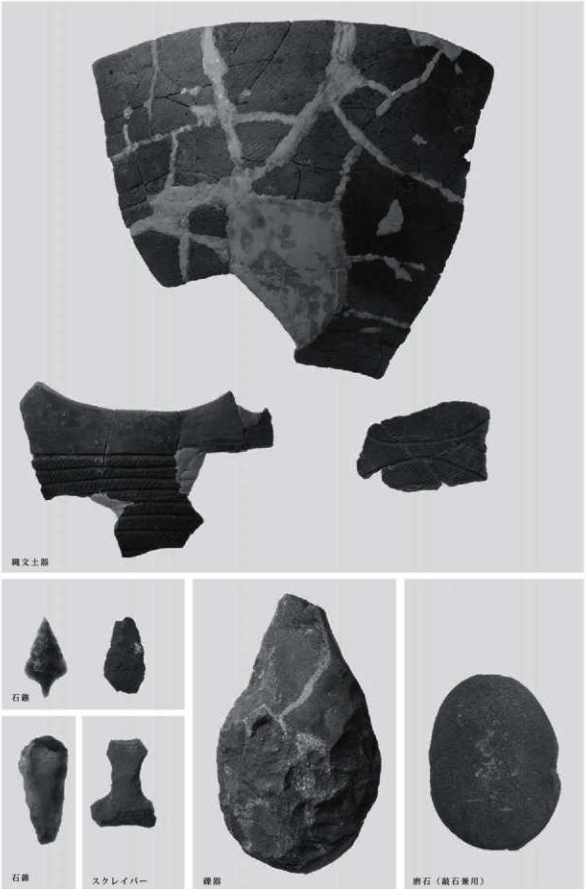
(2) 沢（自然流路）土層断面

(1) SK 1 全景

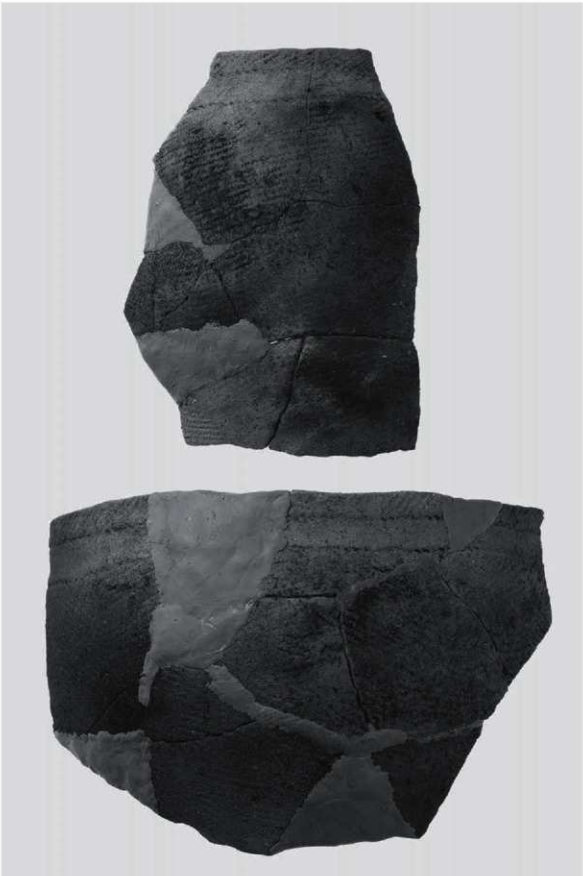
(2) SK 1 遺物出土状況

(1) 作業状況

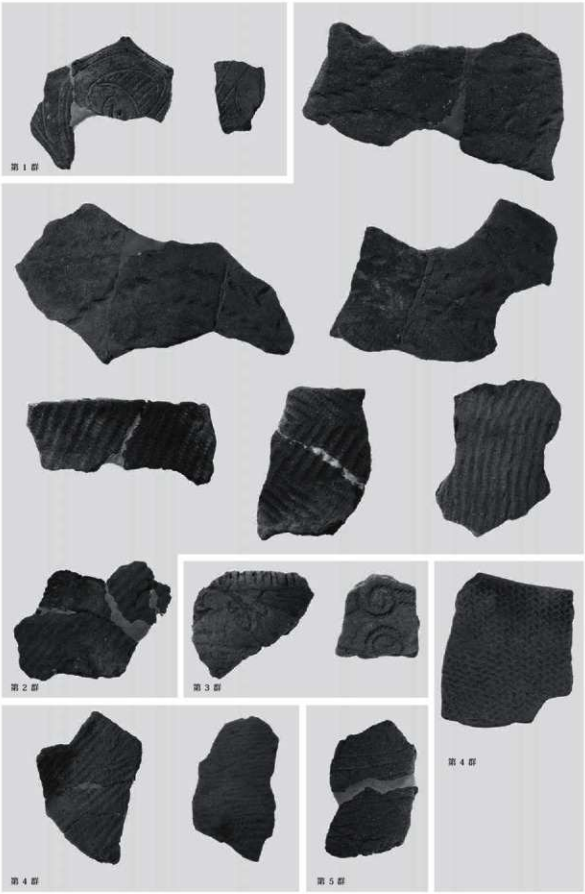
(2) 作業状況



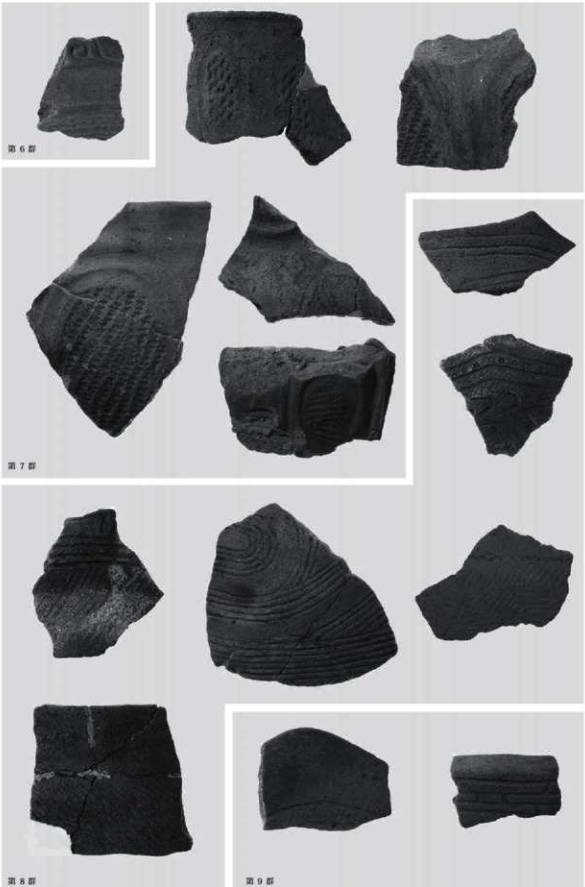
SI 1 出土縄文土器　石鏃　石錐　スクレイパー　礫器　磨石（敲石兼用）



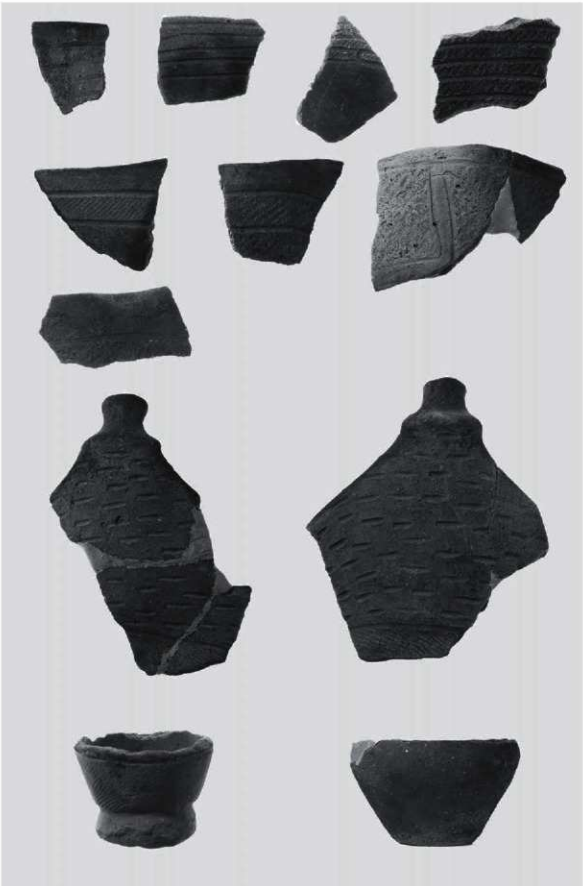
SK 1 出土縄文土器



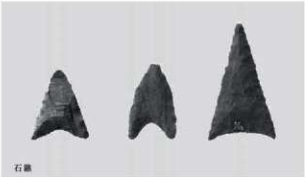
第 1 群　第 2 群　第 3 群　第 4 群　第 5 群土器



第 6 群　第 7 群　第 8 群　第 9 群土器



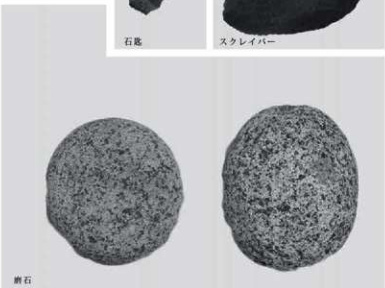
第 9 群土器


石鏃

石匙

スクレイパー

磨製石斧


磨石

礫器

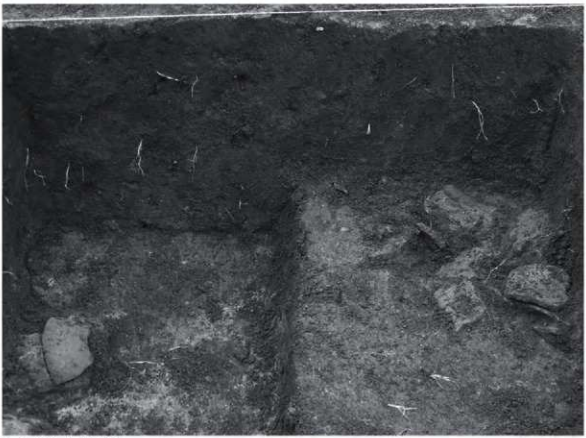
凹石

敲石

石鏃　石匙　スクレイパー　磨製石斧　礫器　磨石　敲石　凹石

（1）調査区近景

（2）SI 1 全景（南より）

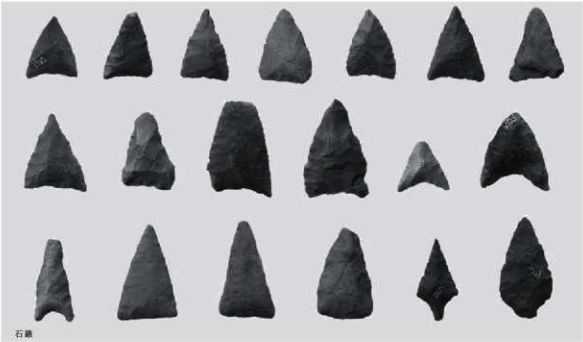


（1）遺物出土状況

（2）遺物出土状況

SI 1 出土土師器　土製紡錘車

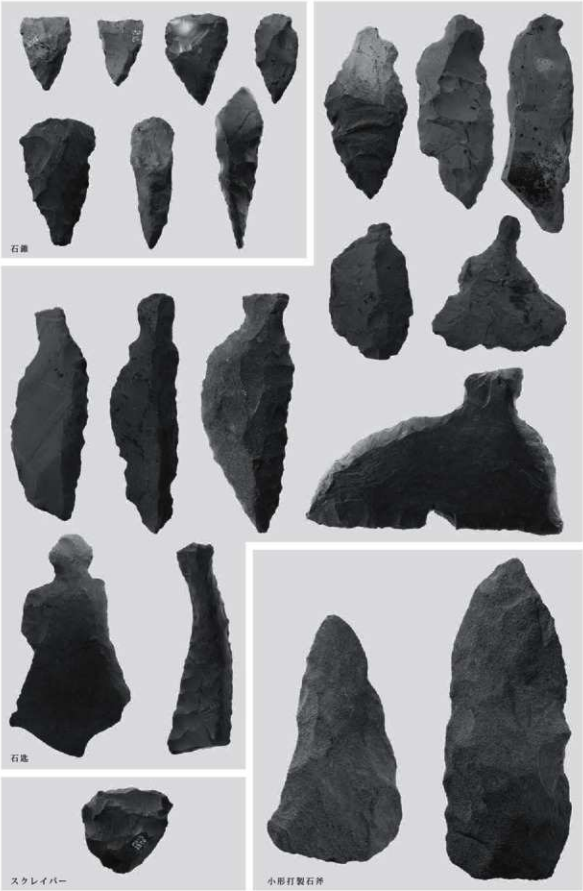
縄文土器


石鏃

尖頭器

石槍

縄文土器　石鏃　尖頭器　石槍



石錐　石匙　スクレイパー　小形打製石斧

報告書抄録

ふりがな	うんなん・うそざわかいづか・かんざき・みっかいち
書名	雲南・獺沢貝塚・神崎・三日市Ⅱ遺跡発掘調査報告書
シリーズ名	陸前高田市文化財調査報告
シリーズ番号	第33集
編著者名	佐藤典邦　松崎哲也
編集機関	陸前高田市教育委員会
所在地	〒029－2292　岩手県陸前高田市高田町字鳴石42－5　TEL:0192-54-2111
発行年月日	2018年9月14日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積㎡
うんなんいせき 雲南遺跡	陸前高田市小友町 字雲南20－1	03210	NF78－1214	38° 59′ 23″	141° 41′ 22″	2013年 5月22日～7月9日	113.6㎡
うそざわかいづか 獺沢貝塚	陸前高田市小友町 字獺沢64－1	03210	NF78－1067	38° 59′ 05″	141° 40′ 11″	2013年 8月29日～9月13日	234.67㎡
かんざきいせき 神崎遺跡	陸前高田市気仙町 字神崎98－1	03210	NF66－0368	39° 1′ 15″	141° 36′ 52″	2013年 10月3日～11月22日	451.5㎡
みっかいちにいせき 三日市Ⅱ遺跡	陸前高田市小友町 字三日市21－10	03210	NF68－2198	38° 59′ 59″	141° 40′ 56″	2013年 12月17日～12月28日 2014年 1月4日～1月15日	53.75㎡
調査原因	個人住宅建築						

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
雲南遺跡	集落跡	縄文時代前期		縄文土器・石鏃・石槍 石匙・石核	大木6式が多く出土した。
獺沢貝塚	貝塚	縄文時代晩期		縄文土器・土偶	貝層の検出なし
神崎遺跡	集落跡	縄文時代後期	竪穴住居跡1棟	縄文土器	華燭土器が出土した。
三日市Ⅱ遺跡	集落跡	奈良時代	竪穴住居跡1棟	土師器・土製紡錘車	8世紀後半の土器

陸前高田市文化財調査報告　第33集

雲南・獅沢貝塚・神崎・三日市Ⅱ遺跡発掘調査報告書

印刷　平成30年9月12日
発行　平成30年9月14日

編集・発行　陸前高田市教育委員会
〒029－2292　岩手県陸前高田市高田町字鳴石42－5
TEL:0192－54－2111

印刷　有限会社　第一印刷
〒029－2203　岩手県陸前高田市竹駒町字相川1－1
TEL:0192－55－5155